

---

# 時渡りの姫巫女

藤戸志乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時渡りの姫巫女

### 【Zコード】

Z7359S

### 【作者名】

藤戸志乃

### 【あらすじ】

リイナは村の少女誰もがあこがれる「姫巫女」に選ばれた。村で行われる祭りで剣士と姫巫女の舞を踊るのだ。誰もがあこがれる姫巫女役。

そして相手役の剣士は、次期領主であり、首都エドヴァルドで騎士として活躍している、あこがれのヴォルフ。

彼は手の届かない存在。

それでも、舞いを踊る今だけは、いじわるで、でもやさしい、リイナの剣士。

けれど、リイナの出生には秘密があった。

神殿がリイナの平凡な人生を狂わせる。

「ヴォルフ様に、罪を背負わせるわけにはいきません」

「姫巫女守るのが、剣士の役目だろ？ 僕の役目を取り上げる  
な、俺の姫巫女」

その言葉にすがりたい、すがってはいけない。

リイナは彼の手を取るのをためらった。

時の流れに翻弄されながら、一人はその距離を縮めてゆく。

## 登場人物 説明（前書き）

ちょっとゆるめの説明で。  
もし、すぐに忘れちゃうよ、な言葉など、記しましたが、じ一報下  
さい。

## 登場人物 説明

リイナ アレント	登場人物
ストレートのさらさら金髪、翡翠の瞳。 15歳。	
姫巫女に選ばれて、うきうき 仕事は染物屋さんでレースや刺繡	
を主に請け負いながら、縫い物をしている。	
グレンタール	地名
リイナが育つた村 エドヴァルドからカルコシュカにつながる陸路の途中にある山間の村 エドヴァルドに次ぐ大きな神殿がある。	コルネア 国の名前
港町	エドヴァルド 首都
カルコシュカ	

**ヴォルフ クロイツァ**

20歳。黒髪 色素の薄い青灰色の瞳。グレンタール領主の息子。エドヴァルドで騎士として仕える身。1年の半分以上をエドヴァルドで過ごす。

**ラーニャ**

21歳。ヴォルフのおさななじみ。ヴォルフと4年間姫巫女の舞を舞つたパートナー。リイナのあこがれの女性。すんごい金髪美人。

**アヴエルタ**

リイナが働いている染物屋の店主。

**カルスト**

染物屋の染物職人。アヴエルタの夫

**コンラート アレント**

リイナの父。グレンタール神殿の守人。（実は若いよ37才）

**ラウラ アレント**

リイナの母。グレンタール神殿の守人。（とっても若いよ31才）

ビアンカ（16）、ローリア（14）、ベレディーネ（17）  
リイナと年の近いグレンタール神殿の巫女。

**エンカルト（34才）**

時渡りの神殿の神官。コンラートと何か確執が……？

## 造語な名詞

時渡りの神殿  
コルネアの国教

時渡りの姫巫女  
時間を渡ることが出来ると言われている巫女（タイムトラベル出来ちゃう）  
けれど、300年前に出現して以来、時渡りの出来る姫巫女はいなくなつた。  
現在は先読みや過去見の姫巫女しかいない。

## 剣士と姫巫女の舞

グレンンタルの祭りで、神殿に奉納する舞。300年前、グレンタルを興したと言われる伝説の姫巫女と剣士の物語が描かれている

## 紫泉染しせんぞめ

グレンンタルでしか作られていない紫色の染め物。この衣を纏うことが出来るのは、神殿の高位の者だけ。

## 守人

神官や巫女の補佐をする人たち。神事以外の雑務を一手に引き受ける

## 守石

不思議な水晶



## プロローグ

ドン……！ ドン……！

まもなく、姫巫女の奉納の舞が始まる。

太鼓の音が大きく響き渡り、グレンタール中に祭りの要である舞の奉納が始まることを知らせる。

「わあ！！」

広場の歓声が響いてくる。

グレンタールの始まりを伝える舞が、グレンタールの発展を祈願する者たちの願いによって舞われる。

去年の祭での剣士と姫巫女の舞は美しく、切なく、剣士と姫巫女の再来とまで言われるほど見事な物だった。恐らく、後世にまで語り継がれるだろう。

今年の剣士と姫巫女は……。

彼女は、その喧騒を窓の外に聞きながら、一年前の祭りへと思いを馳せていた。

全ての始まりは、一年前の、あの祭りの頃だった。  
窓の外に、舞の音が響く。  
祭りが始まろうとしていた。

# 1 選ばれた少女

シャン……！！

目を閉じて記憶をたどれば脳裏に響く鈴の音。

五年前のあの日、得体の知れぬ懐かしさが少女の胸を襲った。美しい姫巫女の少女と、少年の域を超えないが、それでも雄々しく剣士役を舞う彼の姿。

姫巫女を守るように、そして戦つように、少年が剣を持って舞つた。

あのとき、胸が熱くなつた。こみ上げたのはたとえようのない愛しさと懐かしい。

少女はなぜ、そんな気持ちになるのか分からなかつた。その前年の舞では、そんな気持ちにはならなかつたのだから。ただ胸を締め付けるように、その舞が少女の小さな胸を痛ませたのだ。

その夜、何度も、何度も姫巫女の舞を思い返し、少女は眠りについた。

彼女の守石が、ぽうっと、淡く輝いたが、そのことに、誰も気付かなかつた。

リイナは五年前のあの日を思い返しながら機嫌良く足を進める。頬も自然とゆるむし、進める足も軽やかだ。

あの、あこがれの姫巫女役に、リイナは選ばれたのだ。  
祭りの音色が遠くに響く。

今年の姫巫女役に選ばれた思いがけない幸運に、初めての練習へ向かう足も軽い。

今日は早々に仕事も終わらせ、そわそわする彼女を、店主のアヴエルタが笑いながら送り出してくれた。

「そんなに浮かれてちゃ、ろくなレースの仕上がりにならないよ」手の動きがちょっとあやしくなりながらレースを編んでいるのをのぞき込んでアヴェルタが言つた。

そうして笑つた声は、意外にもうれしそうな物だった。彼女もまた、リイナが姫巫女に選ばれたことを喜んでくれていたのだ。

ふたつき  
二月先には、時渡りの祭りがある。グレンタールでは、その祭りに向けての準備で今年は例年以上に活気づいていた。

時渡りの祭りは姫巫女を讃え、この村の豊穰を願う祭りだ。そして、今年はその祭りの三百年祭に当たる。

大きな区切りの祭りとして、なんと、今年は王族までやつてくるといわれているのだ。

村中が、浮き足立つのも当然と言えた。

祭りでは剣士と姫巫女の舞が奉納される。舞はグレンタールの始まりを伝える内容だ。

三百年前に現れた姫巫女と、彼女を護り、グレンタールを興した剣士との物語。

その舞は村の少女の一人が姫巫女役に選ばれ、剣士役に選ばれた青年と舞うのだ。

しかもそれが恋物語ともなれば、村の少女達にとつて、格好のあこがれとなる。

この村の少女なら誰もが夢見る姫巫女役。そして、剣士役は村一番の有望な青年が選ばれるのだから、あこがれる気持ちも更に強まるという物だ。

そして、姫巫女役を舞つた乙女は、村の少女からの羨望とあこがれの的となるのだ。

去年までの四回姫巫女を務めたラーニャは「姫巫女の再来」とまで謳われ、美しい容姿と舞でもつて村人を魅了していた。

今日はその彼女と初めての顔合わせの日だった。

ついに、あこがれのラーニャさんと！

リイナの顔は自然とゆるむ。本当に美しい人なのだ。

今年は三百年祭という区切りの祭りもあるから、きっと彼女が姫巫女になると思っていた。

しかし彼女は二十一才になつたことと、四度も姫巫女を務めたこととで、その役を降りることとなつた。通例として姫巫女は毎年変わる。多くても一度までだったのだが、ラーニャの人気はその通例さえ覆してしまつほどの人気だつたのだ。彼女はそれほどまでにグレンタルの民から求められた姫巫女役だつた。

そんなラーニャだから、彼女は村の少女達のあこがれでもあつた。そのラーニャにこれから舞を教わるとあって、リイナはビキビキする胸を押さえながら足早に向かつていた。

ずっと子供の頃からあこがれていた姫巫女の彼女に会えると思うと、リイナの心はたまらなく浮き立つのだつた。

緊張もある。自分にあの大役が務まるのか。ましてや、あのラーニャの後を引き継ぐ姫巫女ともなると、荷が重いのも事実。けれど、それ以上の期待とあこがれに満ちて、リイナは響く音色に向かい歩んでいった。

## 2 剣士との出会い

「おはようございます」  
リイナが声をかけると、立ち話をしている大人の中から女性が一人歩み寄つてきてにつこりと笑つた。

「おはよう、あなたがリイナね。私はラーニャよ。よろしくね」  
なんて綺麗な人だらうと思つた。遠くで見るよりも、ずっと綺麗。華やかな……大輪の花を思わせる笑顔。リイナの胸は期待に高まる。

「はい！ よろしくお願ひします！」

ラーニャの親しみを込めた声に、リイナはうれしくなつて声を弾ませてぺこりと頭を下げる。

「クッ……」

後ろから低い笑い声が聞こえた。

振り返ると青年が一人、二人を見て笑つている。いや、笑つているのはリイナを見てか。リイナも良く知つていてる顔だつたが、こうして面と向かつたことは初めてだ。

どうして、この人が……。

リイナは驚いて彼の顔を見つめる。今日は、彼に会つ予定はなかったはずなのだ。

青灰色の瞳がリイナに向けられている。

視線が合つてどくんと、胸が締め付けられた。訳の分からぬ感情が、苦しいほどの圧迫感を持つてこみ上げてきた。

苦しい。

どうして、こんなに……。

戸惑うほどに衝撃を受けているリイナの目の前でラーニャが動いた。

「ヴォルフ」

青年に向けてラーニャがにつこりと笑顔を向ける。

ヴォルフ・クロイツァ。

彼こそが今年の剣士である、リイナの相手役。今年で五度目の剣士でもある。これまでラーニャとはずっと一人で剣士と姫巫女としてやってきた。

リイナが、そして村中の女の子達があこがれでいる人だった。

姫巫女にあこがれるのと同じ強さで。そして夢見る恋人として。リイナにとつてヴォルフは、身近だけどここまで遠い存在としてあこがれる、そんな存在だった。

幼い頃、初めてヴォルフの舞を見たときの衝撃は、忘れられない。そんな二人は美男美女で、幼馴染み。一人の恋仲もさせやかれるほど仲も良い。しかしヴォルフは浮き名も多く、騎士として首都エルヴァルドにいることも多いらしく実際のところはどうなのかよく分からぬ。

姫巫女役と違い、剣士役は何度か続けることが多いが、それにしても五度というのは長い。十五才という最年少で剣士に選ばれ、以降剣士役を続けている。

当時は姫巫女より一才若い剣士と言つことで異論もあつたらしいが、十五才とも思えぬ立派な体躯と、見栄えのする整つた顔、そして剣術も長けていたこともあり、彼が選ばれた。また、先の剣士役がヴォルフを気に入つて強く押したというのもあつたらしい。

ヴォルフがグレンタール領主の息子であることも強く反対されることのなかつた理由の一つかもしれない。

リイナは子供の頃に初めてヴォルフとラーニャの舞を見たときのことと思い出していた。

そうだ、と、リイナは思い出す。さつきヴォルフと目があつた瞬間の胸の苦しさに、覚えがあつた。

あのときの感情だ。初めて一人の舞を見たときの、どうしようもなく胸が苦しくて、涙が出そうなほどに苦しくて、悲しいような、けれどとてもなく幸せなような、体を突き抜けるような衝撃。

あのときから、ずっとあこがれ続けている、姫巫女の剣士。

その人が、目の前にいる。

リイナが見つめる先でヴォルフが口端をゆがめるように笑った。

「今年の姫巫女は、ずいぶんと可愛らしくなったな」

からかうような口調に、幾分先ほどまでの感動をくじかれ、リイナは少しむつとしてヴォルフを見つめ返す。

確かに私はラーニャさんみたいに美人じゃないけど  
言い返そうとしたが、先にラーニャが一步踏み出してからかうよう言つた。

「あら、それはどういう意味？ 年増の姫巫女とせよなら出来てうれしいって事かしら？」

「そういうひがみは可愛くないな。俺がおまえのことびつ黙つててか知つてるくせに」

にやりと笑つて、挑発するようにヴォルフがラーニャを見た。  
やつぱり、仲良いんだ……。

割り込めない雰囲気に、リイナは少し寂しく思つてしまつ。どこか冷たささえ感じる色素の薄い冴え冴えとした青灰色の瞳が、ラーニャに向けて優しく笑つていた。ずっと憧れていた一人の、割り込めない雰囲気に、その近くにいられるうれしさ誇らしさとは別に、わずかな疎外感を感じる。

すると、それを払拭するかのように親しげに話していくラーニャが振り返つた。

「リイナ、知つてゐるでしょ？ けど、今日からあなたの剣士となるヴォルフよ。時々口は悪いけど、根はそれほど悪くないから。何かあつたら私に相談してくれたらいいわ」

「はい、ありがとうございます」

リイナはうれしくなつてラーニャに笑顔を向けた。

ずっと憧れていた一人が目の前にいる。それだけでも今はうれしいことだとリイナは一人から向けられる笑顔を受け止めながら、今この幸運をかみしめる。

ずっと憧れていた剣士であるヴォルフは、なんだかイメージが違うけれど。

近くで見ると、舞台で見た剣士とは違つ、生身の男の人で、そしてずっと親しみやすいような気がした。

彼はまだ年若いとはいえ、村人からの信頼も厚い。そんなヴォルフが相手となれば、気後れしてしまうかもしれないと思っていたが、さつきの思いがけない最初の一言に、リイナの肩の力も抜けたような気がした。

何か、さつきはからかわれた気がするけど、やっぱり、ヴォルフさんと一緒に舞が出来るなんて、うれしい事よね。

リイナは、前向きに考えることにした。

「リイナです、よろしくお願ひします、ヴォルフ様」

「ああ、よろしくな、ちびちゃん？」

ちびちゃんという言葉に、リイナは思わず反応する

「ちびちゃんなんて呼ばれるほど子供じやありません」

「ほう。じゃあ、いくつだ、おちびちゃん」

「十五才です！　ヴォ、ヴォルフ様が初めて剣士したのと同じ年です！」

ちびちゃんと呼ばれるぐらい背は高くないのも分かつてゐるし、五歳も年上のヴォルフから見たら子供に見えるのも分かつてゐる。でも、でもつ、あこがれの人には、そんな呼ばれたされたたくないものつ

真っ赤になつて叫び返したリイナを見て、ヴォルフとラーニャが二人して顔を見合させて吹き出した。

「ラーニャさんまで……」

ひどい……。リイナは何と言い返そつかと困りながら笑つてゐる一人を見ていたが、見ていくうちにリイナもなぜかおかしくなつてきて、思わず笑つてしまつた。

憧れていた二人が、優しく迎え入れてくれたのがわかる。二人の

笑顔は暖かい。

リイナは一人と顔を見合わせて笑いながら、心が温かく満たされるのを感じていた。

「よろしく、リイナ」

ヴォルフが頭をくしゃつとなでた。その態度も子供扱いだな……と思いつながらも、やつぱりリイナの心はほわっと温かくなる。ラーニャも楽しそうに笑っている。

なんだかうれしかった。華やかな一人を見ていると平凡な自分には少し場違いな気持ちもあった、でも、受け入れてもらえた……その事が、とてもうれしかった。

「じゃあ、これからじごくから、覚悟しておいてね」

そんな淡い喜びを打ち碎くように、ラーニャがにっこりと迫力のある笑顔を向けてきた。

「俺の姫巫女がへばらない程度に頼むぞ」

たたみかけるよつに、ヴォルフがからかってくれる。

「が……がんばります！」

泣き笑いになりながら、うれしそと、プレッシャーにリイナは返事を返した。

### 3 舞いの練習

グレンタールは首都エドヴァルドから離れた小さな村であったが、時渡りの祭りは決して、小さな祭りではなかつた。

グレンタールはエドヴァルドから港町カルコシュカをつなぐ主要街道の外れにある。街道から少し山奥に入るが、山間部の温泉の出る湯治の村としての需要もあり、それなりに栄えた村でもあつた。なにより時渡りの神殿は王家を支える最も大きな勢力であり、また、王家の婚姻の際には神殿の姫巫女を迎えることもあるほど、王家そして国に対する神殿の影響力は大きい。その時渡りの神殿の聖地は首都エドヴァルドにある。しかし、その次に大きな神殿はこの小さな村、グレンタールにあるのだ。

神殿の巫女は、必ず一度はグレンタールの神殿での修行を終えなければならず、グレンタールにある神殿の影響力は、非常に大きな物だつた。

時渡りの神殿は、その名の通り、時を渡る力を持つ神を奉つている。現在では、その力を持つ者はいないが、それでも過去や未来の時の流れを読む者が輩出され、巫女として存在する。数百年前には事実、その身を過去へ、未来へと時を渡させていた巫女達もいたといふ。だが、その力は数百年前に途絶えていた。

ところが、三百年前にその身でもつて時を渡ることの出来る姫巫女が再来した。彼女は、彼女を守る剣士と共にこの地に移り住み、神殿を建て、グレンタールという村そのものを一から興した。

その大きな力を持った姫巫女により、村は小さいながらも、発展していくつた。

グレンタールは山間の小さな村であるが、神殿を支える有力な村でもあつた。

今年はグレンタールが、そしてグレンタール神殿が生まれて三百

年田に当たる。

その日から早速舞の練習が始まった。

「まずは、とにかく舞の流れを覚えてもらひから。明日までには全部覚えてもらうわよ」

「はー」

覚悟を決めてラーニャと向き合つた。

求められるレベルが高くて、ずいぶんと厳しかつたが、ラーニャの説明は分かりやすく、的確だつた。

繰り返しやりながら、みづやく舞の流れをだいたいつかめるようになつてきたときだつた。

「そろそろ今日は終わりにしたらいづだ?」

ヴォルフだつた。

リイナの心臓はじきんとはねる。何度見ても緊張する。あこがれていた人が側にいて話も出来るといつのは、何とも不思議な気分だつた。

ヴォルフは姫巫女と舞を合わせるようになるまでは祭りの準備を中心にしているらしい。そちらが一区切りついたのだろう、二人に歩み寄つてきた。

「そうね。思つた以上にこの子、勘が良いわ。予定より進んでいるし、ちよつと良い区切りね。ヴォルフ、楽しみにしておくといいわ。早くに舞を合わせることが出来そうよ」

ラーニャの言葉に、ヴォルフがからかいつゝことやつと笑つた。

「そうか、それは楽しみだな。おまえのお墨付きとは珍しいこともあるもんだ」

「あら、どういう意味かしら」

「やにせと笑いながらからかうヴォルフに、ラーニャが心外そう

に眉をひそめた。けれどそんなやりとりにも、一人の間の親しさはにじみ出ている。

「おまえは、厳しいからなあ……おまえが褒めるのを初めて聞いた気がするな」

「あら、人を鬼みたいに言わないでくれる? でも……そうね、私、この子が気に入つたもの。可愛いわ」

ラー二ヤはリイナを引き寄せ抱きしめると、頭をなでた。  
一人の親しそうなやつとりにあこがれと、懲りとでどきどきして  
いたリイナは、突然のラー二ヤの行動に驚いて顔を上げる。そこで  
につこりと笑つたラー二ヤと田口出会つた。

「うわ……」

間近で見るラー二ヤは非常に美しかつた。  
感激でリイナの顔が輝いた。

「私も、ラー二ヤさんが大好きです! -」

きゅうっと抱きしめ返すと、楽しそうに笑つラー二ヤの声と、ヴ  
オルフの笑い声が聞こえた。

「愛の告白は結構だが……せつかく田の前にいい男がいるのに女同  
士とは不毛なことだな」

ヴォルフのからかうような声に、リイナは憤然として言い返す。  
「いいえ、ラー二ヤさんは、私たちの間ではあこがれなんです。こ  
うして、一緒に過ごして、本当にステキな人だつて、実感したんで  
す。だから……」

力説を始めたリイナに、ヴォルフが吹き出して笑い出した。

「そう真に受けるなよ、おちびちゃん。まあ、真に受けて女同士を  
やめて俺に抱きついてくれても良いけどな」  
それはそれで役得だ。

そう言つてヴォルフがリイナをのぞき込んで笑う。リイナの顔が  
ボンと赤くなつた。

「あら、今まで特定の相手を作らなかつたと思えば……リイナが好  
みなの?」

ラーニャがリイナを抱きしめたままヴァルフをからかう。ふむ……、とヴァルフがリイナをじっと見つめた。

その視線にじきつとする。

「そうだな……そのあたりがもう少し成長していれば、何とか範囲内なんだがな……」

と、胸を指す。

「ヴァルフさま……」

リイナが叫んだ。その顔は真っ赤だ。

「ははは。二、三年後を楽しみにしているから、気合を入れて成長してくれよ？ おちびちゃん」

「ちびちゃんって言わないで下さい！」

ついでに胸を指しながら言わないで下さい！

「そんなところはすぐ大きくなるわ、気にしなくとも大丈夫よ」

ラーニャまで笑いを含んだ声で言つ。

「ラーニャさんまでつ……気にしてるのにい～……」

リイナのぼやきに、二人が声を合わせて笑った。

「ただいまー」

帰ると今日は母のラウラが家にいた。

「お帰り。どうだった？ 舞の練習は」

「大変だったけど、楽しかったのよ。ラーニャさんとヴォルフ様にもお会いできだし！ あんな間近で見ると、本当に美男美女で迫力なのよ！」

興奮しながら話しかめた娘を、ラウラは愛おしそうに見つめる。「でね、ヴォルフ様ってばひどいのよ。私の事、子供だつてからかって。祭りで舞を見たときは、本当に優しそうに見えたのに！」文句を言いながら、けれど言葉とは裏腹に話す相手への好意がにじみ出している。

それをクスクスと笑いながら聞いていたラウラは、ふと、田の端に映ったそれを見て、わずかに笑顔が固まった。しかしすぐにそれをリイナに気付かれないように隠すと、彼女はリイナの話を聞き終えた後、ゆっくりと言葉を選びながら話し始めた。

「でもねえ……。やっぱり、お母さん、心配だわ。リイナが舞を奉納するだなんて、しかも三百年祭よ？」

「もう！ お母さんったら、その話はもうおしまいだつて言つたじゃない」

リイナが口をとがらせた。

姫巫女役に決まつたときから、両親は一人してリイナが姫巫女役を受けることに反対をしていた。

両親は一人ともグレンタール神殿で守人をしている。この祭りの時期は特に忙しそうにしているのだが、今年は三百年祭とあって、忙しさもひとしおだつた。それ故に大変さを心得ているのだ。

「それに、もう、お受けしたんだし、練習も始まつたんだから、応援してよね」

頬をふくらませて言うリイナに、ラウラは「そうね」と笑顔を浮かべたのだが、その顔はわずかに浮かない。

「お母さん、心配しますぎ」

ラウラはもう一度「そうね」と笑った。

そして、リイナが皿を背けた先で、ラウラはそっと皿の端に守石をとらえた。

時渡りの神殿でも祀られている、守石と呼ばれる水晶。

ラウラは、リイナが舞の練習の話をしている間にそれが淡く光のを見た。守人として神殿に仕えるラウラは、その意味を知っていた。大丈夫……。大丈夫。あの程度なら、きっと……。

リイナは、母親が何を恐れているのかを、まだ知らなかつた。

「どうだい、舞の方は」

店主のアヴェルタに声をかけられ、リイナは手を止めて彼女を見上げる。

この日リイナは午前中は仕事で、午後からは店番をしながらレスを編んでいた。もう少ししたら舞の練習のために早く抜けることになつていて。

「すっごく、楽しいです！」

「そうかい。リイナは、さぞかしかわいい姫巫女になるだろうねえ。ちゃんと衣装に使う刺繡もしているんだろうね。今編んでいるのは、ベールに使うレースかい？」

「はい、見てもれますか？」

リイナは得意げに、姫巫女の舞に使うベールをアヴェルタに見せた。

「へえ、良いじゃないか。リイナらしい、かわいい花のモチーフだね。これなら、姫巫女様に献上しても恥ずかしくない仕上がりになるね。祭りが今から楽しみになるよ」

「がんばります！」

満面の笑顔でうなづくリイナを、アヴェルタが目を細めて見つめ

る。

かわいいこの店の看板娘だ。染物屋をしているアヴェルタの店では、神殿でしか使うことを許されない紫泉染しせんそめをしている。村の大きな産業の一つだ。その中でもこの店は、最もその技術を評価され、最も神殿からも信頼の厚い染物屋として注文を受けていた。

染め物をするのは、アヴェルタの夫のカルストだが、職人肌の彼は店に顔を出すことはほとんどない。店を一手に引き受けるのは、それらを使って針子をするアヴェルタだ。そのアヴェルタと共に店の一隅で、リイナが仕事を始めて三年。

神殿の守人を両親に持つ彼女が、まさか村の中で仕事を持ちたいと思っていると知らなくて、声をかけられたときはアヴェルタも驚いた物だった。

神殿の守人は、神殿での雑事から政まで、仕事内容は多岐にわたる。その中でもリイナの両親は地位が高い事が知られている。その割に気さくで人当たりが良く、グレンタールの住民からは信頼も厚い。当然リイナも神殿の守人になるだろうと、親しい人は誰もが思っていたのだ。守人は、コルニア国内のどこへ行つても必要とされるため、あこがれの仕事であるからだ。

なのになぜだかリイナは守人になろうとはしなかった。両親が反対したからだとアヴェルタは聞いていたが、リイナ自身も村の中で仕事を持つことを望んでいたらしい。

なぜ染物屋にしたのかと聞くと、「手に職をつけたかったの」と、リイナは言っていた。が、十二才の子供が安定した守人よりも針子を選ぶからには、だいぶ幼い頃から両親がそうし向けていたのではないかとアヴェルタは思っている。大人の入れ知恵がないと、とてもじやないがこんな選択にはなるまい。

こんな田舎とはいえ仮にも国内で一番目に大きな神殿である。権力争いや、黒い事情もそれなりにあるのだろうと、勝手に想像した物だった。

ともあれ、それが今では、アヴェルタの技術をしつかり引き継い

で、立派なお針子として良い仕事をするよくなっている。

リイナの刺繡もレースも纖細でとてもかわいらしく、若い女性から特に好まれていた。

「さて、そろそろ練習の方に行くかい？」

「はい、きりの良いところまで来たので、上がらせてもらいます」

リイナは言うと、裏の染め物小屋の方にも足を向ける。

「カルストさん、お疲れ様でした！」

仕事をしているカルストに手を振ると、無愛想な染物屋の主人はリイナを見て優しく目を細めてうなずく。リイナはペコリと頭を下げると、アヴェルタにも「お疲れ様でした」と頭を下げ、店を出た。

「がんばっておいで」

手を振る店主に、リイナも手を振つて練習場へ向かった。

## 5 舞いの練習2

練習を始めて半月が過ぎた。この頃にはリイナもラーニャから及第点をもらえるまでに覚えていた。こつから完成度を上げていくのよ？ と、ラーニャから壯絶な笑顔をもらっているのだが、練習は大変でありながらも、リイナは充実している。

ラーニャとは出会つて間もないとは思えないほど急速に親しくなつていた。

お姉さんがいたらこんな感じかな。

そう言つて信頼の目を向けるリイナを、ラーニャもかわいがつた。そして、まだ本格的には舞を合わせることはしていない物の、姫巫女と剣士の動きが密接に絡む部分では、ヴォルフからも舞を教わつたりもしていたため、彼とも自然と一緒にいる機会が増えている。この日は、初めての、ヴォルフと舞う通し稽古だった。

ヴォルフと舞を合わせるのは緊張するが、どこかくすぐつたいようなうれしさがある。

所々ヴォルフと合わせた舞の中には、剣士に抱き寄せられるようにして体を支え合いながら舞う場面もある。

男人の人から、そんなふうに触れられたことのないリイナには、あまりにも刺激的で、真っ赤になりながらの練習となつたあの日。

「抱き寄せただけでこんなに真っ赤になる初々しい姫巫女とは、俺も役得だな」

練習の後に、からかうようにヴォルフが笑つた。

「あんな近くに、ヴォルフ様の顔があると、誰だつて緊張しますー」と、うつかり叫んだリイナに、ヴォルフが吹き出す。

「そこまで直接的にはつきりと、そんな事を言われたのは、初めてだな。よし、そうだな、ちびちゃん、もう少し、俺に慣れようか？」  
リイナがえつと体を引いた。

「ヴォルフ様が言つと、なんだかいがわしいですー！」

「失礼だな。ちょっと抱きしめる練習をするだけじゃないか」

「そ、それをいかがわしいと言つんじやないかと……うひゃあ！」

リイナの腕が引っ張られ、その体が逞しい腕に捕まえられる。そこへ楽しげな声が降ってきた。

「ふむ、やっぱり、ちびちゃんは小さいな。ついでに色氣もないじゃないか。もう少しかわいい叫び声を聞いたかつたんだがなあ？」

俺の姫巫女？」

にやにやと笑う、ヴォルフに背中から抱きしめられ……というより、捕まえられた格好で、リイナは腕から逃れようと慌てた。それをヴォルフが押さえると、わしゃわしゃと髪を撫でる。

「そんなに嫌がるなよ、ちびすけ」

どう見ても、子供を捕まえてからかっている大人のようで、甘い感情はどこにも見えない。

ところが、そもそも行かないのはリイナである。仮にもあこがれていたヴォルフの腕が体に巻き付いているのである。骨張った手は無骨で節が太く、こうしてみると腕は端から見るよりも太く、鍛えられて無駄がないのがわかる。自分とは違うその腕に、恥ずかしさも増すと言う物だ。

「照れちゃうから、いやですー！」

「それを克服するためにやつてるんだろうが」

声が完全におもしろがつているのを感じ、リイナの逃れようとする動きにも力が入る。

「く……はっ……えいっ」

腕をどこかせようとしたり、すり抜けようと座ろうとしてみたり、体をよじってみたりするが、その動きに合わせたように、ヴォルフがリイナを捕まる。普段から鍛えているヴォルフに、リイナの中途半端な本気など通用するはずもなく、軽くあしらわれてゆく。そこへ追い打ちをかけるように、ヴォルフの高笑いが響いた。

「どうした、そんな動きじゃ逃げられないぞ？」

「絶対に、逃げて見せます！」

それを呆れた様子でラーニャ達が見ていた。

「まったく、子供みたいな事をして……」

リイナを楽しげにからかう幼なじみの男に苦笑いしていると、笛の奏者が隣に並んで楽しげに笑う。

「ヴォルフ殿が、子供好きとは知りませんでした」

色気も何もないじやれ合いで、彼がそう思つのも無理もない。ラーニャはクスッと笑う。

「失礼ね、リイナは子供じゃないわよ？」

「ヴォルフ殿からしたら、似たような物でしょう」

奏者は笑った。

だが、リイナは確かに子供ではない。無邪気に笑う姿は子供のようにしか見えないが、もう十五才の立派な大人だ。少ないととはいえる。この年で結婚している女性は決して珍しくはないのだから。そんな年齢だ。でなければ姫巫女になど選ばれない。

確かに二人の関係に色めいた物は何も感じられないが、ラーニャは一抹の寂しさのような物を感じていた。リイナのヴォルフへの態度はラーニャに向けた物と大差なく、またヴォルフの態度も、確かに子供に向けているような物見える。

けれど、何か違つて見えるのは、ヴォルフに思いを寄せる女の勘か、それとも不安か。

出会つて間もないのに、二人の距離はあつという間に近くなつた。ヴォルフのリイナに対するかわいがり方が普通ではない。普段のヴォルフではあり得ないほどにリイナを気に入つていて。何気ない二人のやりとりの中のそれが、ラーニャには見えてしまうのだ。

いつそリイナを嫌えたら、こんな気持ちにならずにすんだのだろうか。

そう考えて、ラーニャは笑みを深くする。出来ないと思った。リイナはとてもかわいらしい少女だった。心からの信頼とあこがれを笑顔にのせてくるあの少女をどうして嫌えるというのか。

結局は、私もヴォルフと同じなかしらね。

出会いって間もないのに、どうしようもなくリイナがかわいいのは、  
ラーニャもまた同じだった。

けれど、男と女では、抱く思いも多かれ少なかれ変わつてくる。  
その意味を考えながら、じゅれ合つ一人の攻防を見つめる。  
そしてどこか寂しく思つてしまつ気持ちを抑え込み、ラーニャは  
笑顔でじゅれ合つ一人を止めに入つた。

## 6 舞いの練習3

リイナはこれまで起しつつた練習の合間の出来事を思い返しつつ、通し稽古に向けてどきどきしながら稽古場に向かう。ヴォルフにからかわれるかどうかの瀬戸際である。何より、ラーニャに叱られるような舞をするわけにもいかない。

歩む先で、リイナは見慣れた大きな背中を見つけた。

「ヴォルフ様！」

笑顔で駆けよってくる少女に、ヴォルフは微笑みながら手をあげて答える。

これから舞の練習に向かう。いつも通り元気な少女はにこにこと笑いながら、練習場に向かうヴォルフの隣に並んだ。かわいらしい少女だと隣に並んだリイナを見て改めて思う。

腰まであるまっすぐな金色の髪は、歩く度にさらさらと揺れる。光を透き通しているような、どこか透明感のあるその髪の輝き。機嫌良く弧を描く形の良い口元。輝くようにヴォルフを見上げてくる緑色の瞳は、澄んだ深い川底を思わせる。

姫巫女役に選ばれた少女である。派手ではないが、やはり見栄えの整った綺麗な顔立ちの少女だ。

舞の練習が始まるまで、五歳も年下の少女との舞は、さぞかし退屈だろうと思っていたのだが、意外に今年の姫巫女はおもしろい少女だった。

姫巫女に選ばれた厭味や当てこすりが当然あるようだが、気にする様子もないのに鈍いのかと思えば、意外と気にしていて、なにそれが態度には現れない。その前向きな心意気は気持ちよかつたし、何事にも一所懸命で、無邪気なようで、どこか一本筋が通つた少女は側にいても心地よいと思っていた。

場合によつては、今年の剣士役は断る事も考えていたヴォルフだ

つたが、リイナとの舞の練習はむしろ楽しく、また、このかわいい姫巫女に満足していた。

ヴォルフは見上げてくるリイナに笑いかける。

「よお、ちびすけ。今日は始めから通じで俺と合わせるぞ。ばっちり覚えてくるだろうなあ？」

リイナの頭をくしゃりと撫でると、彼女から不満そうな瞳が返された。

「なんだ？」

ヴォルフのからかうような声に、リイナの眉間に皺ががきゅっと寄る。

「ずっと思つてたんですけど」

リイナは、前々からずっと思っていたことを、今日こそ入ってやろううと口を開いた。

「ちびちゃんとか、ちびすけとか、わたしをちびって呼ぶの、そろそろやめて下さい」

キッパリと言い放ち、リイナは、よつやく言つてやつたと息を吐く。それを見て、ヴォルフがクツと吹き出した。

「それは無理だな。俺に名前を呼ばれたかつたら、もう少し……そうだな、その辺りとか、成長した方が良いな」

そういうてヴォルフが指をさすと、リイナはカツと赤くなつて指された胸元を押さえる。

「こつこつは関係ないです」

「残念だが、それはちびちゃんが決める事じゃない。君をリイナと呼ぶか、おちびちゃんと呼ぶかは、俺の基準で決めるからな」

にやにやと笑いながらからかう、ヴォルフに、リイナの頬がぷつくりとふくれる。

「ほら、そんな怒り方してるから……ちびちゃんなんだ」

そういうて、ヴォルフがリイナのほっぺを指でつつき、リイナの口から、ぽふつと空気が漏れる。

「い、いつか、ラーニャさんみたいな大人になつたときに、謝つて

も許してあげませんから！」

「ふむ。そうだな、それはそれで楽しみだ。俺の射程範囲内に育つたちびちやんに袖にわれるのを口説き落とすのもおもしろいやうだな。がんばれよ」

「ヴォルフがにやにやと笑う。

「バカにしそぎですよつ」

頭をわしゃわしゃと撫でるヴォルフに、リイナが恨めしげに見上げた。

けれど、リイナにしてみると、それさえも楽しそうにまらないやりとりだった。そもそもヴォルフとは知り合えるような相手ではなかつたのだ。五歳も年が違うと、接点などは全くない。ましてや、ヴォルフは領主の跡取り息子と言つだけでなく、騎士として首都エドヴァルドに出向している身だ。一年の半分以上をグレンンタールの外で過ごしている。この村一番の、女の子なら誰でも憧れる男性だつた。それが、姫巫女に選ばれたおかげで知り合えて、からかわしながらとはいえ親しげに話しかけてくれるのだ。

「それから、髪をぐしゃぐしゃにするのも、やめて下さいね」

リイナが髪を整えながら釘を刺す。

しかし、ヴォルフはふつと笑うとそれには答へずにリイナの髪に目をやる。

ぐしゃぐしゃと言つても、さらさらの金糸のようなまつすぐな髪は、するりと触り心地良く、少々撫でたぐらいなら、さりとてほどけるように元に戻る。持ち上げると、こぼれるよつにわらわらと弔から落ちていく感触が、ヴォルフは好きだつた。

しかし、ヴォルフはそれをあえて言わず、頬のふくらんだ彼女ににやりと笑いかける。

「それも無理な相談だ。ちびすけ、残念だが、君の頭の位置は手をおくのにちょうど良い位置なんだ」

「それは、私がちびだからじやありませんつ、ヴォルフ様がおおきすぎるんです！」

必死で訴えるリイナの顔に、ヴァオルフは思わず、ぶつと吹き出す。

「何で笑うんですか？」

「手の位置がちょうど良いのは、認めるんだな」

リイナがはつとして一瞬黙る。そして悔しげに、ヴァオルフを睨み付けると、ぷいっとそっぽを向く。

「そんなの、知りませんっ」

ちょっととからかいすぎたかな、とヴァオルフは笑いながらむくれたまま歩く少女と一緒に舞の練習に向かう。

練習をする集会場に着くと既にラーニャが一人を待っていた。

「あら、仲が良いのね」  
笑いながら手を振るラーニャに、リイナは駆けよつて彼女に抱きつく。

「私、絶対にラーニャさんみたいな女性になりますー。」

リイナはそう宣言するも、ラーニャの細いのに柔らかな胸元の感触に、本当に大丈夫かと不安を覚える。

やっぱり、無理かも。

リイナの頭の上で、くすりとラーニャが笑った。

「ヴォルフがまた何か言ったのね」

リイナは、ラーニャにくつついたまま大きくうなずいて、ゆっくりやつてくるヴォルフを振り返る。

「あなたの大事な姫巫女の機嫌を損ねてどうするの。ダメでしょ、からかっちゃ」

ラーニャがからかうようにヴォルフに声をかける。

「まさか！　俺のかわいい姫巫女だからな。がんばって奮起して美しい女性に成長してもらわないといけないからな。ちょっと発破をかけただけさ」

大げさな身振りで、心外だというようにヴォルフが笑う。

「だそうだけど、許してあげる？」

笑いながらリイナを見つめるラーニャに、リイナは拳を作つて、力を込めて断言した。

「絶対に！　許しません！」

笑うヴォルフとラーニャを見ながら、リイナは怒っているフリをして、そして嬉しい気持ちを噛み締める。ラーニャとヴォルフが自分に向けて笑いかけてくれるのがうれしかった。

何の幸運だか、自分は姫巫女に選ばれた。たぶん、髪の色と瞳の色が伝説の姫巫女と同じ事も由来にあるのだろう。

ラーニャも、ヴォルフもこの村では有名すぎて、知り合えるような人ではなかつた。それが、こんな風に親しく関わつてもらえる。ヴォルフはいつもからかつてばかりだけどでも実は結構気を使つてくれてたりもするし、ラーニャはとにかく優しい。

リイナはそれが嬉しくてたまらなかつた。

そんな二人にあきれられないように、舞も必死で練習した。帰つてからも、時間があれば練習していた。最初はリイナに姫巫女がつとまるのかと心配そうにしていた父と母も、最近は笑つて応援してくれるようになつていた。

リイナの練習を見てくれるようにもなつて助かつていて。

今日からしばらく、通しで練習して、うまく合わせられるようになつたら、そこから半月、リイナは神殿に仮の姫巫女として修行に入る事になつっていた。

神殿でのお勤めはグレンタールで姫巫女役に選ばれた者への決まり事だつた。たとえ、祭りの間の仮の姫巫女であろうとも、時渡りの姫巫女を名乗る以上、修行をする事が神殿側から求められる。これからヴォルフと舞を合わせ、姫巫女役として大丈夫と決まつたところで修行が始まるのだ。

今まで、通しで二人で舞つたことはない。所々合わせる物の、とにかく、舞の流れを覚えるのが先立つたためだ。

一度簡単に合わせてから、まずは舞台の雰囲気をつかもうと集会所の中に仮組みした舞台へ、ヴォルフとリイナは上がつた。初めて舞う、一人での通し稽古。

「さて、俺の姫巫女？ 初めての共同作業だな」

「またそんな変な言い方して」

にやにやと笑うヴォルフに、初めて舞台で合わせる緊張が解ける。リイナはヴォルフを見上げて、へにやつと笑つた。それを見て、ヴォルフが優しい顔をして、その頬に触れる。

「さあ、始めようか」

二人は氣を引き締めた。

中央に姫巫女が立ち、隣に控えるように剣士が片膝をついて構える。

「ドン、と太鼓が鳴った。」

うつむいていた顔を上げ姫巫女は手首につけた鈴をシャンと鳴らし、剣士は片膝をついたまま剣を捧げるように両手を差し出し掲げる。

笛の音が流れ太鼓の音が響き、それを合図に一人は舞を合わせてゆく。

初めて合わせる緊張に初めはぎくしゃくしていたリイナも、ヴォルフの舞に引っ張られるように動きを導かれ、思わず踊りやすさに、一人で練習するよりもずっと楽に、そして楽しく踊れた。

合わせ終わると、ほつと力が抜ける。美しく纖細な笛の音と、太鼓の低く重厚な音の緊張感から解き放たれたような軽さと、そして物足りないような脱力感。

間違わずに、そして思ったよりもうまく合わせられたことが嬉しかった。

奏者一人も満足そうにうなずき、ラーニャは笑顔でリイナを抱きしめた。

「初めて合わせたとは思えないぐらい見事だったわ！　いくつか気になるところはあつたけれど、追々直していくば十分間に合つわ。これからもつとうまくなることを思えば、祭りが楽しみね！　これだけ上手くやられると去年まで姫巫女をさせてもらつてた私としては悔しいくらいだけど、今回は私が教えたのよつて自慢することにするわ」

「ラーニャさんにそう言つてもらえるのが、一番嬉しいです……！」  
安堵と、うれしさで胸がいっぱいになつたリイナに、ラーニャがいたずらっぽく笑いかける。

「あら？　姫巫女が一番氣にするのは、剣士の言葉じゃなくって？　ねえ、ヴォルフ？」

「そうだな。今年の姫巫女は、色氣はちょっと足りないが、元気が

良くて新鮮味のある姫巫女で良いんじゃないかな？」

ラーニャの言葉をうけて、ヴォルフが、にやにやと笑う。そして  
とつてつけたように「かわいいしな」と、付け加えた。

「なんか、それ、褒めてないです……！」

「ヴォルフ！　また、からかって！」

女性二人からの攻撃をヴォルフは笑つて躱す。

からかうふりをして言ったヴォルフだが、実際は彼自身驚くほど  
彼女との舞は踊りやすかつた。まだつたないリイナの踊りに魅せら  
れるように、ヴォルフ自身の踊りは触発された。剣士の舞は、姫巫女  
を愛し、護る舞。リイナとの舞は、剣士の気持ちをわずかながらに  
感じ取れるような気がした。つたなく、かわいらしく元気に軽やか  
に舞うリイナ。ヴォルフの中の愛しさと、庇護欲とが刺激された。

リイナの年なら、早い子は結婚している。だが、年の割に幼さが  
際だつリイナでは、ヴォルフとしてはリイナを女性として意識する  
のは難しい。それでも、ヴォルフは話の分かる、落ちついた  
女性との付き合いを好んでいた。リイナへの感情は家族的な親しみ  
だ。

恋愛に関してはそれなりに経験のあるヴォルフの目から見る限り、  
リイナ自身にヴォルフに対して持つている感情に恋愛めいた物を感  
じない。向けられるのは純粋でまっすぐな好意だけだ。

恋だ愛だと見返りを求めてこない好意は心地よい。ヴォルフとし  
ても勘違いされる心配なく好意を向けられる気安さもある。かわい  
くて、つい構いたくなる。

リイナを見ていると、妹がいればこんな感じなのだろうかと思う  
のだ。素直にかわいいと思える。リイナに何かあれば、心底守つて  
やりたいと思うだろう。知り合つて短い付き合いだが、そう思うぐ  
らいに、ヴォルフはリイナを気に入っていた。

リイナは人の心に入り込むのがうまいのだろうと思う。自然に入  
をなごませる。

首都エドヴァルドで大半を暮らすヴォルフには、グレンタールの

人間がいかに善良であるかを知っている。その中でも、リイナは極めて善良な部類と言つて良いだろう。

長い付き合いで、ヴォルフは気付いていたのだが、ラーニャは当初、三百年祭という区切りの年に姫巫女を外されたことを悔しがつていた。それを表に出すような女ではないのだが、それでも新しい姫巫女と会うときは、かなり歯がゆい思いをしたはずだ。

だが、そのラーニャでさえも今ではすっかりリイナの姉気分でかわいがつている。

初めの顔合わせの後、ほっとしたような笑顔で「あの子、可愛いわね」と呟いたラーニャにヴォルフもまた安堵した。ラーニャは、自分の悪意を嫌悪するところがある。ラーニャのそうした性質をヴォルフは尊敬し、好んでいたが、時にそれはとても辛そうにも見えた。それゆえ彼女にとつて新しい姫巫女が、優しい姉のように振る舞える相手であつたことにほっとした。

ラーニャのそうした新しい姫巫女をかわいがりたいという気持ちと、リイナのラーニャに憧れ尊敬する気持ちは、相乗効果で一人を近づけたようだった。

元々は自分の中の悪意への反発心からリイナに好意を持とうとがんばっていたラーニャだが、今となつては、祭りが終わつても二人の関係は近しいまま変わらないだらうと思えるほどに信頼関係が出来上がつているように思えた。

意外と侮れないちびちゃんだよなあ？

ヴォルフは楽しげに、リイナを見つめる。一緒にいるだけで、何気なく気を許してしまつ空氣を彼女は纏つていた。

「ちびちゃん、これは、どうしたんだ?」

練習を終えると、ヴォルフがリイナの青く染まつた指先を見て言った。

「あ、これはお仕事で付いたしました。なんと高貴な紫泉染の指ですよ」

リイナは指先を、ヴォルフに見せながら白慢げに言った。

「ほう。ちびちゃんはどこで働いているんだ」

「染物屋さんです。アヴェルタさんのトマの」

「ああ、なるほど。しかし、それにしては薄いな。今までそんな色になつたことないだろ」

「普段は、私、染め付けはしていないんです。レースとか刺繡とか、お針子さんをしてますから。でも、今回の姫巫女のヴェールを私が作つてるんですけど、後染めするのなら、自分でやってみないかって言つてくれて。姫巫女のヴェールを最初から自分で手作り出来るだなんて、幸せです」

青く染まつた指をうれしそうに見つめながらリイナが笑う。

神殿の巫女はヴェールを纏う。生成のヴェールは一般の巫女、藍のヴェールは高位の巫女、そして姫巫女だけが纏うことが許される、紫のヴェール。

舞で使われた後は、首都エルヴァルドの神殿の姫巫女へと献上される。

故に、ヴェールのレースと刺繡は、村でも選りすぐりの技術を持つ女性に託される栄誉とも言える仕事なのだが、今年は、その技術を大きく評価されているリイナを、アヴェルタが推したのだ。まさか、そのリイナが姫巫女に選ばれるとは、アヴェルタとしてはうれしい喜びだった。

紫のヴェールが作られるのはグレンタールしかない。

三百年前、グレンタールを興した姫巫女が伝えたとされる染色法がグレンタールでしか行えないというのが主な理由だ。それまでは、

姫巫女の纏う、ヴェールの色は紫紺であったと言われている。

紫泉染は染色後にグレンタールでわき出る温泉の底にある泥につけることでその発色を鮮やかにさせるのだ。

グレンタールほど鮮やかな紫色を作ることが出来る土地は今のところ他にない。

紫は一般の人間が纏うことは許されていない。しかし、お守りとして紫色に染められた小物を持つことは許される。ただし、神殿に納める物より薄い色でなければならないのだが。

リイナの仕事には、そういうた小物を作ることもあった。

今回は、リイナが舞で使う紫泉染のベールといふこともあり、カルストがリイナにも染色をさせてくれた。

本来は決してやらせてもらえないことだが、今回ばかりは特別ということだろう。リイナがカルストに大いに気に入られているということも大きかった。リイナからするといつも近くで見ていたあこがれの仕事でもあった。

いつもカルストの仕事を暇があれば見ていたので、リイナは作業の手順をだいたい知っていた。そういうところも、カルストが許したものだ。

「結構上手に出来たつて、カルストさんにも褒めてもらえたんですよ。」これなら、舞の後に、姫巫女様に献上しても恥ずかしくないって

「ほう。それは大きく出たな。おちびちゃんの晴れの舞台を楽しみにさせてもらおうか」

「はい、ぜひ！」

リイナの笑顔が、満面に花咲いた。

「リイナ！」

二人で話していると声がかけられた。振り返ると、コンラートが歩み寄つてきている。

「お父さん！」

リイナが手を振つて応えた。

「……コンラート殿？」

「あれ。ヴォルフ様、父を『存じ』でしたか？」  
驚いた顔でリイナとコンラートを見比べるヴォルフに、リイナも驚く。

「ああ、以前、騎士団の仕事でグレンンタール神殿に駐在したことがある。その時にコンラート殿には世話になつたんだ」

「そ、うなんですか。父はそんな話、全然してくれなかつたのに」  
リイナは口をとがらせて、側に来たコンラートを責めるように見えた。

「するわけないだろ、ヴォルフ殿はおまえの『こがれ』……」

「お父さん、仕事は終わつたの？！」

声をかけてきたコンラートの言葉を遮つて、リイナは声を張り上げた。

しかし、せつかく声を遮つたのに、ヴォルフには聞こえていたらしい。

「ほう。おちびちゃんは、コンラート殿が話すのを躊躇うぐらー、俺にあこがれてくれていたのか？　そこまで気に入られていたとは、知らなかつたな」

「ヴォ、ヴォルフ様、じやなくつて、剣士様にあこがれていたんです

……」

「つれないことを言つなよ」

笑いながら、ヴォルフはコンラートに向かって話題を切り替えた。

「コンラート殿、お久しぶりです。まさか、彼女が、コンラート殿のお嬢さんとは」

「ああ、久しぶりだね。ヴォルフ殿もお元気そうで、何よりだ。娘から話は聞いているが、いつも世話になつていいよつだね。まだまだ至らないところがあるだろうが、鍛えてやつて欲しい」

「ええ、なかなか鍛えがいのあるお嬢さんです。祭りの日を、私も

楽しみにしております。それにしても、今まで気付かなかつたのが不思議です。顔立ちは、コンラート殿によく似ておいでですね。髪も

「さうかね。娘はよく、妻に似ていると言われるのだがね。並んでいるとい、立ち振る舞いから何から、本当に雰囲気がそつくりなのだよ」

いつも見るヴォルフ様の顔じゃないな、などと思いながら、リイナはコンラートと話すヴォルフの横顔を見る。柔らかい表情をしているが、それでもまじめな大人の顔。

いつもとは違う精悍で礼儀正しいヴォルフの姿が、リイナにはとてもかつこよく見えたのだった。



三百年祭まであと一月足らずになつた頃、合わせで行う練習も、ほぼ問題なく舞えるようになつていた。

「予定通り進んで良かつたわ。リイナも、がんばったものね」神殿に入る前の最後の練習を終え、ラーニャが話しかけてきた。

「はい、ラーニャさんのおかげです」

「明日からは、ついに神殿での修行ね」

微笑んだラーニャに、リイナはうなずく。

「はい、緊張します」

明日から半月、とうとう神殿での修行が始まるのだ。

リイナの両親は神殿の守人をしているが、だからといって、リイナが神殿に立ち入つたことはない。子供の遊んで良い場所じゃないと、守人であるが故か、一般の人間以上に、厳しく神殿へ近づくことを禁止されていた。

そういう刷り込みもあって、リイナの緊張は、姫巫女の修行以上の物があつた。

「あの、神殿でどんな修行をするんですか？」

うまくできなかつたり、失敗して迷惑をかけそうな気がして、出来るのは知つておきたいと、真剣に、ずいぶんと切羽詰まつてラーニャにかじりつくリイナに、ラーニャが「肩の力を抜いて」と笑つた。

「たいしたことはしないわよ。そうね、たぶん、あれは形式的なことだけだつたんじゃないから。瞑想をしたりとか、自分の過去を思い出しながら時を遡る感覚で……とか言わたんだけれど、正直、巫女でない人間には感覚がついて行けなかつたわ。でも、それは神殿側も分かつているわけだし、分からなくても気にする必要はないわね。本当に、言われたことをする以上の事は、神殿側も望んではいないのよ。とりあえず、姫巫女がどんな風に時を渡つたのかって

「 いう概要だけ知つていれば良いんじゃ ないかしり」

肩をぽんぽんと叩いて、リイナの緊張をほぐす「ラーニャに、リイ

ナは力の抜けた笑顔を浮かべた。

「 ちょっとほつとしました。 難しい事言われたら、困るなあつて」

「 あら、リイナなら、難しくても大丈夫よ。 だつて、舞を覚えるのもすぐ飲み込みが早かつたわ」

「 ラーニャの率直な褒め言葉に、リイナの笑顔も自然と柔らかくなる。」

「 ……私、ラーニャさんと出合えて、良かつたです」

「 ちびすけ、言つ相手を間違えてないか?」

横から割り込んできた声に、リイナとラーニャは、声を合わせて笑う。

「 はい、ヴォルフ様と出合えたことも、すじくつれしいです」

リイナは、ヴォルフを見上げると、同じぐらい気持ちを込めて、力強くうなずいた。

「 あらあら」

ラーニャがその様子を見て、クスリと笑う。ヴォルフは少し複雑そうな顔をしてリイナを見つめる。

「 そう、面と向かって返されると、さすがにちょっと、照れくさいぞ?」

俺は、照れるちびちゃんが見たかったんだけどな……などと、ヴォルフのつぶやきはリイナには届かなかつた。

「 え、ダメでしたか? でも、私、本当にラーニャさんとヴォルフ様にこうして出会えたことがうれしくて……」

必死で言い訳をするリイナを、じらえきれなくなつたよひに、ラーニャが抱きしめた。

「 私もよ。あなたに会えて、本当にうれしいのよ」

くすくすと笑いながら抱きしめるラーニャの腕の中は、うれしくてとてもくすぐったかった。

「それでね、ヴォルフ様もラーニャさんももう大丈夫って太鼓判押してくれたの。明日から神殿での修行だけど、神殿の方にももう伝わってるんだよね？」

リイナは初めて神殿の中に入るとあつて、父と母を前に興奮気味に話をする。

「ああ、あつちの準備もちゃんと出来ているよ。今年の姫巫女が私の娘という事で、おかげでずいぶんと祝いの言葉をいただいたよ」リイナの父、コンラートは静かにうなずいた。

「心配だわ。何もないと良いんだけど」

少し困ったように笑う母、ラウラに、リイナは頬をふくらませた。  
「何もないわよ！ そんなに失敗ばかりしてないんだからね」「すねるリイナに、ラウラは「そうね」と、どこか心配そうに表情を翳らしたままうなずいた。

そこまで心配しなくても良いじゃない、と、リイナは母を見る。いつも優しい母だけれど、どうも心配性でいけない、とリイナは思つ。

「お父さんにも、お母さんにも恥なんてかかせないわよ」ラウラを安心させようと、リイナは胸を張つた。

「そんな心配はしないわ」

ようやくラウラが笑つて、リイナを抱き寄せた。

「大丈夫よ……」

そう呟くラウラが、どこかいつもと違うように思えて、リイナは抱きしめられたままコンラートを見る。父は苦笑するうなずいた。

「ラウラ。リイナが驚いている。君は心配しそぎだ」

コンラートの言葉に、ラウラがはつとしたようにリイナの顔を見た。

「さうね、あなたより、私の方が緊張しているだなんて、変よね」

「お母さんったら」

リイナとラウラは、顔を見合させて笑つた。

リイナが姫巫女をするという事は、よほど両親を驚かせたらしく、

特に、ラウラは務まるのかと不安だから断つた方が良いのではないかと言つたほどだった。今となつては一応は納得してくれているようだが、それでもラウラは未だに不安を感じているらしい。

ましてや三百年祭といつ記念の祭りの日である。王族も来るとあって、普段は大きく祭りに関わらない神殿も、今年は神事も大々的に行い、大きく祭りに関わってくる事になつていてる。

神殿で守人をするリイナの両親からすれば、舞の役目の重さを大きく感じるには仕方がないかもしない。

けれど、リイナからすると、確かに緊張はあるが、楽しみな気持ちの方が大きいのだった。あこがれの姫巫女になれる。しかも、あこがれのヴォルフと共に舞うことが出来るのだ。

ラウラとコンラートは浮かれた足取りで寝室に入つていったリイナの背を見送つた。

二人の間に沈黙が訪れる。

先に口を開いたのはコンラートだった。

「大丈夫だ。あの子には巫女の力はほとんどない。これまで、ずっとないことを確認してきた」

言い聞かせるようにつぶやかれた言葉は自分自身に対してか、それとも妻に対してなのか。コンラートの視線は、飾るようにして置いてある水晶に向けられる。守石と呼ばれる、ある力にだけ反応する、神殿を象徴する石。

ラウラもまた、それに目を配り、そしてそれを否定するように首を横に振つた。

「あの子が姫巫女に選ばれたときのことを覚えているでしょう？  
あの子が触れた守石は、わずかだけど、確かに反応したのよ。この前だつて。舞のことを話していたら、離して置いてあつたのに反応して……」

その言葉に、コンラートは重い表情でうなずいた。

「分かつていてる。だが、あの程度ならば問題はない。反応としては微細な物だ。あの程度ならいくらでもいる」

「でも、あの子は……」

言いかけたラウラは、口をつぐむ。コンラートの瞳が、それ以上言つなと告げていた。

「もし……」

ラウラはつぶやきかけて、けれど何も言わないまま苦しげにまた口をつぐんだ。コンラートがラウラをそっと抱きしめた。

「大丈夫だ。私と……君の娘だ。万が一つ、望まない事態になつても、乗り越えていく。君が、そういう子に育てた。君の娘だ」

ラウラは物言いたげな瞳をコンラートに投げかけるが、結局何も言わずにはなづくのみにどめた。

二人は口をつぐんだままリイナの寝室に目を向ける。重い空気が二人の間に落ちていた。

リイナは緊張しながら歩いていた。向かう先は神殿。舞の初めての練習ほどの期待感を持つていなかったためか、ひどく緊張していた。この日から半月、リイナは神殿にこもり、姫巫女の修行をする事になるのだ。巫女としての礼儀作法や簡単な修行のみとは聞いているが、神官と巫女、そして守人しか足を踏み入れる事の許されない神殿の中を想像して、初めて足を踏み入れる緊張は大きかった。

「今から行くのか？」

突然かけられた声に、リイナは笑顔で振り返った。

「ヴォルフ様」

リイナは道具屋から出てきたヴォルフに駆け寄る。ヴォルフはリイナを認めるに、いつもとは違う静かな声でつぶやいた。

「これから半月もちびちゃんに会えないのは、寂しいな」

「え？ え？」

いつもからかってばかりのヴォルフから向けられた思いがけない

言葉に、リイナは顔が真っ赤になる。

「ヴォルフがそれを見ていつもの様子でにやりと笑いながらリイナの髪に触れた。

「君は、寂しくないか？ 僕の姫巫女？」

ヴォルフに見つめられて、リイナはボンッと真っ赤になつて、言葉もなく立ち尽くす。

ヴォルフが吹き出した。

「か、からかわないで下さい～！」

リイナの顔を真っ赤にしながらの抗議に、ヴォルフは楽しげに笑つた。

「舞の練習を欠かすなよ。帰つてきて、舞が下手になつてたら、しごくからな」

からかうような声が優しく響き、リイナは笑顔でうなずく。

「はい！」

そして、リイナはヴォルフが立ち去る間際に少し頬を染めて、少し離れたヴォルフに向けて笑顔で言った。

「私も、ヴォルフ様に会えないのはさみしいです！」

ヴォルフは一瞬面を食らつたようにリイナを見つめ返し、そして笑つてそれに答えた。

「帰つてきてからの舞の練習を楽しみにしているからな」  
がんばつてこい。

そう言つて送り出してくれたヴォルフに、リイナは笑顔で手を振つた。

リイナは、偶然ヴォルフに会えたことは、幸先が良いと、上機嫌で神殿へと向かつた。

神殿での生活は、思った以上に、良くも悪くも普通だった。リイナはその事にほっとする。

あまりにも両親が、神殿を神聖化して話すために、リイナはだいぶ緊張していたのだが、リイナの立ち入るところはそれなりに生活感もあり、いろんなところが普通で拍子抜けしていた。

コンラートとラウラの娘と言つことで、リイナの知らぬうちに守人達もいろいろと気にかけていたことも、緊張を解く要因の一つだつたのかもしない。

そしてリイナがその心遣いに笑顔で答える姿は好感を持たれていった。

初日は、巫女としての生活の説明を受けて、少しだけ修行をして終わりとなつた。

修行している巫女達は、多少世情に疎いとはいえ、普通の女の子達で、リイナはすぐに親しくなつた。

そして村のことにあることもありて、リイナを温かく迎え、神殿のいろいろな事も教えてくれた。特に、同じ年頃の三人とはすぐ意氣投合して、夜には今度の祭りのことでも盛り上がつていた。少し勝ち気で姉御肌のビアンカ、おしゃべり好きでかわいいローリア、そしてちょっと引っ込み思案だけど優しいベレディーネ。この三人が同室で、開いているベッドを、リイナが借りることになつた。

「へえ、じゃあ、今年も領主様の息子？」

ローリアが興味津々に尋ねてくるのを、リイナがそうなのどうれしそうに声を上げた。

「うん。ずっとあこがれてたから、すぐへりやしかつたんだよ」「ヴォルフ様だけ？あの騎士様は」

「うん。エドヴァルドで騎士してるの。かつてによね」

リイナに尋ねてくるのはビアンカとローリア。ベレディーネはにこにことしながら聞いている。

これから半月は神殿で寝食をし、村に戻れない事になつていたりイナだつたが、三人と過ごす時間は楽しく、神殿にこもらなければならぬ不安も薄れたのだった。

神殿での修行は、特に問題なく過ぎてゆく。

夜、いつものように三人の巫女達と話しながら、リイナは、ぽつりとつぶやいた。

「ねえ、修行って、退屈じゃない……？」

リイナは修行を思い出す。

守石を持ち、過去を思い浮かべて、その時に戻りたい、その時にもう一度行つてみたいと願うのだと言われているのだが、だからそれがなんなのだ、というのがリイナの感想だった。もう一度その時の気持ちをなぞるように……とも言われた事も思い出す。これが意外に、なかなか難しい。

過去見の修行で思い出に浸るのは、最初は楽しかった。先読みの修行で、未来を想像するというのも楽しかった。

が、それにも限度があつた。一日ぐらいなら、それなりに楽しく思い出したり、思い浮かべたりしていた。二日目にはだいぶ飽きたけれど、けれど、まあ、それなりに楽しかったような気がしないでもない。三日目からが苦痛だった。

だいぶ巫女の暮らしも分かつてきて、いろいろ慣れてくるにつれ、修行の瞑想中は、非常に退屈で、苦痛になつてきいていた。座つて、ずっと目を瞑つてしているのだ。日によつては一日中。

「そうよね、巫女の力がなかつたら、きっと退屈よね」

ビアンカが笑つた。それを見て、リイナは身を乗り出す。

「え、じゃあ、やっぱり巫女の力があると、あの修行つて楽しいの

？」

「 もちろんダメなときもこっぱいあるけど、過去見や先読みが出来たときとか、達成感つて言うのかな、もっと出来るようになりたいって思うわよ。見えるときのずっと探していく感じとか、すげくやりがいがあるし」

ローリアが、誇らしげに言つた。巫女達は、みんなその力とその立場に誇りを持つている。リイナはそれを肌で感じた。

「へえ……。やっぱり、巫女様つて、すごいなあ。私は、何を考えても、普通に思い出したりするだけだから、もう、飽きちゃって……」

巫女達が笑つた。

「 もう少しの辛抱よ！ 私達のあこがれの姫巫女役を舞うんだから、見えなくとも、ちゃんとがんばつてよね！」

「うん！」

リイナは巫女達の熱い声援にしつかりとうなずいた。

姫巫女の修行は、神殿に泊まり込みで行われる。本来なら家族にも会えないところだったが、リイナの両親は守人である。そのためには、時折心配してか顔を出して話も出来たし、神殿の巫女達とも仲良くやつているし、格別大変なこともなかつた。

それでも、この修行は、割合まじめなリイナでも飽きるような物だつた。

正直なところ早く帰りたかった。とりあえずリイナが、修行をがんばる姫巫女様の気持ちはつかめそうにないな、などと考えるほどに。

巫女の修行は舞の練習になるかと思つたけれど、これは、ラーニャの言つてたとおり、姫巫女様役をやる儀式の一つでしかないのだな、と、リイナは感じていた。

けれど、それでも巫女達の話を聞いていると、リイナは、巫女であることに誇りを感じている彼女たちに恥じないよつゝ、むづちよつとがんばろうと心に誓つたのだった。

修行も残すところあと一日。

明日には家に帰ることが出来ると修行の終わりが見えてほっとしつつも、仲良くなつた巫女達との別れを惜しみつつ、リイナは修行に励んでいた。

修行を行う瞑想室で目を閉じて、お祈りの形を取りながら、リイナは内心溜息をつく。

考える時間があればあるほど、考えることが多くなつてくる。半ば眠りそうになりながら、瞑想したままぼんやりと時間をやり過ごす。

退屈だった。

けれど、あと一日。明日には修行も終えて、家に帰ることが出来る。そしたら、明後日からは舞の練習を再開できる。

空っぽになつていたリイナの頭の中に、ヴァルフの顔が浮かんだ。ヴァルフ様は何をしていらっしゃるのかな。

リイナはあこがれの騎士を想つ。会いたいと思つた。

自分をからかうあの声やあの笑顔がたつた半月なのに、懐かしく思えた。

ヴァルフは騎士として普段は首都にいるために、こうした祭りや用事がなければ、ほとんどグレンタルには戻つてこない。今しか会えない人なのだ。ましてや、舞と一緒にやつてるからこそ立ち話なども付き合つてくれているが、おそらく祭りが終われば、顔を合わせることもないだろうし、顔を合わせても、今のように仲良く話をする機会など持てないだろ。いつかは爵位も次ぐであろう領主の息子は、リイナには遠い存在だった。

今だけ、なのよね。

そう思つと、なすこと、ヴァルフに会いたいと思つた。

ヴァルフに会つてから、あこがれる気持ちは強くなつた。少し意地悪だけど、強くて、かつてよくて、優しくて、練習の間は当たり前のようにリイナの居場所を隣に作ってくれるヴァルフに、好意を

持たずにはいる方が難しいという物だ。

舞の最中の、ヴォルフを思い出すと、ちょっと頬がゆるんだ。

けれど、修行中なので、リイナは何とか口元を引き締める。

舞の時のヴォルフは、リイナの目につも以上にかっこよく見える。姫巫女を守る剣士の舞が、まるで自分が本当にヴォルフに守ら

れているような気分にさせてくれるのだ。

初めてヴォルフの舞を見た五年前の祭りを思い出す。あの頃より体つきが逞しく、そして幼さの抜けたヴォルフの姿は、伝説の剣士は、本当にこんな感じだったのかもしれない、想像をかき立てる。けれど、幼心に見た五年前のヴォルフも、やっぱり今思い出してもかつこよかつたと思う。

幼いリイナが衝撃を受けたあの舞。

リイナの脳裏をよぎるのは、在りし日のヴォルフが舞う、幻想的なほどにりりしく姫巫女を守る剣士の姿。そして、あの日にみ上げた切なさと懐かしさ、そしてえも言えぬ愛おしさ。

あの日からずっと胸に染みついている、不思議な感覚。

ヴォルフのこと思い出していたリイナは、違和を覚える。

あれ？

目を瞑っているのに目の前が明るくなつたのを感じた。何かが光つたようだ。何だらうと思う間もなく、周りが騒がしくなる。

リイナはそつと目を開けた。

「……え？」

くらむような光が、手の中の守石から放たれていた。

その光はすぐにおさまったが、周囲にいた人間全員の視線がリイナに集まっていた。

怪訝そうにリイナを見つめる巫女達と、そして驚愕しているのを見開いた神官や守人達。

「先ほどのは、リイナ殿の力か？」

「……は？」

ひどく真剣な顔をして、一人の神官が半信半疑の様子でリイナに

声をかけてくる。

「……さつきの光のことですか？あの、何が……」  
リイナは周り誰もが真剣な顔で見つめてくることに動搖を隠せない。

尋ねてこられても、聞きたいのはむしろリイナの方だった。

「リイナ殿」

中にある神官のうちで紫泉染の衣を纏つた最も位の高そうな壮年の男がリイナの前にひざまずく。

「あなたには、姫巫女様に匹敵するお力があるようです」

「……はい？」

意味が分からず見つめ返すが、彼はこの上なく真剣な顔をしていた。

「ちょっと待つて下さい。どうして私に力があるなんて……。私は何の力もありません」

少なくとも、修行中に、未来が見えたり、過去が見えたりしたことはない。

ひざまずいた神官を前に、リイナの混乱は更にひどくなる。

「いいえ。確かにあなたには時渡りの巫女の力がござります。先ほどの光り輝いた守石が証拠」

「……守石？」

「……ご存じではないですか？巫女の力が発現したとき、その守石が輝くのです。力の大きさは、輝きの強さ。私は、姫巫女様のお力の輝きを見たこともございますが、今ほど強い輝きを見たのは、初めてです。これだけの輝きとなると……リイナ殿、あなた様は……時渡りの姫巫女の、再来やもしだせぬ」

「待つて下さい、力が発現つて、私、さつきは別に何か見えたとか、先読みとか、過去見とか何も感じなかつたし、何かの間違いです……」

「……！」

リイナは悲鳴のよつて声をはり上げた。

「そうですよ、神官長殿。娘は、今まで一度も力の片鱗を見せたこともありませんし」

「お父さん……！」

突然瞑想室に現れたコンラートの姿に、リイナはすがるように目を向けると、父親の穏やかな表情にほっと息を吐く。父親の姿があるだけで、そして向けられた笑顔に安心した。

「驚いたよ、おまえがなにやらすごい力を出したとか言つから驚いて走ってきたよ、と笑つて声をかけてくるコンラートに、リイナはうん、とうなずく。

「私も、何のことか分からなくて……何かの間違いだと思つんだけど」

父娘の和やかな会話は神官によつて遮られる。

「間違いではありませんよ。この場にいた者、全てが、リイナ殿が持つ守石が輝くのを見ております」

「……他の誰かの力、という事は……」

躊躇いがちにリイナが口を挟むと、神官はしつかりとリイナを見つめて首を横に振る。

「その手にある守石のみが輝いたのですから、それもあり得ませぬ」「でも、何も、見えませんでしたし……」

困惑しつつもリイナは、まだこのときは気楽に考えていた。自分に力があるとは思えないが、あつたとしても自分がどうなるかという発想がなかつたためだ。

だが、それがいかに甘い考え方だったのかを、すぐに知ることになつた。

「リイナ殿、ですね」

静かな声が割り込んできた。

その声をした方を見ると、どこか洗練された、紳士的な男が一人

立っていた。衣から判断するに、高位の神官のようだ。田の前の神官と同じように、紫泉染の衣を纏っている。けれど、ずいぶんと若い。三十代前半、といった頃か。

「……エンカルト」

「コンラートがぼそりとつぶやいたのが、リイナの耳に届く。リイナが父親を思わず見ると、珍しくコンラートが険しい顔をしていた。その視線の先には、先ほどの神官がいる。

「お久しぶりですね、コンラート殿。このたびは、お嬢様がすばらしい力を発現させたようで。神殿としても、うれしく思います」にこにこと笑いながらコンラートに歩み寄るが、その目が笑っていない。

「神殿には関係のない話ですよ。現に、輝いたといつても、一度だけのこと。今まで一度も発現したことがないのに、突然、まぶしいほどに輝くのは、何か……」

「あなたが、リイナ殿に力があるわけがないと、そう言いますか？」エンカルトがコンラートの言葉を遮るようにたたみかける。ひどく意味ありげに放った言葉、そしてコンラートに向ける視線。それらがひどくとげとげしく感じ、リイナはこの優しげな風貌の男を、恐いと感じた。

「リイナ殿は、姫巫女として、神殿に迎えましょう」唐突にエンカルトが宣言をする。

それに対して、コンラートが「何を」と一笑に付する。

「……このような、巫女としての何の修行をしてない者を、ですか。姫巫女にとは、ずいぶんと突拍子もない。いささか、横暴でしょう」コンラートが静かにエンカルトを見つめる。落ち着いて話していくように見えるが、コンラートとエンカルトが言葉を交わすことになり場の緊張が高まっていた。

しかしエンカルトはその緊張感の中につつて、楽しげに笑い声を上げた。

「ずっと、この時を待っていたのですよ。思った以上の功績です。

私がこの機会を逃すと思つてゐるのですか？」

楽しげに響く声が、リイナの耳に、ひどく不快に響いた。

「……やはり、君が今回の姫巫女役の選者に関わっていたのか」

「しつかりと、リイナ殿の力を見極めたかったのですよ。何もなければそのままお返しするつもりでしたが……」

エンカルトは言葉を切ると、舐めるようにコンラートを見つめた

「分かつてゐるでしょ？、コンラート殿？」

それは、罪の宣告でもするかのように、低く、重く響いた。

「私は、しばらくリイナ殿と、コンラート殿、それから、ラウラ殿とお話があります。人払いを」

エンカルトが同じ紫泉染を纏っている神官に申しつけた。いつの間にか、ラウラも瞑想室に来ていたことに、リイナはようやく気付く。

「しかし、このような大事に席を外せとは、納得がいきませぬぞ」状況について行けないのは、リイナだけでなくこの場にいた神官達も同様らしく、躊躇っているのが、リイナにも分かつた。このエンカルトという神官は、グレンンタールの神官長にすら命じられるほどに力のある存在ということなのか。

リイナの目の前では、まるで他人事のように、事態が勝手に進んでいた。その渦中にある筈のリイナには、全く、何が起こっているのか把握できずにいるというのに。

「これは、エドヴァルド神殿の意向です。リイナ殿の力の発露は予見されていたこと。このことに関する対処は私に一任されております。……よろしいですね？」

エンカルトの有無を言わさぬ姿勢に、押されるように、瞑想室から巫女や神官、守人が出ていく。

残されたのはリイナとエンカルト、そしてコンラートとラウラに、兵士が一人。

扉が閉ざされると、すぐに一人の兵士が剣を抜いた。

「コンラート殿、そしてラウラ。動けば安全を保証できません」

冷ややかなエンカルトの声が、一人の動きを封じた。

「リイナ殿。これから、あなたは力を磨き、姫巫女になつてもらいます。良いですね」

リイナは未だに事態がつかめていなかつた。

呆然とエンカルトを見て、そして、剣を突きつけられる両親を見

る。

「……それは、命令ですか」

「やう、見えますか?」

くすりとエンカルトが笑つた。

「脅迫されているのだと、感じています」

リイナは言葉を選びながらつぶやいた。

「なぜ、ですか。守石が光つたといつても、私に、何かが見えたわけではありません。私は、私に力があるとは、到底思えません。たつた一度のあの光で、なぜここまでするんですか」

リイナは一気に言つてから、ドクドクとはねる心臓の音を聞いていた。

「なるほど、しつかりしたお嬢さんだ。この場で、それだけのことと言えるとは」

幾分楽しげに言つて、エンカルトはちらりと「ハート」を見る。

「エンカルト、どういっつもりだ」

コンラートが低く呴喝した。

その声に、リイナがびくんと震える。穏やかな父が、こんな声を出したのを初めて聞いたのだ。

「……もう、あなたは、私を呼び捨てにできるような立場にはないはずですよ、コンラート?」

エンカルトが嘲笑するように笑つた。敬称を省いて呼ぶ名は、どこか怒りを帶びている。

「姫巫女の娘を、……それも、これだけ力を秘めた娘を、いつまでも個人の手に置いておけるとお思いか? 私が、それを許すとでも? あの頃とは、事情が違うのですよ。姫巫女のあとを継ぐ新たな巫女がないのをあなたも存じでしょう。守石をまぶしいほどに輝かすほどの力を秘めた巫女です。過去の過ちなど、些細なこと。リイナ殿の存在は、手のひらを返したよに、喜んで受け入れられるでしょう。今まで好きにさせて差し上げたのですから、リイナ殿は、神殿に返していただきましょうか」

「勝手なことを言つた。リイナは私の娘だ。本人が望みもしない物を、神殿に閉じ込める気などない」

「あなたの意見など、聞いておりません。あなたの言葉など、今更塵にも等しい。そしてそのような立場に成り下がるのを選んだのはあなただ。あなたは、私に逆らうことすら許されぬ立場なのですよ。あなたに敬意を示しているのは、……そう、お世話になつたあの頃への敬意に過ぎません。分かつてはいるのでしょうか？」

エンカルトの言葉が挑発めいてくる。

リイナは、もうすでに話を理解できずにいた。かるうじて分かつたのは、自分が神殿から求められているということ、エンカルトと呼ばれるこの神官と、父が、以前何らかの確執があつたであろう事だ。

そして、自分が、姫巫女の娘、と呼ばれた意味について、考えていた。

「ご存じですか、リイナ殿」

「…………？」

突然話を振られて、リイナはエンカルトを見た。

「あなたが、何者か」

「私の娘です！」

エンカルトの言葉を遮るように、それまで黙つていたラウラが叫んだ。

「リイナは私の娘です。神殿には関わりのない娘です」

硬い表情で、ラウラが静かに言い切つた。

「神殿に返してもうなど、誰に言われる筋合にもございません。神殿に入るかどうかは、娘の決めること。強要などされいわれはございません」

リイナは息をのんだ。ラウラがこれほどまでに厳しい表情をするのも初めて見た。優しく朗らかな母だった。それ故に、分かつてしまつ。

両親一人が、必死で隠そうとしている何かが確かにあり、間違い

なく、自分に関わることなのだと。そして、それは、神殿に深く関わっている。

リイナの知らないところで、なのにリイナに関わる大きな何かが隠れている。

状況が全くつかめない。けれど、一つだけ確かなことがある。リイナには神殿に巫女として入りたいという気持ちは欠片ほどもないという事だ。

リイナは信頼の出来ないこのエンカルトという神官に惑わされてしまいないと考えた。

「ラウラ殿。あなたの献身には、私も頭が下がる想いです。ですが、今回は、その忠誠を捧げる場所を間違えているとだけ、言わせていただきますよう」

にこやかなエンカルトの表情を、恐いと、心底リイナは怯えた。  
「神殿と関係ないなどと、よくぞ、堂々と言えた物だ。リイナ殿は、今コルネアに唯一人しかいない姫巫女の、唯一人のご息女だというのに」

微笑みながら、エンカルトがリイナの目を射貫くように見ていた。  
「リイナ殿、これは神殿の未来に関わることです。あなたには、巫女となる義務がある。その出生に、その血に」

今、時渡りの神殿は巫女の力の具現が少なく、権威が傾きかけていた。

数多いる巫女の力は、微細な物ばかり。時を読めるほどに力を持つのは、先読みの力を持つ姫巫女、唯一人。

しかし姫巫女の先読みも、自在に行える物ではなく、普段は簡易的な先読みで、曖昧に感じる未来を、己が経験で読み解いて行くのみ。彼女が持つ最大の力が発揮できるのは、神託が降りたときにのみだった。

それでもコルネア国内において時渡りの神殿への信仰による影響力は大きく、国としても庇護することで、神殿の持つ力の恩恵を受けていた。

しかし、国の保護が大きくなるほどに、神殿の発言力は奪われてゆく。それを懸念した神殿側は、新たな、力のある巫女の出現を望んでいた。時渡り神殿への畏敬の念を抱かせ、信仰を深める象徴として。

そこへ来て、リイナの力の発露である。

エンカルトは、リイナの力を試す日を待ちわびていた。しかし、コンラートとラウラによる妨害が激しく、叶わずにいたのだが、ついにリイナを神殿の中に呼び寄せることが出来たのだ。

グレンタル神殿における姫巫女役の修行は、この上なく都合の良い餌となつた。姫巫女の娘は、自ら神殿へと足を踏み入れた。神殿の強い意向としてエンカルトが裏から圧力をかけた為に、コンラートも今回の抜擢を防げなかつた。

期待はしていたが、よもやあれほどの輝きを放つほどの力を、あの娘が秘めているとは、エンカルトも想像だにしていなかつた。思い出すだけで、背筋が震えるほどの守石の輝きだつた。力が安定していないのか、最初の数日は、全く反応のなかつた守石に、エンカ

ルトも半ば諦めていたのだが、最後の最後に、思わぬ収穫となつた。久しく現れなかつた、力のある巫女。あれだけの光を放てるといふことは、すぐにも母姫巫女を超えるであろう力が予想された。

「少し、昔話をして差しあげましょう」

エンカルトがにつこりとリイナに話しかけた。

「十六年前。当時、姫巫女に選ばれることが決まつたばかりの巫女が、子をはらんでいることが分かりました」

「エンカルト、何を言つつもりだ」

コンラートが静かにエンカルトを睨み付けたが、エンカルトはちらりと視線を向けただけで聞き流す。代わりに兵士が動き、剣を突きつけ発言を制した。

「その父親が誰かは、今もまだ分かつておりません。一応、ね」

思わずぶりな視線はコンラートに向けられ、そしてリイナを再びとらえた。

「ただ、姫巫女の御子ですからね、表沙汰には出来ませんが、神殿はその子が生まれたら、それなりの保護をし、末は神官か巫女となるようにお育てするはずでした。ところが、巫女に縁談が持ち上がったのです。王家との、ね。姫巫女となれば、神籍に入り、王家との婚姻が許されるようになります。すると、おなかの中の御子は非常にやっかいな存在となりまして。存在そのものが隠され事が決まりました。そして生まれるとすぐに、そこなコンラートとラウラに託され、秘密裏に神殿を出されたのです。といつても、姫巫女の娘ですからね。神殿も見捨てるようなことなどしません。そんなコンラートとラウラは、このグレンタール神殿で非常に高い地位についておられたでしょ？　あなたをお育てする代償を得ていたのですよ」

「……そのような物言いは、非常に遺憾ですわ、エンカルト様」

静かなラウラの声がエンカルトの言葉を遮った。

「育てる代償などとは、よく言った物。神殿から出ようとした私ど

もに、問答無用で押しつけた口止め料ではありませんか。娘の心を惑わしたければ、私の田の届かないところへやるべきですわね。私の娘にそのような戯れ言を吹き込むのは、遺憾きわまりない。そのような戯れ言を吹き込まねば連れて行けぬようでは、先がしれないという物。私の娘相手では、そのようなばかり」とはそのうち破綻しましょう。それとも、あなた様は、その程度の戯言に騙される愚かな娘がお好みですか」

「確かに、それは失礼した」

くくつとエンカルトが笑う。ラウラの言葉すら楽しんでいるような様子に、ラウラは眉を寄せる。

「そもそも、姫巫女になれとあなたは娘におっしゃっていますが、巫女とは、己が意志になる物。娘の意志を聞いてないよ」と思つのは、私の気のせいありますか?」

「意志などと、そんな建前など、ないような物であるのは、あなたもご存じでしょうに」

エンカルトが楽しげに笑う。

「母親とは、子供の幸せを願うもの。子供の幸せの為に存在しているのですよ。娘をこの腕に抱いたときより、私の覚悟は決まっているのですわ。リイナは私の娘です。誰の血を引いていようと。どういつ生まれにあろうと。私が生まれた頃より、この手で育ててきました。誰の思いを踏みにじりうと、誰にたてつくことになろうと、娘が望まぬ事を、選択させるつもりはありません。たとえ、この身が刃で脅されようとも」

「……なるほど、姫巫女様は、本当に良い養母を選ばれたようだ。ただ、母親として、少しばかり、有能すぎましたかな。ずいぶんと板に付いた母親ぶりだ。あれほどまでにあなたが心酔していらっしゃった姫巫女様への忠誠も忘れるとは」

楽しげな声に、不穏な感情が交ざつたように思えた。

これ以上エンカルトとラウラを対峙させたくないと思ったリイナは、とうとう叫ぶ。

「だから、何ですか。悪いのはお母さんじゃないでしょー。必要になるなら手放さなければよかつたんです。今更口を出してきて、お父さんとお母さんを非難する方がおかしいじゃないですか！ 神殿なんて知りません！ 私には関係ありません！ 姫巫女様なんて知りません。私はリイナ・アレンです。あなたの言つことが本当なら、私は父と母から、神殿が望んだように、神殿には関係なく育てられました。褒められこそすれ、父と母がそんな扱いをされないわれはないはずです！ 私は姫巫女など、なる気はありません！」

どうしてお父さんとお母さんに、こんな仕打ちをするんですか！」

リイナの手が、堅く握られ、ぶるぶると震えていた。興奮と恐怖とで体の震えが止められないのだ。

肩で息をしながら言い切つたリイナを見据えると、エンカルトはふつと微笑んだ。

「なるほど、しつかりしたお嬢さんだ。確かに、こんな言葉に惑わされる子より、賢いお嬢さんが私としては好ましい。いくら御しやすくて、愚かな子の相手は、煩わしいですからね。手間がどれだけかかるうと、賢い子が良い。私が主として仰ぎ、仕えるのにふさわしい子が。ですが、コンラート殿の娘、といったところでしょうか。それとも、ラウラ殿の隸の賜物とでも？」

エンカルトは、コンラートを見据えた。

「リイナ殿は、もつと感情豊かなようですが……。穏やかで御しますように見えて、意外にしたたかな、どこかあの頃のあなたを彷彿とさせます。もつとも、最後に愚かな選択をするとこりがあなたの甘さでしたが……リイナ殿は、どうなのでしょう？」

楽しげに、わざと言つて聞かせるように、ゆっくりとエンカルト

は三人に向けて言葉を操る。そしてエンカルトは兵士達に合図をした。

兵士達がラウラとコンラートを、今度は刃だけでなく体の動きそのものを拘束する。

「リイナ殿。神殿にはね、姫巫女をたぶらかし、我が物にしようと/orする人間の一人や二人処刑するぐらいの力はあるのですよ。今すぐ、あなたの前で、この犯罪者一人を処刑いたしましょうか」

「な……！」

リイナは恐怖と怒りにこわばつた。

「お父さんとお母さんに何かしたら、私は、絶対に姫巫女になんかなりません！」

叫んだリイナに、エンカルトがにっこりと微笑む。

「もちろんです。ですから、あなた様の意志で来ていただきましょう。無理矢理来ていただいても、あなたは姫巫女にはならないでしょう。ですからお選び下さい。自らの意志で姫巫女となり、あなたをお育てした義両親としての人生をこのお一人に歩ませるか。それとも神殿を拒否し、あなた一人生き残り、あなたのために義両親が死ぬのを見るのは？」

エンカルトが、一層優しくリイナに語りかける。

「リイナ！ 私たちのために自分が犠牲にしないで。私は、あなたが幸せになるために育てたの。私たちの犠牲にするためじゃないの。リイナ！ あなたの望む道を歩きなさい！」

母親の叫びにリイナは顔を上げる。

「行かなくていい。すぐに処刑などされることはない。その間になんとでもなる」

父親の目が、リイナの瞳をとらえていった。

なんとかなると言つたの言葉が信じられたのならよかつた。けれど、リイナには、このエンカルトという男の本気を、イヤと言つほど感じていた。ならば、ラウラとコンラートもそれを感じているだろうと思えた。

「コンラートの言葉を信じたかった。けれど、リイナは感じ取つてしまつ、ラウラとコンラートの中にある覚悟を。

一人は、今、この瞬間、娘に向ける言葉を、命をかけて言つている。

自身らの命の危険を前に、血もつながつていない娘のことを何よりも考える両親の姿にリイナはこみ上げる涙をこらえながら、奥歯を噛み締めた。

「お父さん、お母さん……！」

自分の自由と引き替えにするには、あまりにも尊い物だった。エンカルトが、リイナに寄り添いつくりにして囁いた。優しく、…優しく。

「アレント夫妻は、神殿からの信頼も厚い者たちです。だからこそ、あなたをまかされた。あなたにとつても、いい父、いい母であつたことでしょう。見れば分かります。彼らは、あなたが一人を見捨てようとも、決してあなたを恨まないでしょう。あなたのために死ねるのなら、むしろ本望でしょう。血のつながりもないあなたを、実の娘以上に心から愛しておられるようだ。その彼らを……見捨てますか？」

優しい、優しい声がリイナを脅迫し、追い詰める。

「彼らを処刑するのは、本当に残念なのですよ。私ども神殿にとつても。彼らは非常に有能な神殿の守人である。あなたさえ、自らの意志で来て下されば、これからも彼らは神殿から優遇され続けるでしょう」

「エンカルト、娘にいらぬ事を吹き込むな！」

コンラートが静かに、しかし怒りを持つて言つ。

エンカルトはコンラートに向かつて、穏やかな笑顔で、黝るようになつた。

「だからあなたは甘いというのです。こんな役目を受けなければ、今頃神殿の中枢で手腕を振るつていられたありますように。しかし、あなたは、今、グレンタールのただの守人。愚かにも権力より

も大切な物があるといったあなたは、権力に屈するしかないのです。先を見越せと私に教えたのはあなたでしたのに。神殿よりも、己の感情を優先した報いです。あなたのことは、非常に尊敬していただけに、残念です。……ですが、それもリイナ殿次第。この方の能力はすばらしい。養父として、再び中央に返り咲き、あなたと共に手腕が震えるよう、お待ちしておりますよ

「エンカルト！」

コンラートがついに怒鳴った。けれど、その怒鳴り声の威力を全てかき消すような、小さな、小さな声が響いた。

「……行きます」

全員の目がその声の主に注がれる。

エンカルトが満足そうに、にいつと口端を上げた。

「私は、姫巫女になります」

「リイナ！！」

父母は叫んだ。

リイナは父母を見て、弱く、弱く、微笑んだ。それがリイナに出来る、精一杯だった。

そこからは、砂を噛むような生活が待っていた。

あのときの覚悟とは裏腹に、リイナは家へと戻っていた。今度の三百年祭で舞を奉納しなければならないからだ。その後に、姫巫女として上garることを約束させられた。

そして、代わりに両親が共に神殿に拘留されている。早い話が人質だ。彼らを押さえていれば、リイナが逃げることはないという判断が下されたのだろう。そして、村に戻ったリイナには監視が付いた。

半月先に行われる三百年祭の警備など、もっともらしい理由で、グレンタール中に、兵士が配備された。ただ、一人のために。

兵士の姿は強迫観念となつてリイナの心に影を落とす。

そして、三百年祭の忙しさから、リイナの両親は帰つてこられないうことになつている。

何もかもが、神殿の思い通りに進んでいることを、リイナは感じていた。けれど、姫巫女として迎え入れられることは口外せぬよう口止められた。どんなにあがこうが、どんなに受け入れがたくても、この状況を打破する為の力もなければ、知恵もない。誰に相談することも出来ずに、自分一人の胸に納めるのは、十五歳の少女には荷が重かつた。

どうしようもなく、ただ、最後の日に向かって、生活をしている、そんな絶望がリイナの胸をしめてゆく。両親の身は安全だと呟づが、それでも不安が襲つてきて、たまらなく心配になる。

何もかも受け入れたくない、昼間は出来るだけ何も考えないよう、感じないよう心がけた。時折襲つてくる不安は、深く息を吐いて、体を自分自身の腕で抱きしめながら、去りゆくのを待つた。誰かと一緒にいたかった。不安で、恐怖と孤独に飲まれそうで。全てが自分の思いから外れた場所で起こり、ただそれに流される日

々。何が自分の身に起きているのか、理解できていないうな感覚の中にいた。

一人でいると、ただ「なぜ」という思いに囚われるのだ。

姫巫女とは、コルネアに生きる少女にとって、王女やお姫様に並ぶあこがれの存在だった。何かが違えば、もつと喜べたかもしれないといと、何とか前向きに受け止めようともした。

けれど、どうしても、無理だった。どう考へても分不相応だった。修行で、自分に力があるなどと感じたこともない。巫女にさえなるはずがないのだ。ましてや姫巫女などと。とはいえそんな自信のなさだけなら、あのときの輝きを支えにがんばれたかもしれない。けれど、これは強制で、脅迫の末の決断なのだ。期待や夢と言った良い感情を持つだけの余地がリイナの中に残つていなかつた。人々、神殿の仕事にはあまりあこがれがなかつた。ラウラやコンラートの教育の成果かもしけなかつたが、それ以上に、人に触れるのが好きなリイナには、神殿の生活は、とてもあこがれるような物ではなかつたのだ。そこへ来て、神殿に対する不信感がリイナの中を占めている。

今ではリイナにとつて、姫巫女になると言つことは、エンカルトと呼ばれた、恐ろしい神官の印象へと直結していた。

そんな思いに囚われる中、仕事の時間と、舞の練習の時間が、リイナのよりどころだつた。そこにいる間は、忘れられた。アヴェルタがいた、ラーニャがいた、ヴォルフが共にして、リイナに笑顔を運んでくれた。

からかつてくるヴォルフにすがるよつな気持ちで、そこに居場所を求めた。神殿から帰つて以降は、毎日がヴォルフとの舞を合わせる練習となり、必然的に、リイナとヴォルフが共に過ごす時間が増えた。両親が帰つてこないリイナを気遣つてくれるヴォルフにすがつた。

笑顔で、何でもないフリをしながら、けれど、少しでも長くヴォ

ルフといかつた。

そして、家に帰つて、一人になると、毎晩こり泣いていた涙があふれた。

「お父さん、お母さん」

呼んでも、返事は返つてこない。神殿で、本当に、ちやんと生活させてもらえているのか。恐かつた。

恐怖に飲まれそうになつたら、ヴォルフを思い浮かべた。

姫巫女を守つてくれる剣士。

それは、舞台の上だけのことだ。分かつていても、舞の間は變おしむように大切にされ、そして舞台から降りてもこり泣くと氣遣つてくれるその存在は、思い出すだけで、救われた。

「ヴォルフ様、ヴォルフ様……」

小さくつぶやく。その声は、儚く闇へと溶けてゆく。  
「ヴォルフ様……」。

リイナは心の中で、かみしめるようにその名を呼んだ。

舞台の上だけの、私の剣士。

最近、リイナの様子がおかしい。

ヴォルフは、神殿の修行から帰つてきてからのリイナの様子に、何とも言えぬ違和を覚えていた。

ラーニャや他の舞の仲間に聞いても「そんな事はない」と返されるのだが、ヴォルフには納得がいかなかつた。

確かに、一見以前と変わらぬように見える。むしろ前よりほがらかと言つてもいい。祭りが近いから浮かれているのだらうといふのがだいたいの見解であつた。

けれどヴォルフが感じるのは、そういう楽しげな違和ではなかつた。もっと、暗い、悲壮感のような物を感じていた。無理に明るく振る舞つてゐるよつな。

さりげなく探しを入れてみても、リイナは完全にそれを隠しきつていた。

隠していると感じるのはヴォルフの勘でしかない。もしかしたら本当に何もないのかかもしれない。

けれどヴォルフは、姫巫女に選ばれた当初の、人の妬みを笑顔で跳ね返していたリイナを見ていた。リイナは辛くとも笑顔でそれを隠す。人に頼らずに自分で解決しようとするところがあるのを知つていた。

一見、本当にのほほんと笑うから、何も感じていなによつに見えるほどに、リイナの精神力は強い。

そう思い至ると尚のこと、ヴォルフはどうしてもリイナが何かを隠しているような気がしてならなかつた。

「ちびすけ、なんか、悩んでることとかないか?」

あまりにもうまく躰す物だから、ヴォルフはリイナを捕まえ、面と向かつて聞いた事もあつた。

「悩んでいることですか?」

リイナはきょとんとしてヴォルフを見て、そして少し考へると、困つたように笑つて言つた。

「両親が、祭りの準備で忙しくて、全然帰つてこられないんです。

……実は、ちょっと寂しくて」

「そう言つと、

「最近、寂しくて私がヴォルフ様のお側にいようとしてしまつてい  
るせいですね」

などと謝罪と礼を返してきた。

一瞬、そんな事か、と納得しそうになつた。

けれど、ヴォルフは気がついた。背を向けた瞬間、リイナがほつ  
とついたため息に。こつそりと振り向いた先に、必死に自分を守る  
よみに自分を抱きしめるリイナの姿を見た。

やはり何かを隠しているのではないかとヴォルフは感じたが、そ  
れ以上追求したところでリイナは言つことはないだろつと思えた。  
ただ、出来るだけ気にかけるよみにした。

神殿から帰つてきてからのリイナの舞には、奇妙な迫力があつた。  
うまい下手ではなく、なぜか引きつけられる、えも言えぬ迫力。  
剣士に焦がれ、引き裂かれる痛みに苦しむ姫巫女を舞う姿は共に舞  
うヴォルフを、そして共に練習をしている奏者達の目を釘付けた。  
半月も神殿にこもつたためにみんなに会えなくて寂しかつたんだ  
らう、とからかわれていたが、笑うリイナを見ながら、ヴォルフは  
気付く。普段は隠しきつているリイナの悲壮感が、舞う時だけはあ  
ふれてしまつているのだと。共に舞うヴォルフは、リイナの苦しげ  
な所作の一つに、姫巫女を失う剣士の気持ちを味わつてゐるような  
既視感すら覚えた。

剣士の舞は、時の流れをさまよいながら時には引き離され、けれ  
どずっと姫巫女を護り続ける、という剣士を演じる。今のリイナの  
舞う姫巫女は、見るだけで胸を切なく刺し、ヴォルフに剣士の思い  
すら彷彿させた。

けれど当のリイナは、守りたいと思つても何も打ち明けてこないのだから、守りようもない。

何かあると思えてならないのに、ヴォルフは何も知ることの出来ないまま毎日が過ぎて行く。

力になりたいと思うのに、案じることさえさせてもらえないのは、存外寂しい物だと思う。頼つてもこないのは信頼されていないからか、それとも、遠慮しているのか。

否、そもそも頼ることなど考へてもいのだろう。出会つてまだひと月半しか経つていない。苦しみや不安を打ち明ける存在としては至らぬのも当然かもしだれなかつた。だが、リイナに何か悩みがあれば手助けの一つもしてやりたいと思うヴォルフには、その程度なのがと思うと、歯痒くもあつた。

こちらの都合も考えずに頼られるのは疲れる物だが、リイナに頼られるのは楽しかつた。元気がなければ氣になるし、力になりたいとも思えるのだ。

毎日見るリイナの笑顔が、相変わらず屈託ないものなことが、どうしても信じられず、痛々しく見えた。

リイナは、絶望の朝を迎えた。

三百年祭が始まる。

舞の後に、リイナは神殿へと召される事が決まっていた。姫巫女となる者として。

この日まで何度も泣いた。けれど、昨夜は泣かなかった。泣くのはその前の日で終わりにした。あんまり泣いてしまうと、目が腫れてしまうからだ。

前の夜に泣いてしまえば、きっとこうえが効かなくなるだらうと思えて、心を閉じて、泣かないようにした。

今日は、最後にグレンンタールの人たちと会える日なのだから。あこがれていた姫巫女の舞をする日なのだから。

赤い目や腫れた目をしていたくなかった。

リイナは起き上がると、ベッドの上で大きく息を吸つた。そして頬を押さえ、呪文を唱えるように「大丈夫」と繰り返す。笑顔でみんなと別れよう。姫巫女になるだなんて名誉なこと、きっと誰もが祝福してくれるから。

泣かない。誰も困らせたりしない。行きたくないなんて言わない。大丈夫。出来る。笑える。

何度も心の中で唱えて、そして顔を上げる。

リイナは、誰もいない家の中で、まるで本当に幸せであるかのように、にっこりと笑つた。

「ヴォルフさまー！ おはようござりますー！」

元気な声でリイナがやってきた。

「ようちびちゃん。朝っぱらから元気だな」

ヴォルフが駆け寄ってきたリイナの頭をがしがしつと撫でる。

「ぐしゃぐしゃになります！」

笑いながらリイナがその手を押さえる。

リイナの頭の上で一人の手が重なった。

「沃尔夫様、がんばりましょうね」

沃尔夫の手に触れたまま、リイナがにっこりと笑つた。

「……ああ」

沃尔夫は目を細めてまぶしげにリイナを見た。

リイナの舞いは順調に上達し、ひと月前までは間違わずに舞えるという状態だった物が、今ではラーニャのお墨付きがもらえるほどになつてゐる。

「おちびちゃんと舞うのも、今日が最後か。……寂しいもんだな」

沃尔夫のつぶやきにリイナが顔を上げると、沃尔夫はいつものからかうような表情とは違う少し困った顔で笑つていた。

「リイナ」

名前を呼ばれて、リイナは顔を上げた。沃尔夫に名前で呼ばれたことに驚いたのだ。

「俺は、祭りが終わって三日後にはグレンタールを出る。それからは、またしばらく戻つて来ることはないだろ。でもなあ、今のちびちゃんから離れるのは、心配だ」

沃尔夫が小さく溜息をつき、まっすぐにリイナを見つめた。

「俺がおちびちゃんと出会つて、ほんの一ヶ月だ。それに俺は舞いの練習を介してしか、君のことを知らない。でもな、たつたそれだけの出会いかもしれないけどな、俺はちびちゃんが落ち込んでたら心配もするし、力にもなりたいと思つてゐる。……リイナ、今、何か困った状態になつていなか？　なつてゐるのなら、いつでも力になる。俺に頼れ」

沃尔夫が真剣な顔でまっすぐにリイナの瞳をとらえていた。いつもとは違う男の視線を受けて、先に目を反らしたのはリイナだつた。わずかに震えながら「大丈夫です」と、少し苦しげな笑顔を浮

かべている。

ふうっとヴォルフが溜息をつき、リイナがそれに反応して不安げにヴォルフの顔を窺つた。それを見て、ヴォルフが苦笑する。

「大丈夫だ、怒つてない。俺は、無理して笑っているちびちゃんが心配なだけだからな。今言えないのなら、今すぐでなくとも良い。俺がここにいられる時間はあまりないが、それでも俺のかわいい姫巫女のためなら、いくらでも力を貸すからな。それを覚えておくんだぞ」

いつものからかうばかりではないヴォルフの言葉に、リイナはあふれそうになる涙を必死で押さえていた。

うつむいて、必死で涙をこらえる。

ヴォルフ様は、気付いてくれていた。ずっと神殿から帰ってきた日から、ずっと気付いてくれていた。今も、こんなにも心配してくれている。

それが、どれだけうれしいことか、きっとリイナの気持ちは、ヴォルフには分からぬ。

リイナを支えてきたのは、ずっとヴォルフの優しさだった。ごまかし続けていても、分かつてくれる、ずっと気にかけてくれるヴォルフがいたから、がんばって何でもないフリが出来ていた。けれど、決してそれは、ヴォルフに言つてはいけない事だった。それでも。

「……私、行きたくない……」

ぽつりと、知らず、言葉が漏れた。

けれど、それは息が漏れるほどの音にしかならず、遠く響く祭り会場の喧噪にかき消された。

「ん？ 何か言つたか？」

ヴォルフがのぞき込むようにリイナを窺つた。いつも以上に優しいヴォルフに、リイナは奥歯を噛み締めて、ゴクリと息をのんだ。そして顔を上げてにこりと笑う。

「いえ、ありがとうございます」

言える筈などなかつた。神殿にたてつくなど、そんな危険をヴォルフに頼めるはずがないのだ。巻き込んでいいはずがなかつた。

頼つたところで、ヴォルフが手を貸すわけにはいかない事ぐらい、リイナにも分かる。けれど力を貸すと言つた手前、おそらく無下にも出来ないだろつ。

なにより、もし仮にもヴォルフが神殿から逃れたいリイナの力に本当になつてくれるのだとしたら、それこそ、なんとしてでも阻止しなければいけない事だつた。何が何でもヴォルフにそんな事をさせるわけには行かない。グレンンタールの、誰もが認める未来の領主である。そんな罪を負わせられるはずがなかつた。

決して頼つていい人ではなかつた。この苦しみを吐き出すことさえ、してはいけない人だつた。

だから泣いてしまいそうなほどうれしさをじらえて、リイナは何でもないフリをして笑う。もう、無理して笑つているのは気付かれているようだが、それでも出来るだけ心配をかけたくないで、笑つた。

ここまで気にかけてくれていたことに動搖して、けれどそれ以上にうれしくて、だからこそ、迷惑をかけるわけにはいかないのだと誓つ。

無理をして笑つているリイナに、ヴォルフが仕方なさそうな笑顔を向けてきた。

「姫巫女を守るのが、剣士の役目だ。分かつてるな、ちびすけ。君が俺の姫巫女だ」

いつものようにからかう笑顔を向けられ、そしてリイナの髪をくしゃっと撫でるいつものヴォルフの仕草に、リイナはほつとして髪を押さえる。いつも通りを演出してくれるその優しさが心をほぐしてくれた。

「ぐしゃぐしゃになつてしまひます！」

抗議して、リイナとヴォルフは顔を見合させて笑つた。

それが、あまりにもいつも通りのように思えて、とても幸せで、

切なかつた。

間もなく舞いが始まる。

姫巫女の衣装に着替えたリイナと剣士の衣装のヴォルフは舞台の近くで構えていた。

これが最後という苦しさと、今はまだヴォルフと一緒にいられる幸せ、そして三百年祭という大舞台を前に、リイナは緊張していた。貴賓席までもうけられ、そこには王族らしき人物も見え、普段の祭り以上に盛大な大舞台なのだと、実感する。

けれど、リイナにとっては、最後の幸せな時間になるのだ。舞いを終えればリイナは日常生活と別れることが決まっていた。

姫巫女として、この三百年祭の大舞台でお披露目がされるのだから。

だから、今日は舞いも、他のどんなことも、めいいっぱい楽しもう。いっぱい心に焼き付けておこう。リイナはそう決めていた。緊張するこの舞いも、ヴォルフとの大切な思い出にするのだ。村に戻つてから、何度かエンカルトがリイナを訪ねてきた。彼がやつてくる一番の目的がリイナに釘を刺すためであろう。そして、姫巫女として神殿に上がるための準備を進めるためでもあった。いろんな事がリイナの望まぬところで、勝手に決まっていた。今リイナが身につけている衣装もそつだつた。

毎年の舞いで着ける衣装ではない。これは、本物の姫巫女の衣装だつた。

三百年祭で新しくあつらえたと誰もが勘違いしているが、違うのだ。これはリイナのためにあつらえられた、本物の姫巫女の衣。エドヴァルドの姫巫女に送られるはずだった、リイナの作った紫泉染のベールもまた、リイナ本人が使うことになった。

重い、重い、枷のような衣装を纏い、けれど、幸せな最後の舞をヴォルフと舞う。

「行こうか」

ヴォルフが手を伸ばした。

リイナはそれにそつと手を重ね、ヴォルフを見上げた。

夢見た私の剣士。望んではいけない人。

しゃらん、と、身につけた鈴が鳴る。

リイナは微笑みを纏つた。

さあ、最後の舞台を華やかに彩ろう。幸せな生活の終わりに。

舞いが始まった。

どんと鳴り響く太鼓の音。

しんと静まって息を潜めて見守られている舞台の上で、姫巫女がしなやかに腕を上げ、シャンと鈴を鳴らす。

普段のリイナを知る者には想像も付かないほどに、どこかピンと張り詰めた空気を纏い、ただそこにいるだけで魅入られるような壮絶な迫力があった。

その迫力は、姫巫女を彷彿とさせる氣品のようにも感じられた。ヴォルフと共に舞っているのは、無邪氣で愛らしいだけの少女ではなかつた。

どこか愁いを秘めたようなその瞳と、剣士を恋い慕う表情。剣士を愛し、導く、尊く、高貴な姫巫女の姿そのものようだつた。

『……ちびちゃん?』

舞いながら、リイナはヴォルフに呼びかけられた気がした。まるで心が通じ合つてているかのような感覚があつた。ヴォルフがリイナの瞳を、問いかけるように見つめていた。

その瞳を受けて、リイナは一層切なげに微笑んだ。

『さようなら、さようなら、ヴォルフ様……』

リイナは、心の中で別れを告げる。

姫巫女も、そうだったのだろうか。時の流れに翻弄され、剣士と別れるその時。こんな切なさを抱いたのだろうか。

けれど、姫巫女は良い。剣士とまた出会えるのだから。  
私とは違う。私は、きっと、もう一度と、ヴォルフ様には会えない  
のだから。ヴォルフ様は、私の剣士ではないのだから。

どんと最後に太鼓が鳴り響き、姫巫女と剣士の舞いの終わりが告げられる。

盛大な拍手と歓声が沸き上がった。

リイナとヴォルフは、顔を見合わせて微笑むと、舞台を降りた。

「すごい迫力だつたな、俺の姫巫女は。いつの間に、こんなに綺麗に羽化したんだ」

ヴォルフが笑いながらリイナの髪をくしゃっと撫でる。

それを感じながら、こんなふうにヴォルフ様に撫でられるのも最後なのだと、リイナは切なく微笑んだ。

「リイナ！！ すばらしかつたわ！ 今まで最高の出来だつたわ！」

ラーニャが駆け寄ってきて、リイナを抱きしめた。

「ラーニャさん……！」

リイナはその背に腕を回し、力一杯抱きしめた。ラーニャともこれが別れになるのだ。

「ラーニャさんのおかげです。ラーニャさんにお会いできて、本当に幸せでした」

「なあに、まるでお別れでもするみたいな言い方をして。大げさよ」興奮気味なラーニャが、笑いながらリイナの頬を撫でる。

リイナは切なくそれに笑いかけると、小さく首を横に振った。

「……最後、なんです。お別れ、です」

覚悟を決めて、そつとつぶやいた。

「……え？ どういう、事？」

驚いた様子のラーニャに、リイナは、精一杯の笑顔で笑いかける。

そして、ヴォルフを見た。

「ヴォルフ様、一緒に舞の練習をした日々は、楽しかつたです。ヴ

オルフ様と出会えて、うれしかった。今まで、ありがとうございました」と、

した

「……ちびちゃん……？」

何があった、と、ヴォルフが尋ねようと詰め寄ろうとしたその時。

「リイナ様」

静かな声が割り込み、リイナに触れようとしたヴォルフの手が止まる。

「まもなく、お披露目をいたしますので、こちらへお願ひします」

リイナはエンカルトを見てわずかに顔をゆがませ、不快感に唇を噛んだ。

まともに別れすらさせてもらえないらしい。

リイナはヴォルフとラーニャ、そして周りにいた舞いの関係者に向けて、一度大きく頭を下げた。込められる感謝を、精一杯込めて。そして、出来るだけがんばって笑顔を張り付かせた。

そのままエンカルトに促されるまま足を進めていたが、リイナはこらえきれずにヴォルフを振り返った。

「ヴォルフ様」

名前を呼ぶと、エンカルトをにらむように見つめていたヴォルフの視線がリイナをとらえ、問いかけるように見つめてくる。

向けられた瞳が、とても心配をしているように見える。ヴォルフだけは、リイナの笑顔の裏にある気持ちを、感じ取ってくれているようと思えた。

それが、うれしかった。

「さようなら」

リイナは笑つてつぶやいた。

本当は泣きたかった。泣き叫んで、行きたくない、助けてとすがりたかった。

けれどヴォルフはただの知り合いでしかない。そしてグレンターにとつて、とても大切な人だった。どんなにリイナが慕おうとも、どんなに彼が優しく接してくれようと、それを願つていい人ではな

かつた。

それでも、もし「助けて」と一言願えば、彼は叶えてくれるだろうか。約束したように、助けてくれるのだろうか。

けれど、リイナはそれを確かめることも問い合わせることも出来ぬまま、笑顔で別れを告げる。もう一度、ヴォルフにだけ頭を軽く下げた。目を閉じると、こらえていた涙がこぼれた。

そしてヴォルフには涙が見えないよう、下を向いたまま進行方向に体を向ける。

これが、別れなのだと、リイナはぼんやりと感じる。背中を向け、一步、一步と、ヴォルフから遠ざかってゆく。

舞っているときは、あんなにも近くて、肩を抱かれた手の大きさも、力も、包み込むような安心感も、こんなにも鮮明に思い出せるのに。

けれど、それは、舞の中だけのこと。私に、それを求める権利などないのだ。

リイナはそう自分に言い聞かせた。

二人は、伝説の姫巫女の舞台を降り、ヴォルフは、リイナ姫巫女の剣士ではなくなったのだから。

ヴォルフは呆然として、立ち去るリイナの背中を見つめた。

さよならとは、どういう意味なのか。それは、隣にいるあの男のためか。

まさか結婚でもするのか、とも考えたが、結婚をするにはあの男は年が行き過ぎている。リイナの父親と言つても良いような年齢だろ？。それに、あの男は見たことがあった。三百年祭でエドヴァルドからやってきた神官だ。

何が起こっている。

お披露目とはどういう意味だ。

ヴォルフの脳裏に、リイナがたつた今浮かべた笑顔がよぎる。まるでうれしそうな表情を装っていたが、ヴォルフには悲しげな笑顔

にしか見えなかつた。泣いているようにも見えた。

リイナは、望んでいないのだ。

ヴォルフは確信する。リイナは望んでいないのに、何かを成そうとしている。

「お別れって、どういう事かしらね？」

話しかけてくるラーニャに、「少し考えたいことがあるから」と、ろくな返事もせずにヴォルフは一人足を速める。

ヴォルフは、リイナが神殿から帰ってきてからの不可解な様子について思い返していた。

そして祭りの前、かすかに聞こえた吐息のようなリイナの声。あれは「行きたくない」ではなかつたか。あの瞬間ははつきり聞き取れなかつたが、あのかすかに耳に残る音が、ヴォルフの中で、今、はつきりと意味を持つた。

小さな、小さな、思いの吐露。あれがリイナのできる、精一杯の助けを求める声だつたのだ。

助けてやりたいと思つた。

あんなふうに笑うリイナは見たくなかった。

あの愛らしい少女にあんな苦しげな笑顔をさせて良いはずがなかつた。

ヴォルフは、リイナの向かつた先を一度振り返り、そして、決意を込めて人混みの中へと足早に進んでいった。

「コンラート殿……！」

ヴォルフはようやく見つけたコンラートの肩をつかんだ。

「……ヴォルフ殿」

驚いたように彼が振り返ったが、ヴォルフは何の前置きも、挨拶すらもなく、コンラートに詰め寄つた。

「今、リイナに別れを告げられました。あの様子は普通じゃない。しかもあの神官も。何があつたんです？」

唐突に向けられたヴォルフの剣幕に、コンラートはわずか目を見開いたが、すぐに気を取り直すと周りに一度軽く目を配つた。そしてヴォルフの非礼をとがめることなく、ただ、ふっと息を吐いた。

「……リイナは、姫巫女になる。 本物の、ね」

「……本物？」

「そう、それだけのことだよ」

そう言うと困ったように微笑みを浮かべたコンラートに、ヴォルフは彼が話を打ち切ろうとしているのを感じる。

それだけのことの善がない。リイナから感じる悲壮感は、そんな言葉で済まされるような物ではなかつた。コンラートは何かを隠そうとしている。ヴォルフは彼をこのまま逃すまいと詰め寄つた。

「行きたくない」と、リイナが言いました。なぜ、あなたは止めないんですか？」

非難めいた言葉がついて出たヴォルフを見て、コンラートが驚いたように彼を見た。

「リイナが、君にそう言ったのか？」

コンラートの探るような視線に頷くと、コンラートは諦めたように息をついた。

「……ちょっと、場所を移そうか」

人気の少ないところにまで来ると、コンラートはヴォルフを見た。

「……気付いているかい？」

「コンラートが苦く笑いかけると、ヴォルフは視線だけをちらりと周りに配らせ、そして小さく頷いた。

「周りで兵士がさりげなくコンラートを囲んでいる。

「あんまり、良い環境とも言えないが、逃げさえしなければ、直接関わってくることはない。」ここで話そう

「……お願いします」

ヴォルフが頷くと、コンラートは、仕方なさそうに話し始めた。「この前の神殿での修行で、リイナには、姫巫女になれるほどの力があることが分かったのだよ。力がなければ利用価値も認められなかつたのだろうが。リイナは望んでいないが、神殿が強制的に連れていこうとしている。……私たちが足枷になつて、リイナは断れずにいるんだよ。ここまで見張られると、たまたまもんじゃないよ」溜息をついたコンラートに、ヴォルフは周りの兵士の存在を感じながら頷いた。

「……あなた方が、人質、ですか」

「……私たちがいくら覚悟をしていても、私たちを犠牲にしてまで自由を望む子ではないからね。巫女になるということは、世俗を捨てるということだ。望まぬ者にとっては、牢獄に等しい。望む者は、のどから手が出るほど欲しい地位であつても、どんなに名誉で誇らしいことであつても、望まぬ者には、どんな地位も、名譽も、ただの重荷だろうよ。あんな人生を閉ざされた場所に閉じ込めたくないのだけどね」

溜息をついたコンラートに、何を悠長なことを、と、ヴォルフはいらだちを覚えていた。しばらくリイナに会つていらないからそんな事が言えるのだ。

「俺が、助けます」

決意を込めて、ヴォルフはコンラートを見た。けれど、コンラートはとんでもないというように、ヴォルフを諭し始めた。

「……何を馬鹿なことを。軽々しくそんな事を言つてはいけないよ。

君には背負つて いる物がある。君が何か行動を起こせば必ず累が及ぶ。一人の問題ではすまない。分かつて いるだろ？

「しかし、望まぬ者を無理矢理神殿に上げるなど、暴挙です。それなりに争う手立てはあるはずでは」

聞いた以上、このままにして置いて良い問題ではないと分かつた以上、ヴォルフは自分の出来ることを考えた。

許されて良いはずがない。

リイナに、あんな顔のまま神殿に行かせて良いはずがない。

けれど、ヴォルフの決意に、コンラートが水を差す。

「……だとしても、君が口出しをすることではない。君は無関係な人間だ。今手出しをしたとして、その後の責任を、あの子に対して負えるのかい？」

なぜ、と、ヴォルフはいらだちを覚えた。コンラートは、娘を助けたくないのかと。リイナが嫌がっているのを知っているというのに、彼女を助けることには消極的な姿勢が腹立しかつた。

「」の後の責任だと？ リイナを助けるためなら、何だつてしてやるつじやないか。

コンラートのどこか淡々とした物言いに、ヴォルフの決意は、風にあおられた炎のように、強くなる。

「……負います」

低い声で頷いた、ヴォルフに、コンラートが、わざとらしいほど仕方なさそうに溜息をついた。まるで、愚かな若輩者に呆れたように。「……さつきも言つただろう、軽々しくそんな事を安請け合つする物ではないよ」

なぜだかは分からぬが、コンラートはヴォルフのいらだちをおつて いるようにも見えた。

このまま俺を怒らせて、話をそらそらとしている？

感情的になれば、本筋を見失う。ヴォルフはコンラートを見つめて、深く息を吐いた。

落ち着け。

話を逸らさないようにしなくては。

いらだちを押さえながら、ヴォルフは、言葉を選びながら「コンラートを見据える。

「軽々しく考えているつもりはありません。リイナが安心できるまで、責任を負います」

しかし、コンラートが続けざまに、ヴォルフの弱みを突いてくる。「どうやって？ 君はエドヴァルドにすぐに戻るだろう。グレンタルに住むリイナを、君がどうやって守るというのだ」

「落ち着くまではどまります」

「騎士団がそんな事を許すとでも？」

「……それは、俺の問題です。現時点の優先順位は、俺の騎士団での立場ではなく、リイナの行く末です。ずっと何でもないフリをして笑っていたあの子が、漏らした一言を、俺は切り捨てる気はありません」

こんな緊張を、騎士団以外で強いられたのは初めてだった。何か一つ言い詰まつたり、弱みを見せれば、そこを追求されて、道を閉ざされる、そんな緊張があった。

ヴォルフは目をそらさないように、出来る限りの強い決意もつてコンラートを見つめた。コンラートがヴォルフを排除しようとしているのが分かった。リイナに関わらせたくないのだと。

そんな事を受け入れるつもりは、毛頭ないのだと、ヴォルフはコンラートに示していた。

ややあって、コンラートが溜息をついた。

諦めたように、そのくせ、どこかほっとしたように。

ヴォルフもまた、内心ほっとする。コンラートからの拒絶する空気が解かれていた。

「……なぜ、君がそこまでリイナに肩入れする。あの子とは舞で出会っただけの顔見知り程度の子だろう。それとも、君はウチの娘を好いているのか？」

まさかの問いかけに、ヴォルフは、虚を突かれて動搖する。

「コンラートの攻撃はまだ終わっていなかつたのか。と、思いながら、ヴォルフは必死に動搖を抑えて、何とか答えた。

「え、いや、そういうわけでは。かわいいとは思っていますが、妹のような……。ただ、あの子が困つてしたり悲しんでいたりするのなら、俺の出来る範囲で守りたいとは、思っています、が……」

そのヴォルフの様子に、コンラートが楽しげに笑った。

「ははっ、ずいぶんとウチの娘も気に入られたものだね。親としては、こんなに心強い男が田をかけてくれてることを喜ぶべきかな？」

「コンラートのからかうような問いかけに、どうやら、本当にからかっただけで、話を誤魔化そうとしているわけではないらしいと安堵しながら、ヴォルフは、「ですから、そういう意味では……」と、戸惑う。

大概、この手の会話には慣れているつもりだつたが、相手がまさかのリイナであることに、父親を前に「子供過ぎて相手にならない」となどと言つのもどうかという思いと、このコンラートにからかわれると思つていなかつたといふことと、何とも反応しづらい状況に陥つていた。

そんな微妙な状況でコンラートの意図がつかめなかつたが、彼の視線は、確かに先ほどに比べて柔らかくなつていた。

「いや、しかし、本当にありがたいことだ。君の気持ちちは本当にうれしく思うよ。だから君には、あの子も弱音を吐けたのだろう。少し、驚いたよ。あの子は、我慢強いからね」

「コンラートは噛み締めるようにつぶやくと、ヴォルフをまっすぐに見据えた。

「ヴォルフ殿。君は、リイナを本当に助けたいということなのだね。私が止めても？」

「……リイナが望むのなら、俺は自分の出来る限りのことをします」

「……ならば、私は君を全力で止めよつか」

静かに、コンラートが宣言した。

「……なぜです！」

声を荒らげたヴォルフに、コンラートが静かに答える。

「これから話すことを口外しないこと、それが君に話をする条件だ」見据えてくるコンラートの視線をうけながらヴォルフは肯いた。穏やかなそぶりでいるが、悔れない人であることをヴォルフは前から感じていた。それは、先ほどの会話でも、痛いほどに実感した。その彼が、全力で止めるというのだ。リイナが姫巫女となることに、どれだけの意味が隠されているのかと息をのむ。この、コンラートでさえ、彼女を助けることを諦めるような事情とは。

彼の言葉を、軽く受け止めてはいけない。ヴォルフは気を引き締めて彼を見つめた。

「君は信頼に足る人物だと思つていて。なにより娘が信頼している。そして、ありがたいことに、君もリイナを気にかけてくれている。だから話すが、一番の理由は、君に手を出して欲しくないからだ。他人を巻き込むのは、私も、おそらくあの子も本意ではないからね。あの子の立場は、君の立場だけでなく周りの人間さえも脅かす。深入りしてはいけないよ」

脅すようにじんわりと笑つたそのコンラートの表情に、ヴォルフは息をのんだ。

「リイナはね、私とラウラの間に生まれた子ではないのだよ。私と……エドヴァルドにおわす姫巫女との間に生まれた子だ。だから、王家と神殿の思惑が絡む、根の深い問題だ。知つている者は、ほんの一握りだがね、その中でも、私が父親と知る者は私と姫巫女を含め、四人。君を含めて五人か。リイナにも知られていない。神殿の醜聞だからね、知つているだけで殺されかねないよ」

どんなでもないことを聞かされた、とヴォルフは内心舌を巻く。知らないでも良い事を知らされたようだ。

にこりと笑つたコンラートの笑顔の意味は、知つた以上、首を突つ込めば、更に死に近づく、だから関わるなという脅しだ。

「それ故にそれを知る一部の者にとつては存在価値も高いという事だ。手出しして欲しくない理由は、そこにある。下手に手を出せば、君自身のみならず、領主殿含む」家族にまで累が及ぶ」

彼がここまで脅しをかけてくるとは思いもしなかった。

確かに、ヴァルフの知った内容からすると、ヴァルフが何か行動を起こすだけで、本気で潰しにかかるだろう。姫巫女が婚姻関係もなく神官と通じたなどとなると、姫巫女に対する神聖さと神殿への信頼さえも揺らぎかねない。

ヴァルフが知つたことを、コンラートが神殿側に伝える気はないだろう。それでも、情報とは持つだけで、力となりうる。この場合は、ヴァルフの枷に。

ギリッとヴァルフは握りしめる拳に力を入れた。

「私達の問題だ。君が絡めば自体は更にややこしくなる。ヴァルフ殿。君は身を引きなさい」

「しかし……！」

「まだ分からぬのか。リイナが望むのなら、私達が助ける。しかし、それは、私達の犠牲の上に成り立つから、リイナは望むつもりがない。私達はリイナのためならばどんな覚悟も出来ている。だが、あの子が望まぬ以上、私達が犠牲になるのは私達の自己満足だ。私達が犠牲になれば、あの子の心に、育ての親を自分のために死なせたという傷を一生背負わせるのだ。君が動いても同じだ。自分のために無関係な君を巻き込んだなら、あの子は一生悔いがちだ。私達が犠牲になる以上に」

コンラートが苦しげに、そして初めて怒りをあらわにつぶやいた。

「今は、手放すしかないんだ……！」

身動きをとれずに苦しんでいるのは、コンラートも同じなのだ。ややあって、コンラートが長い溜息をつき、ふっと肩の力を抜いた。

「……もつと、あの子を、わがままに育てればよかつたと、思うよ。自分の事より、人のことを思うような、あんな優しい子に育てなければ良かった……」

そう言つて、コンラートは口をつぐんだ。

ヴォルフは言葉を失う。これほどの人が、ただ訳もなく往生しているはずがなかつたのだ。リイナを思うが故に、手を出せずにはいる。彼に向けるふさわしい言葉が見つからなかつた。

この人は、自分よりも強い焦燥感に駆られているのだと、ヴォルフはようやく気付く。一見穏やかに落ち着いているように見えるが、決してそれは心の内を表してはいないのだ。

彼は苦しんでいるのだ。

何を言えるというのか。彼は誰よりも娘の最善を考えていた。ヴォルフにはコンラートの決断が最善とは思えない。けれどたとえコンラートの見据える未来がヴォルフの思いとは違う方向を見ていても、もはやそれを否定することは出来なかつた。尊ぶ物が違えば、最善の道も、求めるべき最善の結果も食い違つてくる。苦悩するコンラートの、これが最善なのだと理解できた。

けれど、それでもヴォルフには肯けないコンラートの言葉があつた。

「それでも……俺は、そういうリイナが好きですよ」

躊躇つた末に、ヴォルフはこれだけはと思つて言つた。それは、たとえコンラート相手でも譲れなかつた。

リイナが優しい子に育たなければよかつたとは思えない。コンラートに、苦し紛れであつても、そういう言葉は言つて欲しくなかつた。

コンラートのそう思わずにはいられない気持ちは分かるのだが、それでも、リイナを否定したくなかった。

リイナらしい、ヒヴォルフは思ったのだ。

人より自分を考えると言いたくなる。そういう彼女だからこそ、願う。誰を踏み台にしても、好きなように生きればいい、と。……

けれど、それが出来ない彼女だからこそ好ましく思う気持ちがあるので。まっすぐで、一生懸命で、強くて、優しいその性質が愛おしい。

「コンラートがはつとしたよついに、ヴォルフを見た。

そして切なげにコンラートが微笑む。

「…………そうだな。…………困ったことに、私も、なのだよ…………」

かける言葉もなく、二人の間に沈黙が訪れた。

それでも、ヴォルフは決して諦めたわけではなく、今、自分に何が出来るかを考えていた。

コンラートは、今は何もする気がないらしい。それは理解し、納得している。だからといって、ヴォルフがそれに従わなければならぬ理由にはならない。コンラートの意図とは反するが、ヴォルフが思う自分の出来る最善の道は、リイナをとりあえず神殿に上がらせないことだと考えていた。

もし、リイナが神殿に上がるのを止めるとするのなら。

まずは、リイナに上がる意志がないことを明確に、人々に認知させなければならない。それで、ひとまずは神殿の行動の足止めになるはずだ。

ヴォルフは、コンラートの言つよついに、「今」を諦めるつもりはなかった。

そんなヴォルフに気付いてるかのよついに、コンラートが釘を刺した。

「…………ヴォルフ殿。これは、ただの愚痴だ。分かっているね？ 忘れなさい。君には関係のないことだ。中途半端な情は、リイナを苦しめる。…………親としては、君がこうして気にかけてくれたことを、感謝する」

「…………俺は…………！」

諦めるつもりがないと言おうとする、ヴォルフを、コンラートが遮る。

「……ヴォルフ殿。お立場を考えなさい。君には才覚もある。だが、己の力を過信してはいけない。君は若い。それ故に、見えない物もある。なにより一人で立ち向かえるような相手ではないのは君にも分かっているはずだ。よく考えなさい。特に今は。神殿は、……特に、この件を担当しているエンカルトは、全力でリイナを手に入れようとしている。今逆らえば、君の周りだけでなく、神殿におけるリイナ自身の立場も脅かされるんだ」

ヴォルフは言葉に詰まった。

「いいね？」

ヴォルフの思惑さえも見越しているのではないかと思うような視線を受けて、ヴォルフは黙つてコンラートに頭を下げる。別れを告げると、彼に背を向けてヴォルフは「そこ」へ向かって歩き出した。

それでも。それでもだ。

ヴォルフは決意を胸に足を進める。

俺は、自分に出来ることをする。

守り方は、一つではない。

コンラートにはコンラートの考えがあるように、ヴォルフは、己の信じた道を進む覚悟を決めていた。

「ここの後の、神殿の祭事が終わりましたら、リイナ様のお披露目を行います」

エンカルトの言葉を聞きながらも、リイナは彼に目を向けることがなく、じっと佇んで遠く一点を見据えていた。

エンカルトの言葉に反応しない、それだけがリイナの出来るただ一つの反抗の意志。

今、ここにいるのは自分の意志ではないのだと、さそやかに示す

リイナの反抗は、しかしエンカルトによつて簡単に黙殺される。

リイナのささやかな反抗も、無反応な姿も、エンカルトにとっては、何の問題でもない、むしろその様子を楽しんでるようすらある。それ以外は、リイナがそこにいさえすればよく、ただ従えば満足なのだ。

エンカルトが楽しげにリイナを見つめている。

「今までしてきたように、最高の笑顔で神殿に上がつていただきます。……グレンタール中から祝福されて」

リイナは、奥歯を噛み締めた。わざと、リイナの感情を逆撫でようとしているのが分かつた。

反応なんて、しない。憎しみの視線さえ、この男に向けるのは不快だった。

リイナはそれさえも反応を拒み、遠くをただ見つめて、怒りに叫びそうになる心を殺した。

重い、重い、姫巫女の衣装。それは確かにリイナの楔。逃れることを許さないことを思い知らされる。

あれほどまでにあこがれ、心を込めて作った紫泉染のヴォールは、今はもう、リイナの動きを絡め取る網のようにも思えた。

エンカルトと過ごす重い時間が、じわりじわりと過ぎていく。夜も更けてきて、辺りは薄暗く、灯る松明の光が柔らかく辺りを照ら

している。

間もなく行われるお披露目の準備で、エンカルトがリイナの元を離れた。

その存在が側にないことにほつとするリイナの前に、ふと、大柄な人の影が差す。

リイナは目の端で誰かが来たのを感じながら、エンカルトだろうと、視線を向けることなく、遠く一点を見つめたまま動かずにいた。

「リイナ」

その影が、彼女の名を呼んだ。それは、たった今別れを告げ、そして、もう、聞くことはないだろうと思っていた人の声だった。ゆっくりと目を向けると、リイナが慕う、その人がいた。

「姫巫女になりたいか」

唐突にかけられる言葉に、目を見開く。ヴォルフはすぐ近くにいて、まっすぐにリイナを見つめていた。

「君が望むのなら、俺が助ける」

来い、とその人は手を伸ばしてきた。

夢ではないかと思った。まるで、リイナが望んだ幻のよう、に、望むままの言葉を向けてくれている。

リイナの顔が今にも泣き出しそうにゆがんだ。

うれしくて、幸せで、夢のよくな感動。

「……ヴォルフ様……」

涙に震える声がヴォルフを呼んだ。しかし、彼女はただ首を横に振る。「己を諫めるように、何度も、何度も。

「いけ、ません……」

血を吐くような思いで、その一言を絞り出す。

今まで、何度、ヴォルフは苦しむリイナにこうして手をさしのべてくれただろう。そのたびに心が救われたように思えた。けれど、

それを断る度に、その手を取れない苦しさと戦つてきた。心が切り刻まれるようだった。なにも考えずにすがることが出来たのなら、どれだけ幸せだつただろう。

けれど、無知を理由に、それに甘えることなど、出来るはずがないのだ。その手を取ると云ひとは、そのまま、ヴォルフの立場が悪化することへと繋がる。

「なぜだ」

苦しさに身をすくめるリイナに、ヴォルフが優しく問い合わせた。ヴォルフの優しさを無下にする事へのいらだちもなく、責めるわけでもなく、ただ、静かにリイナの気持ちを探るような問いかけ。なのに、リイナは、ただ、その手を取れない事実だけしか返すことが出来なかつた。

「無理なんです……」

「なりたくないんだる?」全部、コンラート殿から聞いた。大丈夫だ。俺が何とかするさ」

ヴォルフがリイナに笑いかけてきた。いつもの軽口を装い、まるで彼女の気持ちを和らげるようだ。

「ちびちゃん一人ぐらい、俺が守つてやる。君は、俺の姫巫女だろう? なあ、おちびちゃん?」

幸せを形にするのなら、きっと、今、目の前にいるヴォルフ様が、それだ。

リイナの胸が幸せで痛いほどに苦しくなり、のどが、まぶたが、こみ上げてくる涙に、熱さを訴える。

泣いて、その腕にすがりつきたい。行きたくない、助けて、と訴えたい。助けてくれるというその言葉を信じたい。ヴォルフなら、きっと大丈夫と信じたい。

けれど、そうした時、彼が背負う物は、何なのか。

感情のままにヴォルフにすがりついて、ヴォルフが背負う物は何なのか。

コンラートがどれだけのことを話したのか、リイナには見当も付

かない。けれど、今の状況をヴォルフはおそらく理解している。ならば、どれだけの覚悟を持つて、リイナを助けると行つているのか。決して、軽々しく言える内容ではないことぐらいリイナには分かる。リイナ以上に、ヴォルフは分かっているはずなのだ。それだけ思つてくれている人を、どうして神殿との対立などと言つ、途方もない状況に巻き込むだらう。

泣いちゃ、ダメだ。ヴォルフ様に心配をかける。  
のどにこみ上げてきている固まりを何とか飲み込み、あふれそうになる涙を、必死でこらえる。  
笑わなきや。ヴォルフ様に心配をかけさせないよう、笑わなきや。

吸い込んだ息が、震えるように歪に揺れながら、胸へと届く。  
そして、リイナは、ゆっくりと笑顔を作ろうとした。

そしてリイナの顔はくしゃりと泣きそうにゆがんで、けれどそれは痛々しい笑顔を形取つた。それがリイナの限界だった。

「……ヴォルフ様に、そう言つていただけただけで……もう、十分です」

何とか絞り出した声が震えた。

声に出してしまうとこらえきれず、涙があふれた。

無理だった。これ以上、ヴォルフの前で偽ることが出来なくなつていた。

唯一人、ずっとリイナの本心を見抜き、心配してくれていた存在。苦しい時に、必ず手をさしのべて、リイナを待つてくれていた。無理をするのも、極限に来ていた。

「い、ごめんな、さ……」

涙を流しながら首を振るリイナに、ヴォルフは一步を踏み出し、彼女の目の前に手を差し出した。

ほんの一歩リイナが足を踏み出せば、その手を取れる。

「心配するな、君の大切な物は全部、俺が守る。……リイナ、来い

……」

その声の強さに、リイナは震えた。

リイナは目の前に差し出された手をすぐにでも取りたい衝動に駆られた。

目の前には自分をまっすぐに見つめるヴォルフの瞳があった。

まるで、本物の姫巫女の剣士様みたい。

リイナの胸が震える。それはえも言えぬ感動だった。

唯一人姫巫女に仕え、ただ全身全霊を持つて姫巫女を守る剣士。あこがれの夢見た剣士が、ヴォルフとなつて、リイナの前に存在しているようだつた。

うれしさと、苦しさの狭間で、リイナはぼんやりと考える。

「……あり、が、と……『ございま、す……』

差し出されたその手が愛おしくて、幸せで、更に涙があふれた。なぜ彼がここまでしてくれるのかリイナには分からなかつたが、生半可な覚悟で言つていらないだろう。

だからこそ、その手を取るわけには行かなかつた。

「……さよなら、ヴォルフ様」

リイナは自分の手を膝の上で強く握りしめ、差し出された手を取りそつになるのをじらえる。

リイナの胸が、引き裂かれるように痛みを訴えた。

ヴォルフは舞台の上で姫巫女としてお披露目をされるリイナを、やりきれない思いを抱えながら見つめていた。

リイナに別れを告げられた後、戻ってきたエンカルトによつて、ヴォルフはその場から追い出された。

そして、そのまま、言葉を交わすことなく別れることとなつた。

「リイナ！」

もう一度、そう、名前を呼んだが、彼女はヴォルフをただ悲しそうに見つめただけだつた。

リイナは、ヴォルフの差し出した手を取ることはなかつた。

そして今、リイナは舞台の上で、姫巫女として祭り上げられ、いつものような可憐な笑顔を浮かべて村中からの祝福を受けている。その笑顔がヴォルフの目に痛々しく飛び込んでくる。そして、村中の歓喜の声がヴォルフの焦燥感をあおる。

グレンタール中が、姫巫女の誕生にわいていた。

祝福と歓声が響き渡るのを聞きながら、それが重く耳に響くのをヴォルフは苦い気持ちで受け止めていた。あの舞台の上で笑顔を浮かべているリイナには、どのようにこの歓声は響いているのか。

だが、リイナは笑顔でそれに答えていた。

誰もがリイナがリイナの身の上に起こつた力の発現を幸運と思っているというのに、その理解されない苦しさを隠して彼女は笑つてゐる。

リイナの友人達は「うらやみながらも祝福し、仕事先のアヴェルタは急にいなくなつちや困ると言ひながらも笑顔で送りだそうといふのみ。

なぜ、このことを幸運と思える者の元に起じり、望まぬ物の元で起こるのか。

ヴォルフは遠くからリイナを見つめながら、その皮肉さを呪った。

翌日にはリイナは神殿へと上がる。もう一度、とヴォルフはリイナと会う機会を狙つたが、それはかなわぬまま夜が明けた。リイナがグレンタール神殿に姫巫女として召される、その日が来た。

それはグレンタールにどつても名誉なことであるから、村をあげて姫巫女の門出を祝い、祝福と共に送り出される運びとなつてている。村の中心部には住民が集まり、神殿へと続く道へと花道が作られている。ヴォルフはリイナが運ばれて行くのを、人混みの中から見ていた。

「リイナ！」

祝福と歓声の中、ヴォルフは田の前を輿にのつて通り過ぎてゆく少女に向けて名を呼んだ。ゆっくりと通り過ぎてゆく田の前で、リイナの肩がびくんと震え、顔がヴォルフに向けて振り返りうとした。けれど、その動きは途中で止まり、そして、またゆっくりと前を向く。

嫌なのではないのか。

その横顔を見ながら、心の中で少女に問いかける。

このまま諦めるのか。

「リイナ……っ」

ヴォルフのかみ殺されたつぶやきは、歓声の中にかき消されて消えた。

リイナの後ろ姿に、ヴォルフは焦燥感を覚えていた。

ヴォルフは、力のない己のふがいなさに腹を立てていた。

神殿に直接刃向かうのは危険が多すぎる。ましてやリイナの両親の命がかかっているのだ。無理矢理連れ出そうとしたとしても、リイナは決してそれを望まないだろう。

また、ヴォルフ自身の立場もあつた。神殿にたてつくなど、次期領主が起こして良い反乱ではない。ましてや、首都エルヴァルドの騎士団に出向している身だ。騎士団の信頼を貶めるようなまねをするべきではない。

言い訳があふれるように、ヴォルフの中にわき上がる。  
それでも。ただ一言、リイナが助けを望んだなら、ヴォルフは助けることを選ぶつもりでいた。この場であろうとも、連れ出して逃げても良いと思うほどの覚悟さえ持っていた。

リイナが嫌だという意思表示さえすれば、難しくても、手立てはあるのだ。確かに危険もあるし、うまくいく保証もない。しかし、コンラートが言つたように、神殿での生活は望まぬ者にとっては牢獄なのだ。人生の最後に、自分を捨て外の世界と縁を切り、何も望まず人のために生きていく場所なのだ。

リイナ！ 僕を呼べ……！！

ヴォルフは、去りゆくリイナに心中で叫ぶ。しかし、彼女は振り返ることもなく、神殿へと消えていった。

守つてやりたいと思つた少女は、ヴォルフの腕からすり抜けていつた。

「…………くそ……！」

ヴォルフは自室で一人、声を荒らげた。やりきれない怒りに、拳を机にたたきつける。

無理に笑顔を浮かべたリイナの姿が脳裏から消えない。

ヴォルフの声に気付きながら振り返ることさえ拒むしかなかつた、あの姿を思い出すだけで苦しい。

無理矢理にでも連れ出せばよかつたと後悔がこみ上げてくる。

リイナが助けを求められるはずがないのだ。どんなに望まぬ結果でも、リイナを取り巻く環境全てが、彼女が助けを求めることがえ許さなかつたのだ。

ヴォルフはリイナに出会つてからのことを思い出す。

純粹な好意をにじませて、笑顔を向けてくるリイナがかわいかった。

その笑顔を守りたかったのに。

ヴォルフは、自分の無力を、ふがいなさに、ぎりぎりと奥歯をかみしめた。

なぜ俺は彼女に決断をゆだねた。彼女が行きたくないと思つてるのは知つていたのに。

ヴォルフは後悔に身を焦がす。最悪でも、自分ならば彼女の両親を神殿の見張りから救い出し、リイナをとどめることが出来たのではないかと。

そうしたところで逃亡生活がその先にあることを考えると、思ひ切れない。

リイナの後の生活を考えると、リイナが意志を示し、時間をかけてでもグレンタールで安全を勝ち取るために争つた方が最善に思えたし、無理矢理連れ去るのは選択肢としてなり得なかつた。

何より、自ら動かぬ者を、他人が力尽くで行えば、必ずひずみが出来る。必ず悔いる日が来る。己に責任を持たぬ悔いは消えることはない。それをリイナに背負わせたくなかつた。

だが、時にはそれが必要なときもあるのではないか、そして、これこそがその時だったのではないか。

今となつては、あの時の自分の決断が正しかつたのか、間違つていたのかさえ、ヴォルフには判断が付かなくなつていた。

ヴォルフは何度目かの拳を机にたたきつけた。

「……くそ……！」

今にも泣き出しそうだつたリイナの笑顔を思い出す度に、ヴォルフはどうしようもない焦燥感にさいなまる。

もつとやれることがあつたのではないか。リイナを守れたのではないか、と。

「リイナに会えなくなると思つと、寂しいわね」  
祭りの日以来様子のおかしいヴォルフに、ラーニャが声をかけた。

「……そうだな」

ラーニャの意図が分からず、ヴォルフは曖昧にうなずく。  
「……そんなに落ち込んで、……あなた、やつぱり、リイナが好き  
だった？」

ラーニャの言葉に、ヴォルフは「は？」と、気の抜けた返事を返  
してしまつ。

「……何のことだ？」

とぼけているわけでもなく、本当に意味が分からない様子のヴォ  
ルフに、ラーニャは「違つたの？」と苦笑いする。

「てつくり、とうとうリイナに惚れちゃつたあなたが、神殿にリイ  
ナを奪われてしまつてゐるのかと思つたんだけど」

「ばか言うな。確かにリイナはかわいいが、どう見ても子供だらう  
そういう相手にはならないと言外に含ませるヴォルフに、ラーニ  
ャは、「どうかしらね」と笑う。

「でも、こんな幸運、滅多にないんだから、祝福してあげないとね  
ラーニャは、ヴォルフを励ますように言った。

その瞬間、ヴォルフの表情がこわばつた。

ラーニャはその変化に驚く。てつくり「そんなんじゃないと言つ  
ているだろつ」と笑いながら返してくると思つたのに、まさか、こ  
んなふうに感情を吐露する表情を見せるとは思わなかつたのだ。

ヴォルフは一見表情豊かだが、その実、あまり感情を人に見せる  
ことはない。ラーニャには気安さと長年築いてきた身内に向けるよ  
うな信頼から、そういうところを見せることがあつたが、それにし  
ても、こんなふうに、あからさまに顔をじわばらせるなど、滅多に  
見ることはなかつた。

「……祝福など、出来るか。……！」

低い声が、静かに吐き出された。

「何が時渡りの神殿だ」

つぶやいて、ヴォルフは深く息を吐いた。

「……何かあつたの？」

ラーニャは静かに問いかける。

「いや、何もない」

低い声で返す返事は、語るに落ちたと言うべきか。

「何を知っているの？」

「気分が悪くなるだけの話だ。聞くだけ損だぞ」

皮肉げに笑つたヴォルフに、「話して」と、ラーニャは返す。もし、絶対的に話せない内容ならば、いくら氣を許していくても、ヴォルフがこんな弱みを見せたりすることはない。気付く隙も見せないほどに隠しきつているだろう。

ならば、聞いても良い事なのだと、ラーニャは判断する。むしろ、聞いて欲しいのかもしれない。

しつこいほどに尋ねるラーニャに、ヴォルフは躊躇いながらも口を開いた。

「おまえの胸の内一つに、留められるか」

ラーニャは静かに肯ぐ。

ヴォルフは詳しい事情は省き、リイナが望んでいないのに、力があつたが為に両親を盾に取られ神殿に上げられたことを簡潔に話した。

「……じゃあ、リイナは、望んでなかつたの？」

全ての話を聞き終えて、ラーニャは確認するように、ヴォルフを見る。

あの笑顔の裏で、そんなに苦しんでいたことに驚いた。そして、唯一人、気付いていたヴォルフにも、かわいいと思っていたのに、気にかけていたのに、ラーニャには気付けなかつた。

「そうだ。知つていたのに、俺は止められなかつた。俺は……俺に

は、助けることが出来た。たとえリイナが俺に頼ることが出来なくとも、無理矢理にでもさらつてやればよかつた……！」

ヴォルフの言葉を聞きながら、ラーニャの胸が、ツキリと痛む。これほどまでにヴォルフに思われるリイナを羨む気持ちと、そして、愛しい男が苦しむ姿へのいたわりと。

苦しげなヴォルフの姿を見るのは苦しかった。

もしかしたら、ただ、ヴォルフの苦しみの吐露に付き合つていればよかつたのかもしない。けれど、苦しむ姿を見たくない気持ちからか、それともささやかな嫉妬が生み出した気持ちか。

ラーニャはなだめるように言った。

「……ヴォルフ。それでも、それはリイナが選んだことだわ。リイナが選んだ以上、あなたに出来ることは、なかつたのではない？」

「ああ、そうだ、俺は部外者だからな。リイナは諦めた。だから、俺に出来ることはなかつた。分かつている」

吐き捨てるようにつぶやいたヴォルフに、ラーニャが切なげに微笑んだ。

「……あの子が、そんな辛い思いをしていたなんて……」

ラーニャはヴォルフの頬に触れると、まるで弟を慰めるかのように、そつと頬にキスをする。

「辛いわね。何か、してあげられる物なら、してあげたかったわね。けれど、私は、あなたがそんなふうに後悔をしている姿を見るのも辛いのよ。もし、リイナがここにいたら、きっと、同じように感じると思うわ？　ヴォルフ、自分を責めないで。責めることは、解決にはならない。そうでしょう？　出来ることに、目を向けましょう？」

「……何が出来ると言つんだ？」

投げやりな様子で嘲るように言つたヴォルフに、ラーニャは溜息をつく。

「とりあえず、ここであなたが腐つても、何の役にも立たないわね」

言い切ったラーニャに、ヴォルフはわずかにひるみ、そして困ったように深い息を吐くと、すぐ諦めたように表情を和らげた。

「……そうだな」

「そうよ」

ラーニャは笑いかける。

「腐つてないで、出来ることを、探しましょっ」

口から出任せに耳障りが良い事を適当に言つている自覚はあったが、そうとしか、言葉が見つからなかつた。神殿の中に囮われた姫巫女を取り戻す手段など、ラーニャには想像も付かない。出来ることなどあるのかさえ分からぬのだから。

けれど、そんな上づ面の言葉に、ヴォルフが笑つて頷く。それが表向きだけの物だとは分かつてゐるが、少しだけほつとした。

ラーニャは、たつたの一ヶ月で、あの少女がこれほどまでにヴォルフの心を占めていると言つことが、切なくもあつた。けれど、彼女は祈る。いつか、ヴォルフとリイナの未来が重なるように、と。ヴォルフとリイナの関係が、今のところそんな色めいた物ではないのは分かつてゐる。それでも、なぜだかは分からない。ただ、二人が並んで笑つていて欲しいと、思つてしまつ。ラーニャにはそれがとても自然なことに思えるのだ。

そして、そのためには、ヴォルフがこんな状態では駄目だ。

愛しい幼なじみの背中をぽんと叩いて笑いかけると、彼は、いつものようにどこかふてぶてしい、けれど魅力的に笑顔を返してくる。

「……ああ、俺の出来ることを、考えるわ」

ヴォルフの去り際に、小さく「ありがとう」と、風にながれてラーニャの耳に届く。

ラーニャは微笑んで手を振つた。

ヴォルフはグレンタールを出る前にコンラートの元へ足を運んだ。

「今は」諦めるしかないと言つたコンラートのことだ、おそらく、

この後のリイナを助けるための計画は立てているだろうと思われた。しかし、コンラートは尋ねてきた沃尔夫に、これ以上関わること釘を刺し、決してそれ以上話をしようとはしなかった。神殿についてのことも詳しく聞きたいと思っていただけに、沃尔夫は出鼻をくじかれる形でグレンタールを出ることとなつた。

コンラートが一貫して沃尔夫を遠ざけようとしているのは分かつていたつもりだったが、出来ればコンラートと共に計画を立てることが出来れば最善だと思つていただけに、コンラートの協力も得られない、というのは、沃尔夫にとっては痛手であった。

時渡りの神殿のことといえども、神殿が違えば、細かい情報に差異がある。エドヴァルドについてはグレンタール神殿のより詳しい情報を得にくくなるのだ。

しかし、手立てのないままにグレンタールに留まるわけにもいかず、沃尔夫はエドヴァルドへと戻つた。

かといって、コンラートが何とかするだらうなどと諦めるつもりはない。

ひとまず騎士団の仕事へと戻つた沃尔夫だが、そこで、神殿について詳しく調べることにした。神殿自体の情報を得るのには、グレンタールよりエドヴァルドの方が適していた。また騎士団のつてで身内や知人に巫女や神官、守人がいる者から情報を得ることも出来た。

ただ、得た情報は、今の沃尔夫にはリイナを助け出せるような状況ではなさそぐことだけが明確になつただけであった。

巫女として神殿にあがつた者は、力が安定するまで知人はおろか、身内とさえも断絶されて、神殿での修行が科せられるのだという。

沃尔夫は仮にもグレンタールの次期領主である。今はあまり仕事に携わってはいながら、立場を使えば、姫巫女に面会することも可能ではないかと考えていたのだが、詳しく聞くところによると、世俗との断絶の他に、汚れを落とす意味もあるとかで、面会を認め

られないといつ。

それでなくても、リイナの出生のことがある。どうやら神殿側もそれは表向きの情報として出すつもりがないようであるが、上の人間はおそらく知っていると思つた方が無難である。とすれば、姫巫女にあがることを拒絶した娘を、おいそれと外部の人間に面会させることはまずあるまい。

だとすれば、リイナが力を扱えるようになり、俗世との関わりを許されるようになつてからとなるが、ただの巫女ではない、姫巫女である。

そもそも、巫女が表に出られるようになるのがいつ頃になるかと言えば、これが、明確には決められていないのだというのだから、それをあてにするわけにもいかない。

半年で認められた者もいれば、数年かかった者もいる。

ヴォルフはリイナから舞の練習の時に、修行では全く時の流れが分からなかつたという話を聞いていた。コンラートに聞いた話でもリイナの力は不安定で、安定して出せるようになるかどうかさえ危ういという状態であることも分かつている。

半年や一年などと言つ期間ですむとは思えなかつた。

待つのはかまわない、だが、助け出すのにそれだけ時間をかけてはリイナの負担が大きすぎる。

最終手段としては、忍び込んでさらうことも考えたが、使えるだけの裏の手を使ってみても、さすがにグレンタール神殿の見取り図は一介の騎士の手に入る筈もなく、今ひとつ現実的とは言えない。領主である父にも神殿内部について聞いてみたが、大まかなところしか分からなかつた。また、体の大きなヴォルフが隠密行動をとるには、これまた不向きでもある。

ヴォルフなりに情報を集めるも、なかなかリイナを助ける為の手段が見つからずについた。

無茶をすれば、リイナもヴォルフも、グレンタールにいられなくなりかねない。グレンタールを出るぐらいですむのなら良いが、下

手をすると、国を出ることにもなる。完全な逃亡生活である。リイナの幸せを願うのなら、それはあくまでも最終手段だ。出来るだけ、元の生活に戻せる形での奪還でなくてはならないのだ。すると、どうしてもヴォルフの計画は行き詰まってしまう。

グレンジャー領はそれなりに力があるといつても、所詮地方の田舎貴族であった。姫巫女を力ずくで、正当性を言い張つて神殿から取り戻すだけの力はない。

今しばらくは、様子を見ながら、情報を集め、作戦をじっくりと練る必要があった。

\* \* \*

そこは、広い室内であった。簡素ではあるが調度品の一つ一つは、どれをとっても最高級の物ばかりである。その部屋の主は、紫のベルを揺らめかせ、ゆっくりと歩き、窓辺に佇む。

「時が、動き始めたか……」

つぶやいた女は、苦しげに一つ大きく息を吐き出し、そして窓の外に目を向ける。

この時が来なければいいと願っていた。

けれど、それは、女が見た未来そのままに訪れようとしている。

女は目を閉じる。

彼女の持つ守石が淡く輝き、そして女は目を開けた。

わずかに浮かぶ憂いは、すぐさま消え、代わりに感情の読み取れない冷ややかな表情が彼女を覆つ。

望む、望まさると、これが女の選んだ道であった。ならば。それを全うするまで。



一方、姫巫女として迎え入れられたリイナは、いつまでも悔やんでいなかつた。

望んだことではなかつたが、もう来た以上は、あがいたといひでどうしようもない。理由はどうあれ、ここに来ることを選んだのはリイナ自身であつた。その上で自分に出来ることなど考えて、とりあえず、真剣に姫巫女修行をすることにしたのだ。

望んだことではなかつたが故に、不快感や悲しみはむちりんあつたが、巫女という存在に対しては、コルネアに生きる者として、尊敬とあこがれの念を少なからず抱いている。自分がなるとは思わなかつたし、したいと思つたこともないが、すばらしい存在だという思いは変わらない。

一生を「じで過ぐ」とことになるのかもと思つと、どうしようもない絶望のような感覚に陥ることもあるし、そこまでなくとも焦燥感のようなやりきれなさは常につきまとつてゐる。それでも、その一生を苦悩と後悔だけに囚われて生きていいくよりも、出来ることを探す方がよかつた。少しでも実りがあれば、その先に何があるかも知れない。この生き方を自分に許せる日が来るかも知れない。

苦しい部分を見つめて生きるより、良ことこのりを探して生きる方が良い。

リイナは自身にそつと聞かせていた。

しかも、姫巫女である。

尊敬とあこがれの対象。

リイナにとつては分不相応で恐ろしく、望んでないという点では絶対的に嫌だ、逃げたいと思うのだが、もし、自分に力があるのでしたら、ここまで拒絶するほどではないのだ。リイナはそつと思い込もうとしていた。

そうすると、一番の問題は、自分にその姫巫女を名乗るような力などないとしか思えないことだった。この分不相応さは、持ち上げられ、期待された分だけ、恐ろしいほどの恐怖を感じる。

とはいっても、その力があるのだとしたら、少なからず誇らしいことである。誇らしいことであるはずなのだ。

複雑な胸中を抱え、けれどリイナは、自分の苦痛におぼれることを良しとはしなかった。どうせここにいるしかないのなら、自分が出来ることをするのだと、気持ちを切り替えようとしていた。切り替えるしかなかった。自分の力では、どうにもならぬ所まで来てしまったのだから。

そして、リイナの精神力でもって、それはリイナ自身の心をだますことで、ほぼ成功していた。

それ故、リイナは自分に巫女の力があるとは思えなかつたが、あると言われるのだから、望んだことではないからと意固地にならず、とりあえずがんばつて、その力が本当にあるのか出来る限り、全力で取り組んでいた。

巫女の力が感じられるようになれば、ヴォルフの手を振りきつて神殿に上がってきたことは無駄ではなくなるのだから。

何より、姫巫女として認められれば、コンラートとラウラを今回のようなことに巻き込んでも、守れるのではないかとリイナは考えていた。姫巫女と認められたのなら、次に何かあつたとき、無力に従うだけにならずにするのではないかと。

そして、未来を読み、過去を読み解けたなら、グレンタールにつても益となる。

姫巫女となつて、グレンタールを……ヴォルフが背負うグレンタルの未来を支えていけたのなら、それは、決して、悪い道ではないかも知れないと、リイナは思うことにした。

いつか、ヴォルフ様を支える力になれるかもしれない。

どんなに辛くとも、姫巫女になることは、きっと、私にとつて悪いことばかりじゃない。

そう思つと、耐えられる気がした。

嫌で退屈でたまらない修行も、舞いの修行で来た時以上にまじめに取り組んだ。以前と変わることなく、全く修行の意味さえつかめないリイナだつたが、それも何とかこらえてがんばつていた。

「大丈夫ですよ、守石があんなにすごい光を放つくらい力があるんですから！」

そう言つて励ましてくれたのは、舞の修行で仲が良くなつた三人の巫女達。

「あの守石の光り方は本当にすごかつたんです。姫巫女様にはすごい力があるんですから！ 私たちも出来る限りお力になります！」立場上、距離を置かれはしている物の、そう言つて側でリイナを励ましてくれた。

寂しいだけではなかつたことも、リイナの心を落ち着かせるに至つた。

ただ、リイナの立場は、神殿において決して良い物ではなかつた。何の力も具現できない者が、姫巫女として神殿に上がつてきたのだ。巫女達は、自分の力に、そして存在に、誇りと自信を持つている。なのに、ほんの少しの「時」も感じられない、つい数日前まで神殿とは関わり合いもなかつた娘が、ただの巫女としてではなく、巫女の頂点に君臨する姫巫女としてやつてきたのである。そして、行う修行はあまりにも初歩的で、そして何の成果も上げられないのを目にしているのだ。稚拙というのも腹立たしい、巫女としては無能な人間を姫巫女として敬わなければならないのだ。

その視線は厳しかつた。

その上、仲良くなつていた三人は、何とか親しげに話をしている物の、姫巫女としているリイナへの言葉遣いは以前のように砕けた物ではなくなつていた。

それでも、孤独感や寂しさ、辛さを抱えつつ、リイナは毎日、必

死で修行に取り組んだ。苦痛と焦燥感と闘いながらの毎日だった。

けれど、その努力が実を結ぶことのないまま、毎日は過ぎていった。

そのうち、最初は励ましてくれていた三人の巫女たちも、日を追うごとに距離を置かれているのを、リイナは感じていた。

じわりじわりと、後退していくように、少しずつおかれてもぐく距離。

ささやかだけれど、リイナの大きな心の支えだった彼女たちの変化に、リイナは焦った。

それ故、尚のこと、リイナは必死になつて修行をがんばった。ちゃんと力を出せるようになれば、また三人と仲良く話せるようになると信じて。

おもしろくもなれば、全く力を感じないが為に、やりがいすらない修行だつた。時折、弱く守石が反応することはあつたが、リイナにはなにも感じられず、どういう時に、どこに力が出ていたのかさえ分からぬような状態だつた。

守石が反応する時は、時の流れの何かを感じるのだと叫うが、リイナ自身は、ただぼうつと、何気なく過去を思い出したりちょっとと懐かしい気持ちや思いに浸つているような状態でしかなく、守石が反応するときと、反応しない普段通りの修行とどこが違うのかさえ分からなかつた。

そしてリイナのがんばりは、間もなく行き詰まつた。これまでも行き詰まつていたが、それでも言われたとおり、必死にがんばる事が出来ていた。元々よく分からぬまま姫巫女に祭り上げられた状態である。過分な身分と、過分な待遇、これで力が出せなければ神殿に閉じ込められた意味さえなくなつてしまつからだ。

せめて、この神殿に閉じ込められた意義を見いだしたいと、リイナは必死だつた。

だから、行き詰まつた理由は、己の力が出せないことが直接の原因ではなかつた。

原因は、リイナにとつては、思にもよらないといひで足場が崩れることになったからだった。

その日も、リイナは何の成果も出せないまま、瞑想室を出て、自室に帰るうとしていた。

そして、思いがけない人たちからの、思いがけない中傷を耳にしてしまったのだ。

「あんな状態で、姫巫女を名乗られるだなんて、『冗談じやないわ』聞こえてきた声は、聞き慣れたものだつた。

ひそひそと囁かれる中傷自体は、今までも嫌でも耳に入つてきていたし、その内容も代わり映えすることのない物であつたが、よく知らない、関わることのほとんどない巫女達からの物は、何とか我慢してきていた。我慢できていたのは神官や、守人達はリイナに対してとてもよくしてくれていたこともあつた。気にかけてもらえることは、がんばる為の力にもなるのだから。何より、身近な巫女三人が、リイナを励まし、理解してくれていた。だからがんばれた。がんばらうと思えた。

彼女たちは理解してくれていたと、思つていた。

リイナは、声を聞きながら、友達だと思つていた三人の姿を脳裏に描く。

こちらが勝手に思つていただけだつたのだと、リイナは得も言えぬ衝撃を受けていた。

姿は見えないが、この声は、間違いなくビアンカの声だった。

「あれじゃ、見習いの巫女の方が、よっぽどまし。たつた一度守石が光つたくらいで姫巫女だなんて」

これはローリア。

「そうよね、確かにあの光り方はすごかつたけど、一足飛びに姫巫女だなんて、変よね」

少し遠慮がちに言葉を続けたのはベレディーネ。

ベレディーネまで。

控えめで、優しく、いつも一番リイナを励ましてくれるよつこ、そつと寄り添つてくれていた彼女までが。

苦しさに胸が詰まつた。ちょっと距離を置かれても、それでも彼女たちを友達だと思っていた。笑つて慰めてくれて、時には怒つて引っ張り上げてくれて、そんなふうに力づけてくれている心を疑つたこともなかつた。

けれど、優しい思いやりに見えたその裏では、こんなふうに思われていたんだ。

リイナはショックで締め付けられるように痛む胸を押さえながら、大きく、ゆっくりと息を吐く。

どんなにがんばつても、これが、私の神殿での評価なのだ。秘められた力があつたとしても、力が出せず決して認められることのない姫巫女、それが私。

リイナは改めて自分の立場を思い知る。

どんなにがんばつたって、力が出せなければ、認められることはない。巫女であることに誇りを持つている彼女たちなら、尚更に。リイナは、すがりついていた支えを失い、がんばる意味を、見失つてしまつた。

これまで、ずっと、がんばろうと思つていた。姫巫女になるしかないのなら、自分に出来る精一杯でがんばろうと。なのに、力は全く扱えないままに姫巫女として進む道は、リイナにとつては茨の道。これからも力が出せなければ、この悪意を背負つて生きなければならぬのだ。

ヴォルフ様。

辛いとき、名を呼ぶだけで、姿を思い浮かべるだけで、お守りのようにリイナを守つてくれるその人の名を心の中でそつと呼んだ。『来い』と手をさしのべてくれた人。拒むしかなかつた苦しみから目をそらし、あの瞬間の悦びだけを思い出しながら耐えてきた。

全てを守つてやると言つてくれた言葉を信じて、甘えてしまえば

良かつたのだろうかと、心が弱さにむしばまれていくのを感じた。

今は、ただ、逃げたくてたまなくなっていた。

ヴォルフの背負う物さえ考えず、自分の辛さから逃げるためだけに、彼にすがりついてしまいたくなっていた。

あのときは、父や母を守らなければならぬ一心で耐えた。ヴォルフを巻き込んではいけないと、理性が残っていた。

今、もし、その手をさしのべられたのなら、逃げ出したい誘惑に負けてしまつていただろう。

でも、幸か不幸か、ヴォルフはもういない。おそらく、とうにエドヴァルドに戻っているはずだ。仮に戻つていなくても、会えることはない。

ヴォルフ様……。

思い浮かべるその人の姿は、暗い感情に囚われるリイナの心を、ほんの少しだけ、忘れさせてくれた。

もし、リイナが姫巫女の娘であることが分かつていたのなら、神殿内の風当たりはまた少し状況が変わっていたかもしれない。少なくとも表向きは、リイナを悪しきざまに言つ巫女はもつと少なくなつていただろう。

しかしそれは、過去の醜聞を知られたくない神殿側も、そしてリイナ自身も望むところではなかつた。

姫巫女の娘という名の下でもたらされる恩恵を受けてしまえば、リイナの逃げ道は更に狭まつてしまう。リイナは姫巫女となる覚悟を決めてはいるものの、決して神殿から逃れることを諦めていたわけでもなかつた。機会があれば、いつでもその地位を降りるつもりであり、村に戻れる物ならば戻りたいと思つていた。そしてその想いは、更に強くなつていて。

それはコンラートとラウラも分かっており、リイナが修行に励んでいる間も、リイナが神殿から逃れる術を何か探してくれているはずであつた。

心が折れかけた今、リイナはそれが見つかることを願うしかなくなつていた。

しかし現状ではコンラートとラウラにさえ、会うことが許されない状況である。守人であるコンラートとラウラになら、本来なら、会うこともあるはずだつた。けれど、巫女になつたばかりの者は世俗との断絶が課せられる。一人前になるまで親族、近親者、友人などに会うことは許されないので、リイナも例外ではなかつた。

おそらく上層部からの意向が強く働いていたのだろう、全くもつて融通が利かなかつた。

とは言つても、今回のリイナの姫巫女騒動に関して、リイナに力が秘められている以上の理由は語られることなく、秘されたままなのである。リイナの出自について知る者は、グレンタール神殿の中

でも上層部の「Jぐ一部。突然の姫巫女台頭に何か裏があると噂されることはあっても、それが明確に人の口に上ることはなかつた。

それ故に、自分の意志で神殿に上がつたことになつてゐるリイナと、守人の両親とであるからして、監視の目がそれほど厳しいわけでもなく、会うための手段は、無理をするのならばいくつも残されていた。

しかし、リイナは両親と会つことはしなかつた。ビリビリーンカルトらの諜報がいるか分からぬからだ。

神殿に上がる際、いずれ何か行動を起こすにしても、しばらくは素直に規則のままに会つことを控えて置いた方が良いといつのがコンラートの考えだつた。

リイナはそれに同意した。

今は耐えながら、両親のことと思つ。

大丈夫、きっと、私の事を見捨てたりしない。お父さんとお母さんは、私の事を考えてくれてる。

神殿に上がるとき、リイナはようやく会えた両親に抱えた不安をぶつけるように尋ねた。

「お父さんと、お母さんは、元々は私が姫巫女様の子供だから、育ててくれたのよね。私が姫巫女として上がる事を、姫巫女様はどう思つてゐるのかな。お父さん、お母さん、もし、姫巫女様が私を神殿に上げなさいって言つたら、どうする?」

私を選んで。

そんな無意識のリイナの甘えに、ラウラが答えた。

「例え姫巫女様が相手でも、私はリイナの味方よ。リイナが、世界で一番の宝物だもの」

迷わずにそう言つてリイナを抱きしめた。

「……でも、お母さんは、姫巫女様に頼まれて、私を育てたんでしょ?」

「そうよ。私はね、姫巫女様と約束したの。姫巫女様の分も、私が

あなたのお母さんになるつて。世界中の誰を敵に回しても、それが例え姫巫女様だとしても、私がリイナを守るつて。あ、でも、リイナの味方になるのは、約束したからじゃないのよ。私が、リイナを大好きだから。私が、リイナの幸せを誰よりも願つてているからよ」  
あなたが世界で一番大切。そう言つてラウラはリイナを抱きしめた。

「だつて、私は、リイナのお母さんだもの」

躊躇う事のないその言葉に、リイナは安堵する。

「わたし、お父さんと、お母さんの子供でいい？」

「他に、誰がいるの」

ラウラがそういうつて笑つた。その目には涙がたまつっていた。黙つて側にいたコンラーもラウラの言葉に重ねるように頷いた。

「ごめんね、守つてあげられなくて、『ごめんね』

ラウラの声が震えて、涙がこぼれた。

リイナは首を横に振る。

死んでしまうよつずつといい。命をかけられるよつ、ずつといい。だから謝らないで。

そう、リイナはラウラを抱きしめて言葉を絞り出した。

そしてコンラーは、別れ際に「必ず助ける」とリイナに約束をした。

言葉を交わせたのは、それが最後。

あれから数ヶ月が過ぎてゐる。けれどリイナはそれを信じていた。あの日の会話は、リイナの両親に対する不安をぬぐい去つた。信じいい事を肌で感じたのだから。故に会えないことを不満には思つてはいなかつた。

けれど、寂しかつた。

そして、恐かつた。

コンラーとラウラは実の両親ではないと知つてしまつた以上、自分を助けるために無理をさせてゐるのではないかという不安があ

つた。巻き込んで良いのだらうかと。

それでも、リイナにとつて、唯一すがつても、頼つても許される存在でもあつた。もう、そこそこ、すがるよりほかなかつた。けれど、余つことも出来ない最中、寂しさと悲しみと苦しみに押しつぶされそうになる。

これからどうなるのかという不安、助けると言つたその時がいつ来るのかという不安。いつまで、この針の筵で過ごさなければいけないのかといふ、苦しみと、未来への漠然とした恐怖。

そんな中につつて、身近にいた、三人の巫女達の存在が支えだつたのに。彼女たちは、とうにリイナを見限つていたのだ。力を出せない日々の間に、じわりじわりと置かれる距離と同じように、心も離れていたのだ。

ああ、駄目だ、とリイナは頭を振る。イヤな事ばかり考えて囚われていると、心がすさんで行く。

もつと前を見て。

リイナは自分を叱咤した。

今できる事を考えよ。今できる事をしよう。

そうして、リイナはいつものよつと、ボルフの名前を心の中でつぶやく。

心中に灯る、宝物のような記憶。それを振り切つた痛みや苦しみを心の奥底に押し隠して、幸せな思いだけを取り出して自分を支える。

いつまで続くか分からぬ絶望の先を見て、心が折れそうになりながら、それでも、どこかに何かの道があると信じて。

それからも、針の筵と、味気ないただ修行ばかりの毎日は変わらなく続いていた。もはや、三人の姫巫女達との関係も断絶していた。リイナが姫巫女として迎えられ、早半年が過ぎようとしていた。発狂しそうにも思える日常が、ゆっくり、ゆっくりと過ぎて、それは永遠にも続くのではないかと思っていたある日、思いがけない

知らせがリイナに伝えられた。

それは、全身から血の気が引くような知らせだった。

「私が、皇太子殿下の……？」

目の前の神官長を、まじまじと見つめる。その表情に偽りを探そうとするが、至極眞面目な顔でリイナを見つめている。

「後宮とは、どういう事ですか……？」

震える声を抑えながら、リイナは慎重に言われた意味を探る。そんなわけがない、と、聞き間違いであると確かめたかったのかもしれない。

「将来的には、正妃として迎えられるようになりますが、まずは、皇太子殿下の妾妃として後宮に上がつていただくことになります」  
皇太子の後宮に入るよう求められていると言つ事實に、リイナは言葉を失つた。

コルネア王家で妻を数人召し抱えるのは珍しいことではない。正式な后は一人となるが、公的に認められた女性は后に準ずる妾妃として、城に一室を与えられる。

しかし皇太子というと、まだリイナよりも若い、十一才の少年である。后はもとより、妾妃などを迎えてはいない。

最初の妾妃として、将来的には后となるよう決定づけられて、リイナに城へ上がれと言うのだ。

そんな事が受け入れられるはずがなかつた。

考えただけで背筋に寒気が走つた。

リイナは、何とか気を取り直して神官長に言葉を返す。

「待つて下さい。なぜ、私が、王家から求められるんですか」  
けれど、その返事は、リイナを絶望に落とすだけであった。

「あなたが、姫巫女だからです」

姫巫女、ただその名が付く、それだけで。

頭がくらくらした。

王家と姫巫女との婚姻は、そう珍しい物ではなかつた。神殿と王

家のとのつながりを強固な物として引き留めておくためだ。

巫女というのはそれだけで価値がある。王家の者が巫女として神殿で巫女の修行することもあるほどだ。巫女の力を操れる姫は、嫁ぐのにも有益に働くのだ。それほどに神殿と王家のつながりは深い。ましてや、巫女の力が弱まる傾向にある今、神殿が出来うる限り、王家とのつながりを強固な物にしておこうとするのも必然とも言えた。

しかし、リイナは力も操れない、名ばかりの姫巫女である。秘めた力があるという事だけは分かっているが、現国王の寵姫となつているエドヴァルドの姫巫女との血縁は明らかにはされおらず、リイナなど完全な飾りのような物だ。

ましてや神殿に上がつて間もなく、姫巫女としての立ち振る舞いさえ、たどたどしいリイナは、王家の人間と顔を合わせられるほど教養など皆無に等しいというのに。

それを神殿の誰もが分かつていてははずなのに、なぜそんな要求がまかり通るのだ。

リイナは震えながら神官長を見た。

「……名ばかりの姫巫女ではないですか……！」

神官長は全ての事情を知っている。リイナが望んでここへ来たわけでもないことも、そして、出生の秘密も。

神官長がリイナに対して、同情的に見てくれていることを知っている。

そして、この決定を彼が好んで下したわけでもないことも分かる。これが、神殿の総意であり、いくら彼が同情しようとも、一神殿が反発できるような物でもないこともおぼろながらに、想像が付く。

それでも、行き場のない思いは絶望となつてリイナの叫びとなる。「そんなの、出来るわけがないです……！！」

「……それでも、それが、姫巫女となつたあなたに求められる、義務です。時渡りの神殿の頂点に立つ巫女として、神殿の為に死ぐすことが、「

神官長の声が、重く響く。

「そんなの……！」

それ以上声にならず、リイナの声を殺した嗚咽が、静かに響いた。

26 神殿2（後書き）

9月から、1幕終了まで、根性入れて、更新します。  
どうぞ、よろしくお願いします。

自室に戻ったリイナは、ただ、呆然として、壁に目を向けるともなく、室内を瞳に映す。

何の為に、姫巫女になつたんだろう。

それは、決して自分の望んだことではなかつた。けれど、希望があつた。力が使えるようになれば、コルネアを、ひいてはヴォルフを助けることも出来るかも知れないと。両親を守る力を持てるかも知れないと。

姫妃になれば、もしかすると「権力」を手に入れることも出来るかもしれない。けれど、それでなくとも傀儡の姫巫女。むしろリイナの枷がただ増えて、悪い事を引き込んでしまうように思えた。絶望に心が囚われ、いつものように、前向きに事態をとらえることが出来ない。全てが悪い方に引き込まれていくような感覚があり、それに引きずられるように、よくないことばかりが思い浮かぶ。ふふっと、リイナから嘲るように笑いが漏れた。

「姫巫女と、お姫様……」

クスクスとリイナは笑う。

女の子のあこがれるその一つに、自分はなろうとしている。おかしかつた。

夢に見るほどにあこがれていたのに、あこがれの姫巫女も、あこがれのお姫様も、夢に見たものと違い、現実はあまりにも残酷だった。全てが、他人の欲望の道具でしかなく、リイナはその道具として、好き勝手に扱われているだけなのだ。

けれど、どんなにそれをイヤだと嘆こうとも、姫妃として城に上がれと神殿に求められた事実は変わらない。

許容量を今にも超えそうな苦しみに、リイナの心は、重く、重く沈んで行く。

なれるはずがない。

姫巫女という立場でさえ、もはや自分では支えきれないほどに大きな重荷となつていいというのに。この上、妾妃などと。

思い浮かぶのは、漠然とした恐怖。明確ではないが為に、よりそれは大きな質感を持つてリイナを押しつぶす。

得体の知れない恐怖を感じ、震えが襲う。歯を食いしばりつゝもかみ合うことなく、カチカチと、奥歯がなつた。

リイナは自分を守るように、震える自分の体を抱きしめた。

コンコン、と、扉を叩く音がした。

リイナの部屋を訪れるのは守人ぐらいだ。

先ほど、重大な命令を聞かされたばかりのリイナは、まだ何があるのかと、びくりと体を震わせた。

リイナの見つめる先で、もう一度、コンコンと、扉の向こう側から叩く音がする。

「……はい」

震える声で返事をすると、「失礼します」と、低く穏やかな声がして、男が一人、顔をのぞかせた。

その顔を見て、リイナは息が止まるような衝撃を覚える。噛み締める奥歯が、ぎりぎりと音を立てた。

「お久しぶりですね」

そうリイナに向けて優しげに微笑んだのは、神殿に上がつて以来会う事のなかつたエドヴァルド神殿の神官、エンカルトだった。

「……また、あなたですか」

うめくよつに、リイナが低い声を出す。

この、気分が落ち込んでいるときに見たい顔ではなかつた。

彼女らしくもない嫌味な物言いに、エンカルトは動じた様子もなく頷く。

「ええ、また、私ですよ。ひとまず、ご挨拶に参りました。」

クスクスと穏やかな笑顔を浮かべるその神官が、額面通り穏やかでも優しくもないことをリイナは知っている。

しかも、このタイミングということは。

絶望に押しやられそうになつてていたリイナに、一度は萎えた反抗心や怒りが沸々とわき上がりてくれる。

「今回のこと、あなたの企んだことですか？」

「今回のこととは、リイナ様の『結婚のことですか？』

おめでとうございますと、にこやかに言われ、リイナは怒りにまかせて睨み付ける。

「……やっぱり、あなたが……！」

「ええ、私がご提案して差し上げました。にしても、企んだとは、心外ですね。現在、グレンタール神殿に居場所のない姫巫女様に、新たな居場所を提示して差し上げたというのに」

「居場所がない……？　あなたが無理矢理ここに連れてきたからじゃないですか。こんな所に居場所なんていません。それが王宮だとしても、私が……リイナ・アレントが求められない場所なんかいりません。だいたい、後宮に入ったところで、私の存在価値なんか認められるはずがないです。自分の居場所も作れないほど役に立たない私なんか、神殿から放り捨てれば良いんです」

怒りによる震えを押さえながら、リイナはエンカルトの目を見据えて言うが、エンカルトは、微笑んだまま、軽く肩をすくめた。

「何をおっしゃいますか。せっかく高貴なお血筋であられるのに。そんなもつたないことをすると思っておいでなのですか？」

「血筋が良くて、力のない巫女なんて……」

「力はござります。王家の者は、巫女の血を引かれる」とも多く、あなた様なら、力のある御子をもうけることも出来まじょう。エンカルトの言いざまに、堪えきれない怒りがこぼれる。

「……人を道具のように……」

「ええ、道具になつていただきます。今、あなたの母君は現国王陛下の寵姫として神殿を支える一つの勢力になつております。あなたは、母君の元で、その地盤を固めていただきます」

リイナは表情をゆがめるようにして笑つた。

姫巫女が母親だなんて、認めるつもりはなかつた。ラウラからは、「本当のお母様」として姫巫女の話をされたし、二人がエドヴァルドの姫巫女を心酔している事もよく分かつた。すばらしい人だと、そしてリイナを手放したくて手放したわけではないと聞かされた。それでも、育ててくれたのはラウラと「コンラートだ。

私のお母さんは、お母さんしかいない。

「母君？ 私の母はここに、グレンタル神殿の守人としています。しかし、そんなリイナの怒りは、エンカルトにあつけなく躲される。

「あなたがどう思おうと、事実は何も代わりはしませんよ」

「あなたの思い通りになんか……！」

「……やつていただきます。いいですね。巫女として力も出せないあなたには、過分なほどの良い話ではないですか。愛妾ともなれば今よりも好きに振る舞え、通常では考えられないほどの恵まれた生活が約束されるのですから。しかも、あなたには正妃の座が約束されている」

話が通じない。リイナの意志など、この男には欠片ほども関係ないのだと思い知らされる。

だつたら、この人相手に、ともに話をする意味なんてない。

リイナは心の中で吐き捨てるように思った。

「……断ることは、出来ないのですね」

リイナは手のひらを握りしめる。強く握りすぎて、その手が膝の上で震えた。

「……あなたは、私の事を嫌つておいででしょうが、私は、あなたのような賢い方が好きですよ」

都合の良い、の、間違いでしょ。

リイナはその言葉を飲み込んだ。

問いかけたいことも、ぶつけたい言葉も、山のよつにあつた。けれど、それは言葉として出てこなかつた。おそらく、どんな問い合わせも、どんな思いも、きっとこの男には届かない。怒りをぶつける

だけ労力の無駄に思えた。今以上の不快感を覚えるだけだろうと言つことも想像できた。

神殿の礎のための道具になれと、いとも簡単に言つこの男。

もしこの言葉を向けられる先が、巫女として誇りを持ち、神殿の未来を憂い、それを望む者であれば、納得も出来ただろう。しかし、リイナはそうではない。リイナにとつて神殿は敬う物であり、願うところであつて、自分が支えるべき物ではない。そのように育てられなかつた。リイナの両親は神殿の守人でありながら、リイナを神殿から遠ざけようとするあまり、その信仰心は一般人と変わらぬほどしか育たなかつた。故に、それほどまでに強い信仰心を持たないリイナは、男の理念を押しつけられているに過ぎなかつた。

「……私には、何の発言力もないのなら、私には、何も言つことはありません。聞く気もないのなら、せめてその不快な顔を見せないで下さい。私の視界に入らないで」

嫌悪感をこれ以上ないほど込めて出していくように示唆すると、エンカルトはあつさりと退室を受け入れた。

「それでは、また、詳しいお話は後ほど」

エンカルトは向けられた惡意に、むしろ楽しそうに微笑むと、部屋を出ていった。

扉が閉められ、リイナは一人部屋の中で佇んでいた。エンカルトが出ていった直後から、がくがくと体が震えていた。

それが怒りによる物なのか、恐怖による物なのか、それすらも分からない。ただ、堪えがたい負の感情が渦巻いていた。

頭の中は何も考えられないほど真っ白で、そして、リイナはどうしようもない息苦しさに、浅い呼吸を繰り返す。

もう、ダメだと思った。

これ以上、ここにいて、言いなりになるぐらいなら、死んだ方がマシだと思うほどに、リイナの心情は追い詰められていた。

何が嫌なのか、なぜ死んだ方がマシと思えるほどに苦痛なのか、はつきりした答えはない。けれど、漠然と、このまま行くと、死ぬしかなくなるほどに追い詰められそうな予感がした。

ここは、自分の生きる場所ではない。

まともな思考も働かない状態であつたが、それだけは、はつきりとした確信があった。

ここにいたらダメだ。

そう思つたとたん、怒りと恐怖に震えていたリイナの胸に、一つの思いが芽生えた。

……逃げよう……！

それが言葉となつてリイナの心に生まれた瞬間、突然、目が覚める思いがした。

全てが閉ざされ、絶望以外、何も見えなくなつていたリイナの胸に芽生えた思いは、一つの道を示す。

それは、神殿に上がる前にヴォルフによって躊躇された、一粒の種が芽吹いた瞬間。

小さくて、けれど何よりも美しく貴重な一粒が目覚めた。

あの日差し伸べられたヴォルフの手が、まるで目の前に差し出さ

れたかのように、一筋の道として開かれる。

そうだ、と思う。

「この苦痛に流されてまでここにいて自分を追い詰める必要などない。

あの日、ヴォルフは、教えてくれたのだ。耐えるだけが道ではない。

流されて受け入れるしかなかつたリイナに「逃げて良いのだ」と差し伸べられたその手は、今、最悪の状況を前にして、リイナの決意の呼び水となる。

あの日、差し伸べられたその手を拒んでからも、その面影が、それまでに向けられた優しさが、のばされたその手が、リイナの心を護り続けてくれていた。

そして、今も、また、リイナに力を与える。

決意は、大きな期待となつて、リイナの胸を大きくふくらませる。まるですがりつくかのように、その事しか考えられなくなつた。他の事はどうでも良いほどに、暗闇に差し込んだ唯一の光に、すがりつくよ。つい。

今、ここで神殿を逃げ出したところで、うまくいくかは分からない。もしかしたらさやかな反撃に終わるかもしれない。そしたら、もつと自分の立場は悪くなるかも知れない。けれど、何もせずに、流されてしまえば、きっと、一生後悔することになる。

大それた考え方だと分かつている。  
想像しただけで、ドクドクと心臓は高鳴り、手が震えた。けれど、その震えは、先ほどまでの恐怖とは違う。

高揚感を伴つた、武者震いに近かつた。恐怖からも目をそらせ、盲目にその道だけを見せてくれる、おかしいほどの興奮がリイナの胸を決意となつて突き動かす。

震える手を握りしめながら、リイナは興奮を隠しきれずに笑う。逃げ出してみせる。

リイナはこわばつた体を落ち着かせるよ。ゆっくりと息を吐

く。

自分の進みたい道は決まった。

私は、神殿から逃げ出してみせる。

心の中で何度も決意の言葉を繰り返す。

目の前の道が、突然開けて見え、頭の中がすっきりと澄み渡るような爽快さ。

リイナは震えのおさまった手を、きゅっと握り合わせる。

決意のこもった瞳は窓の外に注がれ、口元はわずかに弧を描く。

私は、私の選んだ道を行く。こんな所に、閉じ込められたりしない。

半ば恐怖に追い詰められたリイナの心は、すがるよつゝ、逃げることのみを求める。不安を振り返らない。自分を躊躇わせる他の事は、考えたくもない。そんな無意識の思いが、自らを引き留めようとする全てを意識する事を拒絶していた。

あふれるよつゝな興奮は押さえ込み、リイナはただ、逃げ出すその一点について、計画を立て始めた。

後は、どのように、神殿を逃げ出すかを考えなければいけない。リイナの後宮入りは、まだ現段階では公にされておらず、その日もリイナは普段通りにやりがいのない修行をつとめる。

変わらない日常を過ごすふりをしながら、リイナは、さづづなく辺りを注意深く観察していた。

決意してからは心が静かに風いでいた。悲しみと苦痛におぼれそうになつても耐えられた。

まるで、あの頃差し伸べられたヴォルフの手がそこにあるように、その手をつかむために一步を踏み出すかのように、どこか高揚して、怖さが薄れる。

毎日繰り返される、部屋と瞑想室との往復。食事や用を足すた

やかな合間の、リイナを取り巻く人の動きや流れ、そして隙。

リイナは、普段通りの生活をしながらそれを頭にたたき込み、神

殿を抜ける道を考える。

出来れば両親とも連絡を付けたかったが、それは、今は出来ない。エンカルトがまだグレンタールにいる。ましてや望まぬ王家との話が来ている以上、関わらない方が良いような気がした。

そうだ、一人で起こさなければ行けない。自力で成さねば。両親を巻き込んではいけない。

リイナはラウラとコンラートを脳裏に思い浮かべた。

きっと心配してくれているだろう。後宮に入るなどと知ると、無理をしてでも助け出そうとしてくれるかもしれない。でも、それだけは避けなければ。そんな事になれば、神殿に上がったときの一の舞になりかねない。

血の繋がらない私を実の娘として、疑いすら持つ余地も感じぬほど大切に育ててくれたあの人達を、私の為なら命さえも賭けようとした、大切な家族を、巻き込むわけにはいかない。

全てを自分自身でしなければならない。頼れる物は何もない。頼つてはいけない。

そうだ、と、リイナは考えつく。今、自分の身柄が神殿側にあり、コンラートとラウラとは全く関わらずにいる。そんな今だからこそ、二人に迷惑をかけずにするのではないか。

そう思うと、尚のこと今しかないように思えた。

逃げ出すことで気がかりだったのは両親の事だけだった。そこに言い訳を見つけてからは、更に熱心に逃げる算段を立てる。

後は、いつ実行に移すか、であった。

すぐにでも……と、思うのだが、エンカルトもいる、そして、間もなくエドヴァルドの姫巫女 リイナの生みの母がグレンタール神殿にやってくる事が決まっており、警備も厳しくなっていた。

まだ。今は、駄目。

リイナは急く心を押さえつける。焦つては事をし損じる。

確実に、出来るだけ確実に逃げられそうな日を待たないと。

速く逃げ出したいと急く心と、いざとなると行動に移すのが怖く

て今一步の勇気を踏み出せないのではないかという不安とを抱え、じりじりとリイナは時を待っていた。

## 29 閑話（前書き）

閑話です。本編の流れにはあまり関係有りません。が、入れたかつたので閑話として時系列順に29話として投入。

「姫巫女様」

呼ばれて振り返ったリイナは、びくりと体を震わせた。

「ベレディーネ……！」

知らず、体が後ずさる。

最近では話しかける事もなくなつていたが、目が合つてもすぐにそらして逃げるばかりだった巫女の彼女が話しかけてきたのだ。とうとう、面と向かつて悪意でもぶつけに来たのか、思わずそう身構えてしまつ。

今はもう、近寄ることさえなくなつてている彼女たちが、リイナにこれ見よがしに悪意をぶつけてきたことは、苦しみとして残つている。

あまり悪意に敏感でなかつたリイナが、そんな風に身構える姿を見て、ベレディーネは、痛ましく顔をゆがめた。

わざかに身を引いて、リイナは彼女を見つめる。

「……どう、したの？」

その問いかけに、ベレディーネは、つゝと美しく礼を取つた。

「お別れを、する為に参りました」

「お別れ？」

「はい、グレンタル神殿での修行が終わりましたので、私は間もなく故郷の神殿に戻ります」

そんな事を個人的に言いに来る必要はないのに、なぜ。

「そう、なの」

眉をひそめながら、リイナはベレディーネの様子を探つた。

ベレディーネに誘われ、リイナは躊躇いながらも自室へと彼女を招き入れる。

その間も、リイナはベレディーネの表情を窺っていた。

警戒していないと、いつ、ひどい言葉で胸をえぐられるか分からぬ。耐える為に、リイナは身構える。

探るリイナに、ベレディーネは思いがけない言葉を向けてきた。  
「今まで、姫巫女様と共にこのグレンタル神殿で過ごせましたことを、光栄に思います」

思わず、リイナの顔が悲しげにゆがむ。その言葉を本心から信じる事が出来たら、どんなにうれしいだろう。けれど、今更そんな風に取り繕われても、むなしいだけだった。

「……ホントに？ ベレディーネ。口先だけの礼儀なら、もう聞きたくないの。嘘は言わないで。私が気に入らないのでしょうか？ 力も出せないのに姫巫女なんてあがめられている私が」

ベレディーネは、悲しげに、ゆっくりと首を横に振る。

「……私は、姫巫女様のことが、好きですわ。おそらく、ビアンカも、ローリアも」

その言葉に、リイナは思わず叫んだ。

「……どこが？ 無視して、悪口言つひとの、ビニヒ好意があるの？」

突き放された苦しさが、今更そんな事を言つて惑わしていくベレディーネへと向かう。

彼女はわざかにうなだれ、けれど、静かにぼつりぼつりと話す。

「姫巫女様。私どもは、巫女です。先を読み、過去を読み、人々の助けになることを誇りに思っています。より強い力があれば、人を助けられることが多くなるのです。姫巫女様におかれましては、その大きさで、この国をも守るほどのお力を秘めておられるのです。なのに、姫巫女様はその力を厭つておられる。私どもが望む力を持つおられながら、力を目覚めさせる努力すらなさうとしない。どれだけ歯がゆく感じるか、きっと姫巫女様にはわかっていただけないでしょ？」

言葉の中にどこが責められているような物を感じたリイナは、や

りきれなさを吐き出すように言いつた。

「確かに、私は力を疎んじているけど、本当に、力の出し方なんてわからないのよ……！」舞の修行のだって、まぐれとしか言いようがないの。何が起こったのかさえ、わからなかつたの。力が現れたつて事は、何かが見えてないといけないのでしょう？ 私は、何も見えなかつたの。本当にわからないのよ！」

叫ぶように言つたリイナに、ベレディーネは、ゆつくりと頷く。

「……そうですね。きっと、それが姫巫女様におかれましては、真実なのだろうと、思います。この神殿を出るに至つて、私も、ようやく落ち着いて姫巫女様のことを冷静に考えることが出来るようになりました。舞の練習でおいでたときから、姫巫女様は真剣に取り組んでおられましたことを、知つていましたのに。力の発露には、大きなむらが、真実あるのでしょうか。けれど、それは、私たちにはわからないのです。私たちは、時を読もうと思えば、託宣出来るほどではなくとも、時の流れを感じることが出来ます。守石の輝きが強い者ほど、それは顯著に感じ取れるそうです。だから、本当は見えてるはずだと、それをしたくがない為に目をそらしているのだと……そんな風に思いたい気持ちがあつたのです。私どもは、嫉妬に目がくらみ、あなた様のお心を、見失つていたのですわ……。悔やんでも、悔やみきれません」

ベレディーネはそう言つと、おもむろに膝をつき、「申し訳ありませんでした」と、深々と謝罪を示す。

けれど、リイナが望んでいたのは謝罪ではなかつた。望んだのは、リイナが、リイナとして認められること。

「……そんなの……っ」

「そんな事の為に……！」

リイナの胸が軋む。そんな事の為に、リイナは全てをこの神殿で否定されたのだ。

ベレディーネがリイナの思いを認めてくれた、それは望んでいたことだつたのに、今となつてはその事が、むしろリイナの中にある

姫巫女に対する不快感を強める事になった。姫巫女などにならなければ、力が認められなければ、せっかく友達になつた彼女を失わずにすんでいたはずなのだから。彼女らとの価値観の相違が生んだ溝。それが埋まることをおそらくこの先なく、互いに理解することはないのかもしれない。

こんな事の為に。必要としていない力の為に。

そう思う気持ちがふくらんで行く。

「私は片田舎の巫女ですから求められる力がそれほど大きいわけではありません。ただ、ビアンカも、ローリアも、エドヴァルドの巫女。素直にあなた様を認めるには、時間もかかりましょう。ですが、いつか、私のように田を覚ます日も来るでしょう。あなた様のお心に気付く日が。……私は、あなたと過ごした日々を、光栄に思います」

今更、光栄などと言われても、それをうれしく思う気持ちは、もはやリイナはない。なぜなら、近い内にその地位を捨てて逃げるのだから。

ただ、それでも、嫌われたと思っていたベレディーネが歩み寄ってくれた事はうれしかった。リイナの気持ちをもう一度思い直してくれた事がうれしかった。

友達は、こうして、ケンカをして、嫌いになつて、でも好きな気持ちがあつて、許したり、許されたりしながら関係を築き上げて行く。互いの違いを受け入れることを覚えて行く、自分とは違う存在を認めて行く。

けれど、ベレディーネがわずかながらも歩み寄ってくれた事に対するうれしさの反面、リイナの中には今更だという思いも少なからずある。もう、友情を取り戻すその時は来ないのだから。リイナは姫巫女でいるつもりはないのだから。

ただ、それでも、ベレディーネがこうして歩み寄ってくれた事は、リイナには幸運だと思ひなおす。

そして出来る事なら、姫巫女としてではなく、リイナとして、た

だの友達として好きでいてくれたら、と、願う。

残りわずかな時間であつたが、リイナはベレディーネにそれを求めることにした。想いを伝えたかった。分かつて欲しかった。

「……光栄になんか思わないで。私は、姫巫女には、なれない。だって、私には何も見えないもの。私は、巫女に対する敬愛の念は持っているけれど、私自身が巫女という存在になることに、私は価値を見いだせない。何の力も感じないのだから。あなたが出会えて光栄に思う姫巫女なんて、ここにはいないもの。でも、ベレディーネ。それでも、うれしかった。もしあなたが、少しでも私の事を、姫巫女じゃなくって、私の事を好きでいてくれたのなら、私もあなたに、あなたたちに出会えた事を、幸せな事だと思うわ。答えは聞かない。聞かないから、そう思わせて。……来ててくれて、ありがとう」

「……姫巫女様……」

言葉を失つたベレディーネに、リイナは首を横に振る。

「姫巫女なんて、呼ばないで……。私は、リイナ。リイナなの……。姫巫女なんかには、なれないの……」

ベレディーネがいたわしそうにリイナを見つめた。けれど、彼女は何も言わずに、頭を垂れた。

「……私は、近日中に、グレンンタール神殿をおいとまいたします。どうぞ、お元氣で」

リイナは、届いたか、届かなかつたか分からぬ思いを押し込め、唇を噛み締める。

「……ベレディーネも、ね」

よいやくつぶやき返したリイナに、ベレディーネは、もう一度頭を下げる。

「ありがとうござります」

リイナを見つめる瞳は、とても悲しげで、けれど、以前のようこ優しく搖らぐ。

リイナは立ち去つて行くその背中を見送つた。

あつけなく壊れてしまつた友情だけど、それでも共にいればもう一度結び直す事が出来る。

けれど、その日は来ない。  
それは悲しいことだけれど、リイナの決意は揺らぐことなく前を見つめる。

それでも、ただ、壊れただけではなかつたのだと、確かに思つ気持ちは彼女たちの中にあつたのだと、そつ思えたことが、リイナにはとてもうれしかつた。

余談。

ベレティーネは、本当に反省しています。

一人のリイナを思いやれなかつたこと、突き放したこと、あまつさえ、悪く言つてしまつたこと。

悔やんでも、悔やんでも、耐えきれずやつてしましました。

たつた一人で耐えてきたリイナを思つと、辛くてたまらないのですが、今更、どの面下げてリイナをいたわる言葉などを言えるのかと。そう思つと、いたわる言葉も、リイナを思つ気持ちも、出せません。出てくるのは、言い訳ばかり。

リイナの気持ちがうれしくても、リイナを苦しめた罪深い自分を許せない彼女は、何も言ひ「」ことが出来ないまま、リイナの元を去ります。

恥を厭わず、「友達だと思つている」の一言が言えなかつたことを、きっと、彼女は生涯悔やむのです。

けれど、その失敗が、きっと、ベレティーネを、たくさん悩ませ、たくさん悔いて、たくさんどうすればよかつたかを考えさせ、そして、ようすばらしく、思いやり深い巫女へと育てるのだと、思います。

でもって、気持ちの良い別れではないけれど、リイナは、この三人のことを、悪い思い出だけではなく、最後に報われた気持ちも胸に刻みつけ、きっと、時折、思い出すのです。悪いだけの出会いではなかつたと、そつ、前を向いていけるはず。

早く逃げ出さなければというリイナの焦りをよそに、毎日は何事もなく過ぎて行っていた。

エドヴァルドの先読みの姫巫女がやつて来るといつので、多少神殿内は慌ただしくなつてはいたが、リイナには何の関わりもなく、周りだけがせわしく流れていくような。あくまで他人事で、リイナの単調な生活には変わりはない。

ただ、その雰囲気は、リイナの高揚感をあおるようになにせき立てる。早くここを逃げたい。いつになつたら、逃げ出せそうな時が来るのか。時折波のようにリイナを焦りが襲う。

少なくともそれは今ではない。

分かっているが、周りの醸し出す慌ただしさにあおられて、落ち着かない気持ちを持て余していた。

昨日、ついに先読みの姫巫女がグレンタール神殿に訪れたらしいという話を、リイナは守人から伝え聞く。

通常、彼の姫巫女かわいこが王都を離れることはほとんどない。更に、今回訪問は、その目的さえも伏せられていた。

故にグレンタール神殿に来たのも公的な物ではないらしいという噂だけはリイナの耳にも入つており、先読みの姫巫女がグレンタール神殿に滞在中、表に出る予定はないとのことであった。

リイナがそれを聞いたときは思わずほつとした。

生みの母親と言つても、今の現状に至る原因となつた人である。複雑な思いもあり、顔を合わせたところで、どうしたいのか、どうして欲しいのか分からなかつた。もし顔を合わせて、何があつても、もし何もなくても、あまりいい思いを抱けないような気がしていた。それならいっそ、顔も合わせることなく済ませたかった。

なのに、それは、突然に訪れた。

こんこん、と、扉が控えめに客が来たことを知らせる。

目を向けると、女性が一人入ってきた。年の頃は、リイナの母ラウラと同じ頃だろうか。

見知らぬその女性を見て、リイナは息をのんだ。

ふわりと波打つ金色の巻き毛。洗礼された物腰。

この人は……。

リイナは硬直したまま彼女を見つめた。

目の前にいるのは、その会いたくないと願ったエドヴァルド神殿の先読みの姫巫女その人だつた。

紫泉染のベルがその証拠。

そして、ラウラの言つたとおり、リイナと同じ翡翠の瞳をしていた。

「あ……の……」

リイナは彼女の突然の訪問に言葉に詰まらせた。周りを見渡すが、他に誰かいる様子もない。神殿内とはいえ、コルネアの時渡りの神殿で最高位の姫巫女が、連れの者一人も連れず、唯一一人でやつてきていた。

「突然、ごめんなさい」

戸惑うリイナに、にこっと笑つた顔は、意外に人なつっこいようにも見える。けれど、彼女を包む高貴な雰囲気は大きな存在感を持ち、いかんともしがたく、リイナを圧倒する。

「でも、あなたの顔を見に来たのです。無理言つて、ようやく時間がとれました」

ふふっと姫巫女は微笑むと、懐かしむように目を細めた。

伏せられた姫巫女の目的の真相に、リイナは啞然とする。まさか、何かの冗談だろうと思おうとするのだが、元々、噂としては、新しい姫巫女に会いに来たという話もあったのだ。ただ、先に姫巫女となっているエドヴァルドの姫巫女の方が会いに行くというのは威信

の問題であるため、それがおおっぴらに譲られる」ことはなかつたのだが。リイナからすると、まさかの言葉であった。

しかし姫巫女は、リイナの驚きなど気にした様子もなく、静かに言葉を紡ぐ。

「大きくなりましたね」

そう言つて微笑むと、懐かしむように、じつとリイナを見つめる。

「あなたのその髪は、コンラートにそつくり。そして、あなたのまなざしは……」

言葉を句切ると、姫巫女は、愛おしそうにリイナを見つめている。リイナは、その瞳を受け止め、ぐっと歯を噛み締め、睨み付けるように彼女を見つめ返した。

私の目はあなたの瞳に似ている？　そうして私は、あなたの娘だと言つつもり……？

姫巫女の次の言葉を予想して、リイナは、怒りがこみ上げてきた。私は、あなたの娘じゃない。

そう言つてやるわ」と思つていたリイナの耳に、思いがけない言葉が続く。

「あなたのまなざしは……ラウラに、そつくり」

愛おしむように姫巫女がつぶやく。その声は噛み締めるように、元気おしそうに響き、リイナの耳に届く。

そうしてリイナに向けて伸ばしてきた手が、そつと髪に触れた。リイナとラウラの目の色は全く似ていない。ラウラの瞳は茶色で、目の形も、似てると言われたこともない。

姫巫女の手からせりあつとこぼれるように、リイナのまつすぐな髪が揺れた。

「優しくて、真っすぐで、意志の強いまなざし。私は、あなたのお父様と、お母様を、誇りに思っています」

わずかに悲しげに瞳が揺れ、けれど、はつきりと姫巫女が言つた。

姫巫女は、自分が母とは、決して名乗らうとしなかつた。

当然だ、と、リイナは思つ。名乗らう物なら、リイナは、「私の

母はラウラしかいない」と言つつもりであつた。

けれど、目の前の姫巫女は、リイナの母親は、ラウラだといつ。その通りなのだが、複雑な気持ちにもなつた。

リイナは、ラウラが語つた姫巫女人柄を思い出す。ラウラは愛おしそうに思い出しながら、今リイナの目の前にいるこの人のことを語つた。

本当にすばらしい方だと。優しくて、思いやりの深い、そして責任を背負つた方だと。

姫巫女を目の前にして、リイナは何となく、ラウラの言葉が分かることのできる気がした。

私の目をお母さんとそつくりつて言った。お父さんとお母さんを誇りだと言つた。この人は、それをどんな気持ちで……。

目の前のその人の瞳にあるのは、限りない優しさに見えた。

母とは呼べない。呼びたくない。けれど、この人は、確かに自分を産んでくれた人なのだと、好きで手放したわけじゃないというラウラの言葉は真実なのだろうと、母としての愛情を持つてくれているのかもしれない、リイナには思えた。

けれど、優しげな瞳のその奥底には、冷然とした厳しさがあるようにも見える。しかし、リイナは、それは嫌いでなかつた。紛れもなく「姫巫女」として神殿の頂点に立つ厳しさのようにも思えた。責任を背負つた者の厳しさ、優しそうに見えても、人を圧倒する存在感。それが、とても似合う人だと思った。

この人と私と両親の間に過去何があつたのか、思いをはせるガリイナはそれを知らない。けれど、父が、母がこの人を愛したようにであれば、私も愛せるかも知れない、と、彼女にはそう思えた。

「……あなたの、望むとおりにいきなさい」

姫巫女がそう言って微笑んだ。

「あなたの進む道は、行く道であり、来た道でもある

それは、神託のように、静かに、厳かに響いた。

そして寂しげに微笑む。

「先読みとは、幸運にも、そして、不幸にも、確かな物ではないのです。しかし、過去見は、常に、あつた物を見つめる」

姫巫女の瞳が、まっすぐにリイナをとらえる。

彼女が何を言いたいのかつかめずにいるリイナに、姫巫女は、最初に浮かべたような、どこか人なつっこい微笑みを浮かべた。

そして、突然に、リイナはその腕に包み込まれた。

「あなたの進む道に、幸運を」

抱きしめてくる腕の感触、耳元で囁かれた声。

それは、祈るような響きを持つてリイナの心に届く。

きっとこの人は、その言葉を言う為だけに、ここへ来た。  
何故かリイナにはそう思えた。ただ、そのためだけに、この人はここへ来たのではないかと、そう思えた。その心は生みの母であるが故の愛情なのか。

リイナにそれを知る術はない。

けれど、うれしいような、寂しいような、けれど、胸にじわりと滲むような暖かさが広がる。

私の幸せを、願ってくれますか？

心の中で問いかけるが、それは決して言葉には出来なかつた。

その後、姫巫女は来た時と同じように、簡潔に退室を告げると、一人で静かにリイナの部屋から出よつとした。

「あのー」

思わず呼び止めると、姫巫女が振り返つた。

何か明確な意図があつて声をかけたかったわけではない。けれど、何か一言言いたかった。恨みの言葉でもない、かといつて好意を向ける言葉でもない。ただ、何か言葉をかけたかった。けれど、そんな思いは言葉になるはずもなく、リイナは姫巫女の視線を受けて戸惑いがちに、ぽつりと声を絞り出した。

「さよなら」

そう、ようやく出せた言葉に、姫巫女はわずか悲しげに微笑みを返し、リイナの別れに答えることなく去つた。

一人になつた部屋の中で、リイナはこれまでのことをゆつくりと思い返す。ここに来ることになつた経緯も、ヴォルフのことも、修行も、三人の姫巫女のことも、そして、生みの母である姫巫女のことも。

ゆつくりゆつくり思い返しながら、そして、自分が取りたい道、進むべき道への決意をあらためる。

『あなたの望むとおりにいきなさい』

リイナの胸に、姫巫女の言葉がじんわりと響いて行く。  
まさしく、今、リイナが必要な言葉であった。  
ええ。

リイナは心に誓う。

私は、私の望むとおりに生き、私の望む道を行く。  
リイナの中で、出発のその瞬間が見えた。

新しい姫巫女が生まれたという話は、グレンタール以外ではあまり知られていないようだつた。

確かに、リイナは姫巫女の地位を初めから与えられていたとはいへ、修行中の身であり、発表には尚早であろう。

しかしヴォルフは新たな姫巫女の存在を全く開示しようとしていることに、神殿側の意図が何があるのではないかと考えた。このような事は、神殿からするとその力を示す機会であるというのに、秘して語らず……ということは、秘さなければいけない理由があるはずなのだ。神殿のやり方があまりにも強引だつた事も、疑惑を持つ一端である。

ただそれが何なのかまでは知る事が出来なかつた。それでも姫巫女が生まれたという事実は非常に大きな意味を持つ出来事である。神殿に縁深い人間の間では知られていたが、それでもあくまで伝聞の域を出ていなかつた。

グレンタールに限らず市井の者にとって、情報が詳しく伝達する手段が、まだコルネアでは発達していない。あくまでも伝聞がほとんどである。

故に姫巫女が生まれたという噂はグレンタールから離れたエドヴァルドでも当然それなりに広がつたのだが、神殿からの正式な発表がなければ、そのまま噂として沈静化していた。

グレンタールでの盛大な発表は、リイナの退路を断つ為ではないかとヴォルフは考える。

そんな状態であったから、ヴォルフの元に、それほど詳しいグレンタールの姫巫女の情報が入るわけではない。

けれど、神殿に縁深い人間から新しい姫巫女の情報を得るのはそう難しいことではなかつた。

グレンタールの次期領主が、舞と一緒に踊つたというグレンタ

ル神殿の新しい姫巫女のことを探しにかかるといふのは、それほどおかしな事でもなく、不審に思われる事もない。とはいっても、いろいろなことを知ることが出来たといつても、知る事ができるのは姫巫女に対する神殿側の対応がどのような物であるかという程度なのが。

そして、ヴォルフにも、遅ながらもその情報が入ってきた。  
遅れがちで曖昧な情報が多い中、それでも、ヴォルフが放置できないような情報であった。

それはグレンタール神殿の姫巫女が、皇太子の後宮に入るという物であった。

「後宮だと？」

「ああ。まだ噂段階だが、かなり確かな話だ」

ヴォルフの顔がこわばった。

ヴォルフの耳に入る情報は、得てして、だいぶ遅れた物となる。  
その話が出たのはいつのなのか。表に出でてみると、いつとは、だいぶ進んでいると考えた方が良いのか。

ヴォルフは焦りを覚えた。このままここについては、どうにもならない。

本当に後宮などに入ってしまえば、とてもではないが、ヴォルフには手が出せなくなってしまう。

いろいろ考えたが、この場でできる事など皆無に等しい。

ヴォルフはすぐに適当な理由を付けて休暇を取ることにした。  
グレンタールに戻るのだ。

幸い、良い口実があった。エドヴァルドの先読みの姫巫女がグレンタール神殿に行くという情報が入ったのだ。グレンタールの次期領主として、村の警備の面でもなんでも仕事があるとでっち上げるのは簡単である。特に忙しい時期でもない今、急な申請にもかかわらず、ヴォルフは一週間ほど休みを取ることが出来た。  
ヴォルフはすぐさまグレンタールに向かう。

詳しい情報がない今、何が出来るのか、そもそも何か出来るのか、それさえも分からない。けれど、行かなければ何も出来ない。こんな先の見えない状態でただ向かうなど愚かだとは思つたが、今すぐ行かなければならぬという思いは、どうしようもない衝動となつてヴォルフを突き動かしていた。

ヴォルフはグレンタールに戻ると、まずコンラートを尋ねた。リイナが神殿に上がるときは簡単に避けられたが、状況が状況である。グレンタールの守人でありリイナの父親でもある彼ならば情報も多く持つているだろうし、何より、今回のような状況ならば、協力が望めるかもしない。

突然家まで押しかけたときには、さすがに驚いた顔をされたのだが、後宮入りの話を尋ねると、コンラートが厳しい顔をした。

「なぜ、君が知っている」

「……ご想像通りです」

ヴォルフが笑うと、コンラートは眉をひそめた。

「俺は、リイナを助けることを、諦めたつもりはありません」

「コンラートは引くつもりのない、ヴォルフを見つめて、深い溜息をつく。

沈黙と、その合間に交わされる視線での攻防の後、低い声でコンラートが負けを認めた。

「……今度ばかりは、君の力を借りたくなつてゐるよ」

ようやく望んだ協力が得られる。ヴォルフは力を込めて頷いた。

「望むところです」

『あなたの進む道に、幸運を』

エドヴァルドの姫巫女の言葉で、リイナが思いついたのは、「いつ、神殿を抜け出すか」という問題の答えた。

この時しかないとリイナが狙つたのは、姫巫女がグレンタールを出た夜だった。

もつとも高貴な姫巫女が無事グレンタールを出たとなれば、人の氣はゆるむ物である。警備も自然とゆるみやすいだろうと踏んだのだ。リイナはそれを狙つた。

神殿内が寝静まつて一刻ほどは過ぎただろうか。傾いていた月が、今は真上にある。

少し前、建物の外に人の気配がしたのだが、今はもうない。警備の見回りは、この時間を過ぎるとしばらく来ないことは確認済みだ。リイナは体を起こすと、ベッドからそつと起きだした。音を立てないように、そつと服を着替える。といつても、巫女の服を着るわけにはいかないので、寝間着を整え上着を羽織る程度なのが。

窓の外に人影がないのを確認して、リイナは身を乗り出す。リイナの部屋は一階。そのまま飛び降りれば、結構な足音になる。リイナは後ろ向きになつて窓にぶら下がると、手を離す。

このくらいの高さなら、たいしたことではない。グレンタールは山間の村である。子供が遊ぶのは山の中、木登りや高いところから飛び降りるのはやすい物なのだ。

とすんという足音がして、リイナの足に衝撃が走る。リイナの耳にやけに大きく響いた足音だったが、すぐに動かず、音を聞きつける人がいないことを確認する。

ついに神殿から逃げるのだ。リイナは恐怖と興奮とに胸が高鳴るのを聞く。どくんどくんと鳴る心臓の音を聞きながら、そつと見回りの少ない、裏手に回る。

通用門の近くの堀には、登るのに手頃な木があり、そこを乗り越えるのだ。

リイナが木をつたい、登りきつて、壁の向こう側の枝にぶら下がつたときだつた。

「誰かいるぞ！」

男の声が響いた。

枝にぶら下がるリイナの姿が見つかったのだ。

リイナはすぐさま手を離し、飛び降りると、一目散に駆け出した。慎重に気をつけていたのに、ようやく出でられた安心感か、周りの確認が甘かった。

悔やんでも仕方がない。

必死で走るリイナの耳に、<sup>神殿から</sup>、追つ手のかかる声がする。リイナは少しでも見つかりにくくなるよう、森の中へと足を踏み入れた。

道なき道を、リイナは必死で駆け抜ける。擦れる草木の音。時折肌をかすめるぴりとした痛みも氣にせずに走るが、兵士達は確実にその距離を詰めてくる。

神殿側から聞こえるその声に、「姫巫女」や「逃げた」という言葉が途切れ途切れに聞こえ、もうリイナが逃げ出したことが把握されていくことを知る。

「いたぞ！－」

声がした。思わず振り返ると、思つた以上に近くにいることを知る。

いや……！

リイナは胸が潰れるような恐怖で、半ば半狂乱になつて走った。しかし、追つてくるその音は次第に大きくなり、兵士の息づかいまでもが聞こえるほど迫つていた。

「姫巫女様……！」

捕まる……！

恐怖に心臓が止まるかのように思えた。胸の痛みに、このまま死んでしまうのではないかと。

ヴォルフ様。

脳裏に浮かんだのは、ずっと心の支えにしてきた、あこがれの剣士。

あの時、あなたの手を取つていればよかつた……！

涙があふれそうになる。

「さんといひで捕まつたくない、もつ、あわいは戻りたくない  
……」

「……やつ、いやあ……」

今にもリイナの手をつかむ氣の兵士の姿に、リイナは悲鳴を上げる。

その瞬間、リイナの視界がゆがむ。  
リイナを捕まえようと迫る兵士の姿がぶれる。  
なに? ?

ゆつくつと、ゆつくつと時間が過ぎてこへりつた、そんな不思議

な感覚。

「姫巫女様」とリイナを呼ぶ兵士の声も、ビリか遠い。  
ゆつくり、ゆつくりと時間が過ぎる。  
これは、なに? ?  
理解できないその感覚の直後、まるで意識が途切れゆつた、世  
界が突然変わった。

### 3.1 逃避（後書き）

とりあえず、時間は、日本の昔ながらの時間の考え方（？）で。といふ事で、一刻は約一時間ぐらいです。

「姫巫女様……！」

リイナの手をつかもうとした兵士が悲鳴を上げた。

その時、その場にいた誰もが自分の目を疑つた。たつた今までそこにはいた姫巫女の姿が、わずかに揺らいだ後、忽然と消えたのだから。

それを確かにその目で見た兵士達は、ざめくがごとく動搖を口々に漏らしたのだつた。

すぐさまその報告は神殿で待つ神官長まで届けられた。

そのまま脇には、紫泉染を纏つたエド・ヴァルドの神官もいる。エンカルトであった。

「そうですか」

エンカルトはさほど驚いた様子も、怒る様子もなく、静かに頷く。「……さすがは、時渡りの姫巫女。先読みの姫巫女様にそうと予言された方」

楽しげな男のつぶやきに、神官長はびくりと反応した。

「リイナ様が、時渡りをされたと……！」

まさか、というようなその声に、エンカルトはにっこりと微笑む。「だからこそ、姫巫女として、お迎えしたのです。姫巫女にふさわしい方だと申し上げたはずですが。力の不安定さなど、補つてあまりある力。疑つておいでたのですか」

口元は笑つているように、見据えるようなエンカルトの瞳をうけて、神官長はわずかに目をそらせた。

「ともかく、このことは姫巫女様にご報告いたします」

エンカルトは話は終わつたとばかりに神官長に背を向けた。そして側に控える数人の兵士にいくつか指示をすると、エンカルトはそのままグレンタールを離れ、エド・ヴァルドに向かう途中にある町、リュックカへと向かつた。

一晩馬を走らせ、明け方、エンカルトは姫巫女のいるリコッカの神殿へとたどり着いた。

リイナの逃走を報告すると、姫巫女は小さく頷いた。

「今日でしたか」

「はい」

頷くエンカルトに、姫巫女は視線を向ける。

「で、手はずは出来ていますか？」

「ええ、あちらには伝書を飛ばし、予定通り追つよう手はずも整えて参りました。既に動いているはずです」

「……そうですか」

静かに頷いた姫巫女の表情はわずかに陰り、そしてそれはすぐに消え去る。

「あの子は、グレンタールの……いえ、神殿の命運を握る娘です」「ええ」

私は、こうするより他になかった。

エンカルトの耳に、そんな苦しげな声が聞こえた気がした。

けれど、見つめる先の姫巫女の表情は、どこまでも冷静で、汲み取れる感情など、垣間見ることさえ出来ない。

「……全ては、あなた様のご意向のままに」

礼を取るエンカルトに、姫巫女は小さく頷いた。

夜が明け、辺りを光が包み込むように照らしていた。

「……とした、森が、そこについた。  
はあ、はあ、という自分の息づかいだけが、リイナの耳に届いていた。

兵士、は？

リイナはたつた今自分を捕まえようとした兵士の姿を探す。

けれど、いくらあたりを見渡しても、先ほどまで確かにいた兵士

はない。神殿の方角からも何の音もない。

森の中に、ぽつんと、リイナだけが存在していた。

あがつた息を整えながら何度も辺りを見回すが、やはり人の気配は全く感じられなかつた。

リイナは自分の身に、何が起こつたのか分からなかつた。

「こゝは？」

と、辺りを見渡すが、そこは変わらず森の中で、リイナが逃げてきた場所である。この先を進めば、グレンタールに出る。そうして辺りの様子を確かめながら、がさがさと草をかき分けて少し進み、そして、おや、と氣付いた。振り返ると、さつきから進んだ数歩分だけわずかに人をよける形に踏みしだかれているが、兵士に追われながらリイナがかき分けってきたはずの草は、まるで踏みしだかれたことなどないよう、鬱そうと茂つていて。

更にもう一つ違和感に気付く。

周りは薄暗いが、どうやら月明かりではないようだつた。もっと全体に淡く照らすような薄暗さ。

リイナは空を見上げ、息をのんだ。

夜明け？！

たつた今まで夜中だつたといつのに、明け方になつっていたのだ。まだ明けそうにはないが、それでも、東の空の明るさが、そうと示している。

何故、と混乱したのもつかの間、まさかといつ思いに衝撃を受けれる。

時渡り。

その言葉がリイナの頭をよぎる。彼女に期待されていた姫巫女の力だ。有るはずがない、扱えるはずがないと思つていた力が、こんな形で発露したのか。

混乱して何も考えられず、呆然と周りを見渡す。信じられなかつた。信じたくないというのが今のリイナの心情かもしない。しかし、先ほどまで追いかけられたその痕跡を探すが、それに相当する

物は全くない。人の声も、神殿の騒ぎも、何一つないのだ。

時渡りをしたのではないかという不安が更に増す。何でこんな…

…と、リイナは恐慌状態に陥りかけた。

けれど、それは一瞬だった。それ以上に大切な事実を思い出したのだ。

そう、今は誰もいない、騒ぎも起こっていない。

そう気付くと、改めて周りを見渡す。

おそらく、誰も。そう、誰もリイナの逃走を気付いていないのだ。

リイナは我に返る。

そうだ、逃げないと。

リイナは動搖に震える体を叱咤して、足を動かした。おそらく誰も気付いていない今が逃げる絶好の機会なのだ。リイナはグレンタルに向かい足を進め始める。

がさがさと草の音を立てながら、リイナはこの状況がどういう事なのかを考えた。

誰も気付いていない事は、これは、私が逃げ出す前なのかもしれないと思い至り、とりあえず村へと向かう事にした。とにかく人の目に付かない、今のうちに。

グレンタルを出る前に、父と母に一日会いたかった。

過去へ時渡りをしたのなら、会つても良いはずだ。そう自分に言い訳する。二人に会える、最後の機会なのだ。

そして、叶う物ならば……ヴォルフとも。

リイナはグレンタルを出る前に会いたい人を思い浮かべた。

あのとき「助けてやる」と言った彼の姿を心に描き、今まで再び糧にする。

一日で良い。遠目で良い。ヴォルフ様に、会いたい。

森を下りグレンタルを目指しながら、リイナはヴォルフを想つた。

けれど、ヴォルフは首都エド・ヴァルドにいる筈だ。会えるはずがない、と理性が訴える。けれど、今、無性に会いたかった。

「ヴォルフ様……」

小さい声でお守りのようなその名を呼んだ。

それは思いがけず、薄明かりを纏つた暗闇に大きく響く。少なくとも、身を隠したいリイナには思つた以上に大きく聞こえた。自分の声に驚き、リイナは口をつぐんだ。周りはしんとしているのだから、どちらにしろ、自分の歩く音、草をかき分ける音は十分に響いているのだが。

人目につかないよう、道から外れた獸道を下つていたリイナは、突然ガサリと響いた音に体を震わせた。その音は草をかき分ける音であつたが、足下とは違う場所から聞こえてきたのだ。まさか、こんな時間に人がここを通るだろうか。それとも獸だろうか。

リイナの心臓は早鐘を打つかのうと高鳴った。

どちらにしろ、逃げなければ。

リイナが辺りを見渡し、逃げようとしたとき、懐かしい声がした。

「……リイナ？！」

え……？

木の陰から、大きな人影がのぞく。その人は驚いた表情でリイナをまっすぐに見つめていた。

「ヴォルフ、様……？」

リイナの目の前には、夢にまで見たヴォルフがいた。

信じられなくて思わず呼びかけていた。

衝動的に体が動き、リイナは草をかき分けてその人に駆け寄る。手を伸ばして、その胸に触ると、指先は確かにその存在を感じさせてくれた。

触れた指先を見つめ、そしてリイナはその顔を仰ぎ見た。そこには確かに、ずっと心に描いていたヴォルフの顔があり、懐かしい青灰色の瞳がリイナを見つめていた。

「本物……？ 本当に……？」

信じられてなくて、思いが言葉にならなくてこぼれた。

「……それは、俺の台詞だ。リイナ、なぜ、こんな所にいるリイナ以上に驚いた顔をしているヴォルフを見上げたまま、リイナはじわりとこみ上げてくる涙を必死にこらえた。

「に、逃げて、きま、した……」

よつやく絞り出した声は、それ以上言葉にならず嗚咽にかき消された。

「ヴォルフ様だ、本物の、ヴォルフ様だ。

リイナは、ヴォルフに触れる指先に力を込めた。きゅっと指に触れる服を握ると、その感触と共に、ヴォルフの体に指先が引き寄せられるような手応え。確かに彼がそこにいることが感じられて、更にうれしさと安堵がこみ上げ、それは涙となつてあふれ出す。

「あいつ、あいたつか……た、ですっ」

目の前のヴォルフの服を、両手で更に強くぎゅっと握りしめ、これが幻でないよう、もう、夢の中のようになってしまわないよう願う。

ヴォルフの腕が伸び、リイナの体はヴォルフの胸に押さえつけられた。リイナの背にはヴォルフの腕が回っていて、ヴォルフの胸にすがりつく姿で、抱きしめられているのだと気付く。

恥ずかしいとか、照れくさいとかそんな気持ちがリイナの頭の片隅をよぎるが、今は、リイナを守るように回されたその腕が、たとえようもなく気持ちよく、そして心強く、暖かだった。ここにいれば安心だと、そう思えた。

「がんばったな。もう、大丈夫だ。安心して良い」

抱きしめられたリイナの頭の上から、ヴォルフの静かな声が降つてくる。

それは、信じられないほどに、リイナを安心させた。

安心できるその腕の中で、少し落ち着いたリイナは、ヴォルフの胸に頭を預けたまま尋ねた。

「ヴォルフ様は、どうしてここにいるんですか？」

「おちびちゃんと一緒だ。会いたかったからさ」

冗談でも言うかのように軽く笑つて言つているが、その声はなぜか不思議に真実味を帯び、抱きしめられるその腕の強さが、その言葉は決して冗談などではなく真実だとリイナに感じさせた。

「助けに来たんだ。もし、ちびちゃんが後宮入りを嫌がつているようなら、無理矢理にも連れ出すつもりだった。嫌がつてなくとも、このちびちゃんを後宮なんかに入れるわけには行かないけどな。あんな所は、深窓のご令嬢が入る所だ。ちびちゃんには似合わない」

そう言つてからかうように笑つたヴォルフに、リイナの表情もゆるむ。

「そ、ですよね」

ふふっと泣き笑いになつたリイナを、ヴォルフが優しく見つめていた。

「ああ、そうだ。あんな陰謀ばかりの牢獄に、俺のかわいい姫巫女をやつてたまるか」

ヴォルフは呟くと、リイナを抱え込むように抱きしめ直す。リイナはその言葉に、また涙がこみあげる。

ヴォルフがこんなにも心配してくれていた。  
うれしかった。

とぐ、とぐ、とぐ、とぐ、とぐ、とぐ、とぐ、  
リイナの心臓の音がリイナに伝わっていく  
る。その音が心地よい。

リイナを抱きしめるヴァルフから、安堵したような深い吐息がこ  
ぼれた。

「出会えて良かった。まさか、ちびちゃんが逃げ出してくるとはさ  
すがに思わなかつたからな。偶然とはいえ、会えていなかつたらと  
思うと、ぞつとするな」

そう言つて笑つたヴァルフを見て、リイナは、その目が決して笑  
つていないうことを知る。ヴァルフにとつても予想外な状況の筈だ。  
彼も見た目ほどには落ち着いていないのかもしない。

「ほんとに、助けに来てくれたんですね……」

それを実感して、リイナはうれしさをかみしめるように咳いた。

「ああ。今日はまだ下見だつたんだが……。明日、コンラート殿達  
と共におちびちゃんを助けるつもりだった。それにしても、よく見  
つからずに逃げ出せたな」

ヴァルフが、ほうっと溜息をつき、ぐつと抱きしめる腕に力を込  
めた。彼がどれだけリイナのことを心配していたのかをおぼろげに  
感じ取り、リイナは、うれしさと安堵とをその腕の中で覚える。

そして、ヴァルフの服をつかむ手に力を込めた。

「あの、でも、それが、見つかったんです……」

リイナは、逃げ出したときのことを詳しく話しあじめた。

「それは……」

ヴァルフが驚きに言葉を失つた。そこにはまさかという思いとともに  
しゃといふう思いどが浮かんでいる。それを読み取り、リイナは頷く。  
「はい、たぶん、時渡りなのだと、思います。時渡りが出来るかも  
しれないとは言われていましたが……まさか本当に出来るとは……。  
信じられないのですが、そうでなければ説明がつきませんし。神殿  
の修行では、まるつきりダメだったのに。不思議な物ですね」

苦く笑つたリイナの背を、ヴァルフの手が、優しく撫でる。

「それは、きっと、ちびすけにとって、神殿で必要のない力だった

からだ。君に世界が閉ざされた神殿は似合わない。それでいい。それでよかつたんだ」

ヴォルフの迷いのない断言に、リイナは胸を締め付けるようなうれしさと、肩の荷を下ろしたような開放感を覚える。

ずっと力が出せないことを、神殿で無言のうちに責められてきたけれど、ヴォルフはそれで良かったのだといつ。

リイナ自身、嫌だと思しながらも、そんな自分を責めてきていたのだ。それがヴォルフによつて、許された気がした。力が出せなくて良かつたのだと、リイナは自分を許せた気がした。

全部、全部、これで良かつたんだ。逃げ出したのは、間違いじゃなかつた。

そう思えたとたん、こみ上げてきた涙がこぼれた。リイナはまたあふれてきた涙を手の甲でぐいっとぬぐつ。

これでよかつたんだ。

ヴォルフを見上げ、その目をまっすぐに見つめる。

「はい」

リイナは久しく浮かべることのなかつた、満面の笑顔で頷いた。それを受けて、ヴォルフの表情が柔らかくゆるみ、そしてリイナを受け入れるように、小さく頷く。

抱きしめるその手がほどかれ、ヴォルフがリイナにほほえみかけた。

「じゃあ、いくか」

ヴォルフがリイナに向けて手を差し伸べた。

リイナの目の前に、ヴォルフの手がある。

「はい」

リイナは頷くと、ヴォルフから差し伸べられた手に向けて、自分の手を差し出した。

ずっと、ずっと夢にまで見ていたその手。

リイナはもう一度涙を拭つて、そしてヴォルフを見て微笑む。

差し伸べられたその手を、今、ようやくリイナは取ることができ

たの  
だ。

二人は足早に森を下り、人目につかぬようにコンラートの家へと向かつた。

その合間に、ヴォルフは計画について話をする。

ひとまずはグレンタールを離れること。今の状況を考えるに、時渡りが出来ることが判明した以上、尚更神殿がリイナを手放すことはないだろう事を踏まえると、コルネアを出るしかないだろうと言うこと。

コンラートの判断も仰ぐことになるが、元々の計画は使えなくなつたのだ。元の計画では、リイナが力を具現できること、そして何より姫巫女になることを拒むことで、何とか名目を付けて神殿を出させるつもりであつた。それならコンラートとラウラの立場は危うくなるが、リイナは最悪でもグレンタールを離れれば元の生活に戻ることが出来る可能性が高い。ラウラとコンラートも神殿から離れる覚悟はしてあつた。

ところが、もう、その手は聞かないのだ。

最悪の場合の計画は、リイナを国外に逃がすことだつた。コンラートとラウラと共に逃げる計画になつてゐるが、現状を考えるに、追っ手を振り払いながらのかなりの強行の旅になりかねない。つまり肉体労働には向いていないコンラートとラウラだけではその逃亡は心許ない。

ヴォルフは考え込むと、ややあつてリイナをじつと見つめた。

「……ちびちゃん、俺と一緒に、駆け落ちでもするか

ヴォルフがにやりと笑つた。

「……はい？」

慌てふためくリイナを見て、ヴォルフが楽しそうに笑う。

「俺と一緒に、国外逃亡するぞ」

夜が明ける前に二人はリイナの家にたどり着いた。明け方前の人氣のない村で、確かに人の目がないことを確認し、無言で静かに扉を叩くと、すぐにかんぬきを外す音がして、コンラートが顔を出す。

「……リイナ、か？！」

ヴォルフの帰りを待っていたコンラートは、共に帰ってきた娘に言葉を失つた。

「あ、の。ただいま」

すぐさま家の中に引きずり込まれるように招き入れられる。躊躇うリイナに駆け寄つてきたのはラウラだつた。

「リイナ！」

目に涙を溜めて、ぎゅうぎゅうと抱きしめてくる母の姿に、リイナも涙をこぼしながら抱きしめ返す。

リイナとラウラが再会を喜ぶその横で、ヴォルフとコンラートが現状とこれからについてを話し始めた。

「……なるほど。先読みの姫巫女がグレンタールを出るのが今日。猶予は一日か。それなら、私たちはここに残つていた方が良いかもしないな」

コンラートが考えながら呟いた。

「なぜです。出来れば二手に分かれて、落ち合つた方が」

「いや、リイナは、自分で抜け出した。となると、私たちは何の関わりもないと言うことになる。今私達がグレンタールを離れたら目に付く。私達はここに残つて、一人が確実に逃げる時間に回した方が安全だ。国外に出るまでの時間稼ぎぐらいにはなるだろ？。何より君が守つてくれるのなら、私たちは足手まといだ。ここは君に頼らせて欲しい。リイナを守る為にもそれが最善だ。私たちは、ここに残るよ」

「何で……！？」

静かに耳を傾けていたリイナは叫んだ。

「お父さん、一緒に逃げようよー！」

訴えるリイナを、ラウラがぎゅうっと抱きしめ、そして、首を横に振る。

「お父さんの言うとおりだわ。確かに、今の私達は、あなたたちの足手まといになる」

「そんな事ない！」

「大丈夫。お父さんも言ったでしょ。あなたは、今、神殿にいる。私達とは無関係だから大丈夫よ。」

そう言つと、ラウラはコンラートに手を向け、小さく頷く。

「何はともあれ、今すぐにできる準備をした方が良いわね。いらっしゃい、最低限今できる準備をしましよう」

納得の行かないリイナだつたが、すぐに出せる結論でもない。ひとまず、リイナも頭の中を整理する意味も込めて、準備をする為にその場を離れた。

コンラートと一人になつたヴォルフは、彼に詰め寄つた。

「一緒に行きましょーう！」

ヴォルフは言つが、コンラートは首を横に振る。

「いや、私達はここに残るよ。これでも神に、そして神殿に捧げた命だ。もしもの時は背いた罪はつける、それだけだ。だが、娘は神殿に関わらせたことなどない。あの子に背負わせるつもりのない罪だ」

「しかし、背負うと言つても皇太子の妾妃候補の姫巫女を逃したとなれば、その罪は……」

「分かっているだろうが、娘には言つてくれるな。姫巫女が自ら逃げたのだから、血のつながりのない私達は何も知らず、関係なくなるから無罪放免、だ。万が一にも私達が関わっていることが発覚することはない」

いいね、と念を押すような視線に、ヴォルフはゴクリとのどを鳴らす。リイナを最優先するのなら、そういうことにしておいて、口

ンラートの言つとおり一人で逃げるのが最善だとヴォルフにも分かっている。

「……承知しております」

ヴォルフは深く息をついた。

「私達のことより、ヴォルフ殿。あなただ。君は当事者ではない。だがそれをあえて背負うとしている……迷いはないか」

厳しく見つめるコンラートに、ヴォルフはうなずいた。

「俺がリイナを守ります」

「その代償は、大きいぞ」

ヴォルフはわずか苦しげにゆがんだが、けれど確かにうなずく。神殿にたてつくのだ。どんな罪を背負うことになるのか。残してゆく家族にも心配は残る。だが、仮にもグレンタールの領主。この土地を納める以上は、神殿の利権を巡り、それなりの力と才覚がなければつとまらない。いくつか手札もあるはずだ。

ヴォルフはやりとコンラートに笑う。

「父がいますから。不肖の息子の不始末が発覚したところで、いいようになんとでもするでしょう。それに、俺にとつては彼女を見捨てる方が、悔いが大きい。それはこの前のことと身にしみています。今回、エドヴァルドを出たときから覚悟は決まっています」

コンラートが苦しげに笑みを浮かべた。

「不始末、か。すまないな。しかし、なぜ、それほどまでにリイナに肩入れをする？ 君は、リイナをそういう意味で好いているわけではないだろう」「うう」

ヴォルフはその問いには苦笑した。

「そうですね。今のところは、その、恋を楽しむ相手としては見ておりませんが……。けれど、なぜか守りたいと、思ってしまいます。今まで楽しんできたどんな恋の相手よりも、どんな焦がれる想いよりも、彼女の笑顔を守る方が、大切に思えるのです」「恋つてもい女性のために、命をかけるか」

「コンラートは笑った。

「女性と子供のために戦うのは、騎士の使命ですから」

「……君は、恋をしたことが、なによつだ。  
……は？」

「いや、何でもない。……私は、君に娘を託して良いのか？　悔いぬ覚悟はあるか？……いや、悔いてもいい、進めば必ず悔いる日も来るだらう。ただ、その悔いを受け止める覚悟はあるのか？」

射貫くような視線に、ヴァルフは迷いなく答える。

「はい」

その返事に、コンラートが笑みを深くした。

「娘を頼む」

コンラートは膝をつき、頭を床にこすりつけながら禮をした。

「コンラート殿、やめて下せー！」

たまらず、頭を上げてもりおつと、その前に跪いたヴァルフに、コンラートは真剣な顔をして首を横に振る。

「何を言つ。娘を頼むのだ。君に命をかけさせて。こんなことでは到底足りぬよ。ありがとう、ヴァルフ殿。いくら君に礼をしても足りない。いくら君にわびても足りることがない。君に頼るしかない私達を許してくれとは言わない。だがリイナを、どうか、頼む」

コンラートは切なげに微笑んだ。

「……コンラート殿……」

ヴァルフは頷くことができなかつた。

リイナは最低限の生活用品と口持物のする食料をラウラと共に準備をした。

「助けてあげられなくて、『じめんね』

ラウラが、ぽつりとつぶやいた。

リイナはとうさんに否定する。

「助けてくれたよ。必ず助けてくれるって思えたから、がんばれたよ」

リイナは母親と短い合間に話をする。神殿でのことも、先読みの姫巫女と話をしたことも、準備をする合間に話せるだけ話した。

ずっと、こうして何でも話しをしてきた。いつも誰よりも側にいてくれた人だった。血が繋がってなくても、リイナの一番身近な存在だった。

「……お母さん、一緒に行こう」

もしかしたらこのまま会えなくなるかもしれないと思いつと、耐えられずに、リイナは懇願した。

失うのが怖かった。そして、離れるのが怖かった。

けれど、ラウラは首を横に振るのだ。

「子供のことを一番に考えるのが、親の仕事よ。リイナが幸せになるのが私の幸せなの。だから、お願い。お母さんのわがままを聞いて。今度こそ、自分の事を一番に考えて。あの時とは違うから。お父さんとお母さんは、自分の身は自分で守るかい。神殿に戻りたくないのなら、今はまず、自分の事を考えなさい。私達のことを心配するなら、精一杯、自分が幸せになる道を進むのよ」

まっすぐに見つめて言つたラウラの言葉に、リイナは首を横に振った。

「でも、お母さんが、血が繋がっていない私の為に犠牲になる必要ない

涙を堪えていつたリイナに、ラウラが、つんとすました言い返す。「じゃあ、あなたも、血の繋がつてない私の為に犠牲になる必要はないわ」

「ちがうもん、お母さんは私を育ててくれた」「私は、リイナにいつぱい笑顔をもらつて、幸せをもらつたわよ」

ラウラはわざとらしいほど自慢げに笑つた。

リイナはそれに、泣きそうな顔をして首を横に振つた。

「でも」

「リイナ。血のつながりは、確かに大きなつながりの一つだけど、愛情は血のつながりだけじゃないでしょ。愛情は、自分たちで築き上げていく物だから。私がリイナを大切に思うのは、私とリイナが赤ちゃんの時から積み上げてきた愛情があるから。私が「リイナを愛してるから。お母さんの愛を見くびるんじゃないわよ」わかつた？」

返す言葉を失つたリイナに、ラウラはこの話はこれでおしまいとでも言つように、「それから、これも」と、何でもないような素振りで袋を一つ渡す。それには、リイナのような少女が持つには、過分すぎるほどのお金が入つていた。

リイナとラウラが戻つて来たときには、ヴォルフがコンラートとこの後のことについて話し合つていた。

「リイナ、夜が明ける前に家を出なさい」

コンラートの言葉を聞いたとき、そんなにすぐ、という気持ちの方が大きかった。離れがたい思いがリイナの胸を占めていた。しかし、そうするのが最善という事も分かる。

頷きながらも、リイナはコンラートに問いかけた。

「お父さん、本当に一緒に逃げなくて大丈夫なの？」

不安げな声に、コンラートはいつも穏やかな表情で確かに頷く。そして彼の大きな手がそつと伸びされ、リイナの頭にそつと触れた。

「お前は今神殿にいる、だから私達は、何の関与もしていない。知

らないことに罪は問われないよ。そうだろう? それに、私達は、おまえの足枷にしかならない。逆に言えば、私達はリイナを思い通りにするための道具になる。側にいると互いに危険だ。おまえが捕まらなければ、私達は大丈夫だ。だから、精一杯逃げなさい。おまえに話つことを聞かせたければ、私達が生きていないと、ダメだろう?」

「でも、あの人は、そんなに簡単に騙されてくれないでしょ?」

詰め寄るリイナに、コンラートは、クスリと微笑む。

「エンカルトのことかい?」

頷いたリイナに、コンラートは困ったように首をかしげた。

「そうだね、彼を騙すのは、ちょっと難しいかも知れない。でも、あの子はきっと、私達を処刑するようなことはまずしないと思つよ」

……あの子?

あの冷徹な男を示すのにふさわしくない単語に、一瞬リイナは戸惑う。

「どうして、そう言い切れるの?」

「私達は、おまえを得る為の切り札だからだ。むしろ、リイナが捕まらない限りは、大切に保護してくれるだろうね。ああ見えて、可愛いヤツなんだ。彼が引き留めるのを振り切つて神殿を出たもんだから、すっかりひねてしまつているが、未だに根に持つていたところを見ると、十五年も経っているのに、まだ拗ねているんだろうよ」

可愛いだろう? と、冗談めかしてコンラートが笑う。

「……でも、の人、私を神殿に入れるとき、本気でお父さんとお母さんを殺すつもりだつたよね?」

コンラートの言葉には到底肯きがたくて、リイナが不安を口にすると、コンラートが苦く笑つた。

「そうだな、あの時は、おまえが決断してくれたことを、……正直、感謝したよ。あの子は、確かに、紛れもなく本気だった。おまえを得る為なら、迷わず私達を処刑しちだらう。しかし、その際、まず犠牲になるのは、ラウラだ。おまえの決断は、間違いくなラウラを

救つた

「コンラートは、重い口調で肯いた。

「だが、今回は大丈夫だ。あの時とは状況が違う。私達を使って脅すには、おまえが目の前にいなければどうしようもない。私達も、おまえの安全が保証されているのなら、何とでもなる。私達のことは心配するな、大丈夫だ」

コンラートが、にこりと笑った。希望ばかりの子供だまし内容だが、それでも、真実を織り交ぜての言葉は説得力を持ち、リイナには、それなりに納得の行く答えとなつた。信じたいと思つ気持ちが、リイナの目を曇らせたのかもしれない。

苦くも肯いて了解を示したリイナに、コンラートはにこりと笑つてリイナとヴォルフを見た。

「それに……一人が行けば、私達は初めての夫婦水入らずなのだよ」ふふっとコンラートが笑い、リイナとヴォルフは突然の話の転換に面を食らう。

「……は？」

「リイナは私達の娘だが、親が一生子供を守る物ではない。いずれは私達の手から羽ばたいてゆく存在だ。子とはそういう物だ。私が一生をかけて守りたいと思う者は、ラウラだけなのだよ」

「……え？」

話の展開が読めない。それはコンラートの視線を受け止めるラウラも同じだったようだ。

「……あなた？」

「君に、私は守られてばかりだったが、今度は、私が守る番だ」ラウラを抱き寄せるコンラートに、ラウラが心底うろたえた様子でコンラートとリイナとヴォルフを見る。

「……コンラート殿」

ヴォルフは頭に手をやつて、うめくようにつぶやいた。

「なんだい？」

「そういうのは、俺たちが行ってから、一人でやって下さい」

ヴォルフの隣で、リイナがこぐくと肯く。ついでにラウラも顔を真っ赤にして肯いた。

「こりとコンラートが笑った。

「そうだね。それでは、ヴォルフ殿、リイナを頼むよ  
ああ、と、ヴォルフは得心する。

彼は、しめやかな別れなど望んでいないのだと。どこか未来のある、いつかまた会える、そんな予感を演出しているのだと。  
「まかせて下さい。リイナは俺が守ります。お一人も、どうぞよろしくやって下さい？」

あえてからかうような物言いをすると、コンラートが微笑んだ。  
彼の望み通りの答えが出来たようだと、ヴォルフは思つ。

「お父さん、お母さん、ごめんね」

リイナが一人を両手いっぱいに抱きしめる。

「後のことば気にするな。私達で何とかなる。リイナは思つようといきなさい」

「……はい！」

「リイナ、これを……」

ラウラが、自分の首から肌身離さず提げていた首飾りを外し、リイナの首にかけた。

「……私が姫巫女様から……あなたを生んだお母様からいただいた守石よ。私をずっと支えてくれていたの。姫巫女様と、私たちと、リイナを思うみんなの気持ちが込められているの。お守りと思つて、持つて行って」

「うん……ありがとう」

リイナはそれを首にかけると、大切そうに、それを握りしめた。

間もなく夜が明ける。明るさを増した空に、彼らは準備の手を早めた。

そして、慌ただしく、別れの時は来た。

ヴォルフとリイナは馬に乗ると見送る一人に手を振り、グレンタルから駆け抜けていった。



どのくらい走つただろう。田はもづいぶん高いところまで登っている。グレンタルを出るまでは、馬上に慣れないリイナを支えつつ馬を駆けさせたヴォルフだったが、人目につきにくいところまで出ると、リイナに負担がかかり過ぎない程度にまで速度を落としていた。それでも人の歩みに比べれば格段に早い。リイナの感覚では、グレンタルからはずいぶん離れたところにまで来ていた。

背中にはヴォルフの大きな体がリイナを守るように支えている。無言のままに進みながら、リイナはぎゅっと鞍の端を握りしめた。

このまま良いはずがない。覚悟を……決めなくちゃ……。

さっきから、ずっと考えているのに、なかなか言葉に出せずにいることがあった。けれど、ここまで来たのなら、いいかげんに言わなければいけない。

リイナは息を吸い込むと、耐えるように奥歯をぎりぎりと噛み締めた。

「ヴォルフ様、あの、もう、ここまで良いです。ヴォルフ様を巻き込むわけにはいきませんから」

胸が軋むように痛むのを感じながら、リイナはヴォルフを振り返つて言った。

上手く、笑えているだろうか。

吐き出す息が震える。笑おうとする頬が引きつる。

苦しい、息をするのも苦しい。

リイナは、言葉にした直後に、自分の言葉に対して後悔していた。離れたくなんかない。ヴォルフ様と、離れたくなんかない。

既にそんな思いがリイナの心を占めていた。けれどヴォルフはグレンタルの次期領主だ。こんな事は許されない。こんな事をして良いはずがない。それなのに。そう思うとリイナの胸は軋む。

グレンジャーを出てからのヴォルフと二人きりの時間と、安心感は、リイナに心の余裕を与えていた。それは、同時に、自分がヴォルフに背負わせようとしている罪にまで考えを及ぼさせていたのだ。頭では分かつていてことだが、心に自分以外を思うだけの余裕がないときはそれでも甘えていられた。しかし、未来を考える余裕ができた今、いろんな事が現実味を持つて、リイナに恐怖を与えた。

「ヴォルフ様に、なんてことをさせているのだ？」

「考え始めると、怖くてたまらなくなつたのだ。」

「だから、必死の思いで先の言葉を言ったはずなのに。」

「言葉にしたとたん、ヴォルフと離れなければならないという恐怖が、リイナを襲つていた。」

「理性と感情がたたき出す正反対の思いに、リイナは震えた。どちらも嫌だつた。どちらになつても、辛い。」

「胸を打つ鼓動は、今までにないほど強く、そして早くたたきつけてくる。」

「けれど、答えを持つてているのは、ヴォルフなのだ。」

「鞍を握りしめ、リイナは震えそうになる体に耐えた。」

「そんなリイナの頭の上で、軽やかに、からかうような笑う吐息が漏れた。」

「振り返ると、呆れた様子で笑つているヴォルフの顔があつた。」

「俺に、俺の姫巫女を放り出せと言うのか？　まったく、薄情な姫巫女だな。剣士の仕事を奪うんじゃない！」

「からかうように言つその姿は、リイナの決心を笑い飛ばしているかのようだった。」

「けれど、リイナは知つていてる。そんな単純なことではないことを。」

「でも！」

「悲鳴を上げるように叫んだリイナに、ヴォルフがまるでバカにするかのように笑つた。」

「おちびちゃん。じゃあ、聞くが、君は一人で逃げられるか？　ど

うやつて逃げる？ よしんば逃げられたとして、一人で生きていく  
るのか？」

幼い子供をからかうように、たしなめるように。

リイナは言葉に詰まつた。何も考えずに逃げてきた身だ。おそらく、すぐに困り果てる羽目になる。泣きたくなつた。ヴォルフの言葉は真実だ。自分は頼るしかないのだ、その現実がリイナを打ちのめす。

けれど、頼つて良いはずがないのだ。

自分の情けなさを、そして無力さを突きつけられた。

リイナは、ヴォルフを見上げる。

ヴォルフは、分かつてこんな言い方をしているのだ。リイナが、負い目を持たなくてすむように。リイナが一緒にいることを認めやすいように。リイナの言葉が詰まるような言い方を、わざと。

私の逃げ道をふさいでくれている。ヴォルフ様は、優しすぎます……。

リイナは「」み上げてくる涙で、のどがきりきりと痛むのを感じていた。

「伊達や醉狂でこんな事を引き受けたりはしない。俺が望んで関わったことだ、そのくらいの責任を持たせる。君は、俺に守られていればいい。俺がおちびちゃんの剣士だ。分かったな、俺の姫巫女？」

肯いて良いはずがない。良いはずがないのだ。

でも。

リイナはあふれる涙をぬぐつた。

一緒にいたい。ヴォルフ様と一緒にいたい。

リイナは今にも嗚咽を上げそつなどの痛みに耐える。

この腕の中は心地よすぎた。差し伸べられた手を拒んだときの、あの胸が引き裂かれる苦しみを、もう一度耐えられる自信がない。今のリイナに、別れを切り出す痛みを、もう一度味わうほどの勇気はない。

リイナの中で葛藤が続く。

ヴォルフ様に迷惑かけるのは分かっている。

でも、一緒にいたい。この腕に、差し伸べられた手に、甘えてしまいたい。

駄目だ、駄目なのに。

でも、ヴォルフ様。

リイナの目に、手綱を操るヴォルフの逞しい腕が映る。それを見つめているだけで、思いがあふれるような気がした。リイナの心は自分の感情ばかりでいっぱいになる。甘えを受け止めている彼に、全てをゆだねたくなる。

「ごめんなさい。

リイナは心の中で謝った。想いは一つだった。

一緒にいたいです。ヴォルフ様と離れるのは、辛いです。ヴォルフ様と、離れたくないです。

けれど今にもあふれ出しそうなそれを口にはできない。リイナはぎりぎりその言葉を出す事を踏みどどまる。こんな自分勝手なこと、言えるはずがない。甘えて良いはずがない。

リイナは必死で口をつぐみ、言葉が出てこないよう胸の中に押し込める。

なのに、彼は言うのだ。

「……言つただろう？ 僕を頼れ。助けてやると言つたあのときから、俺の気持ちは変わつていない。いいかげんに信用しろ」

信用なんて、とつくにしていた。リイナでも分かっているようなこの危うい状況を、リイナと違い世間を知っているヴォルフが把握していないはずがないのだから。それでもこうして守ってくれているこの人を、リイナは誰よりも信頼していた。だからこそ頼つてはいけないので。

けれど、私は弱いのだ、と、リイナは思った。

がんばって、がんばって、ここまで来た。辛くて、心が壊れそうだった。追い詰められて必死に逃げて、そんな状況で出会ったこの守ってくれる逞しくて優しい腕を、振り払うだけの強さはなかった。

「……ヴォルフ様に、もしかしたら」家族にも、迷惑をかけてします……」

肯きそうな自分を叱咤して、リイナはつぶやいた。自分で振り扱えない。けれど、もし、ヴォルフが手を引くというのなら、それならば、もしかして、がんばって手放せるかもしれない。

反面、それでも守ると言つてくれるのではないかという期待もあつた。でも、素直にその手を取る勇気もまた、なかつた。それでもヴォルフから離れたくなかつた。この、優しい人の側にいたかつた。それを、ヴォルフが諦めたように笑い飛ばして言つ。

「迷惑じゃないと言つているだろ。俺の家族のことも心配するな。あいつらは俺よりもよっぽどしたたかだ」

何でもないことのように言つて、ヴォルフの大きな手がリイナの頭に載せられた。

いつものようにくしゃりと撫でられ、リイナの髪がむらむらとの指の間をこぼれて行く。

ヴォルフ様、ヴォルフ様。

リイナはヴォルフの声を聞きながら、呪文のよう、心中で、何度も何度も彼の名を呼ぶ。

側にいない間も、その名前を思つだけで私を支えてくれた人。

うれしくて、苦しくて、幸せで、悲しくて、申し訳なくて、でも、どうしようもなく愛しくて胸がいっぱいになる。

「ちびすけ、俺を頼れ。いいか。俺に悪いと思うのなら、笑つて」「ちびすけ、俺を頼れ。いいか。俺に悪いと思うのなら、笑つて」ありがとう」つて言つんだ。ちびすけが泣こうが、嫌がろうが、笑おうが、喜ぼうが、俺の決意は変わらないんだからな。ただ、決意は変わらないが、ちびすけが笑うと、俺は喜ぶ。さあ、どうする?「ヴォルフ様は、ずるい、です……」

優しすぎです。

逃げ道を、全部塞いで、さあ頼れと言わんばかりに、リイナが一番選んではいけない、けれど一番望む道を差し出される。

リイナはあふれる涙をこらえながらヴォルフを見上げた。

「ごめんなさい。弱い私は、あなたに甘えてしまう。駄目だと分かっているのに、その手を取ってしまう。差し伸べられた手はあまりにも甘やかで、私は、自分の弱さに負けてしまう。

「ごめんなさい、『ごめんなさい』。

巻き込んでしまって、『ごめんなさい』……。

この差し伸べられた手をふりほどけない。駄目だと分かっているのに、弱い私はすがりついて離したくない。知つてしまつたこの安全感を手放したくない。ヴァルフ様の側にいられる悦びを手放したくない。

何で、私は、こんなに弱いんだろう。頼つて良いはずがないと分かっているのに、手放せない。本当に捨てられるのが怖くて、「もう良い」の一言が出てこない。

弱くてごめんなさい。頼つてしまつて『ごめんなさい』。側にいてくれて、うれしいと思つてしまつて『ごめんなさい』。許されないのは分かつている。でも、私はあなたの側にいたい。

ヴァルフ様、私を見捨てないでいてくれて、ありがとう……。

そしてリイナは、涙とこみ上げてくるしゃくりで、顔をゆがませながら笑つた。

「あ、あり、ありがと、『ごめん』、ますっ うれしい、です……！」  
リイナは申し訳なさと、頼つてしまつ情けなさと、そしてどうしようもないうれしさを胸に、泣きながら、けれど笑顔で言つた。

「それでいい

ヴァルフがうれしそうに笑みを浮かべた。

「これで俺もがんばり甲斐があるというのだ」

ヴァルフがリイナの不安を吹き飛ばすように、おおらかに笑つて、ガシガシとリイナの頭を撫でた。

頭を撫でる手の温かさが伝わってくる。

どんなときでも救つてくれる手。守つてくれる手。その手の持ち主は、危険も顧みず、リイナを救う。

リイナはうれしさや申し訳なさとは別に、その事をビックリしようなく不思議に思う。

何故、ヴォルフはここまでして自分を助けてくれるのか。ヴォルフには犠牲を強いるばかりのことなのに。

「どうして私を助けてくれるんですか……？」

リイナは後ろから回つてきているヴォルフの手を見つめながらつぶやいた。

「何か言つたか？」

小さなつぶやきは、ヴォルフの耳にまほつきりとは届かなかつたらしい。

思わず漏れたつぶやきで、問いかけたわけではなかつた。けれど、リイナは意を決して尋ねる。

「ヴォルフ様が私の逃亡に手を貸すと言つことは、罪を問われるのですよね？」

決意を込めて、リイナはヴォルフを振り返つていった。

彼の目をまっすぐに見つめる。

「まあ、ばれたら、そうだろうな。だとしても、一緒に逃げているから、問題ないだろ？」

からかうように、ヴォルフが笑つた。

「そうじゃなくて……！」

リイナは唇を噛む。彼が気楽そうに笑つてるのは、自分に心配をかけさせないためだと、そのくらいわかる。

「私は、ヴォルフ様に、何も返せません。迷惑かけて、罪を背負わせて……。私のせいで、ヴォルフ様がここまでしなければ行けない

理由は、何もないのに、どうしてここまでしてくれるんですか？」

知らず、責めるような口調になる。感謝こそすれ、責めることではないのに。そうは思うのだが、ヴォルフに背負わせた重荷を考えると、やはり辛さが先に立つ。

「か弱い女性を守るのは、騎士の仕事だらうへ。」

ヴォルフは先ほどと変わらぬ軽い口調で、からかうように笑った。

「騎士の誉れってやつセ」

「そんな事で……！」

あくまでも冗談めいた態度を崩さないことに、リイナは苦しくなる。思わず非難するよつに見つめた彼女に、ヴォルフが目を細めて微笑んだ。

「……そんな事が、大切なときもあるさ。心配しなくていい。ちびちゃんは俺の姫巫女だ。姫巫女を守るのは、剣士の役目だらう？」何度も言つているだらう。頼むから、俺から剣士の役を奪うなよ」笑つてゐるのに、からかう様な口調も変わらないのに、視線だけは、それらを裏切るほど真摯に見えて、リイナは言葉を失つた。

そんな簡単な問題で済まして良いはずがない。けれど、それ以上言いつのる言葉を見つけられなかつた。きっと、何を言つても、ヴォルフの答えは変わらない、そんな気がした。

リイナは目をそらし、また前を向く。馬の背は揺れながら前へと進む。揺れる景色と、過ぎて行く地面を見つめ、そして手綱を握るヴォルフの手をもう一度見た。

「じつじつとした、無骨な男の手だった。所々に傷跡も見える。この手が、どうしようもないぐらい優しくて、あんまりにも優しく守つてくれるから、何も考えずにすがつていいよつに思えてしまつ。いろんな物を守るために鍛えられた手だつた。騎士として、そして次期領主として。

私なんかが自分のためだけにすがつていい手ではなかつたのに。けれどリイナには自分の身を守る術一つもないがために、こんな事態に巻き込んだ。ヴォルフの優しさにつけ込んでしまつた。

助けてくれたことを、うれしいと、ありがとうと言った時点で、リイナは彼に頼る覚悟は決めていたが、迷いがなくなったわけでもない。

突然、ヴォルフの右手が手綱から離れた。

そして、その手がそのままリイナの頭に乗せられる。

「あんまり深く考えるな。はげるぞ」

「禿げません！」

思わず反応したリイナに、後ろで、ヴォルフがぶつと吹き出したのが聞こえた。

「へへへへへ！」

もう！！

振り返ると、彼は笑いながらリイナを見ていた。

「俺の姫巫女は、元気な方が良い。頼むから、笑っていてくれ。その方が俺は守りがいがあつていいからな。女性の笑顔を守るのは、

……いや、姫巫女の笑顔を守るのが、剣士の役目だ。剣士の俺が姫巫女の笑顔を奪つてるなんて事は、遠慮したいんだがな」

にやにやと笑うヴォルフの意地悪な笑顔が、どうしようもなく優しく見えて、リイナは無理矢理にでも笑おうと思った。

不安は山のようにある。申し訳ない気持ちはきっと消すことはできない。けれど、頼ると決めたのなら、彼に甘えることしかできないうのなら、自分にできる事をしなければいけない。

そうだ、たつた一つ、私に出来ることは、ヴォルフ様を信頼することだ。

ヴォルフの思惑がどこにあるか、なぜここまで助けてくれるのかは、リイナにはわからないことだった。けれど、そこには確かな思いやりがある。

ヴォルフが向けてくれる優しさが泣きたいぐらいうれしくて、だからこそ辛くて、けれど、その辛さは一度とヴォルフには見せないとリイナは自分自身に誓つ。

悔やんで懺悔してヴォルフが救われるのならいくらでも悔やむ。

けれど、そうではないのだ。悔やむことも、懺悔することも、謝罪も、全て自分の自己満足だ。ヴォルフにそれを見せるのは、ヴォルフに心配をかけさせることにしかならない。この手を離すことが出来ないのであれば、リイナに出来ることは、限られるのだ。

悔やむのは、もう、これが最後。

リイナは自分に言い聞かせるように誓つ。

私自身が迷つて、ヴォルフ様に心配をかけたらダメなんだ。

今、出来ることは、きっとそれくらいしかない。ヴォルフに心配をかけさせないように振る舞うことだけが今できることだと思った。ならば、ヴォルフが言ったように、笑おう。精一杯笑つて、ヴォルフに心配をかけないようにしよう、そう心に誓つ。

リイナはヴォルフに向けて笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます」

笑顔が嘘にならないように。

リイナは思いつく限りの感謝を胸に抱いて、ヴォルフを見た。

一瞬、ヴォルフがひるんだように見えた。え、とリイナが確認するまもなく、ヴォルフはすぐにいつもの笑顔になつて、頭をポフポフとたたく。

ヴォルフは無言のままにうなずくと、視線を進行方向に向けた。リイナはそんなヴォルフの顔を少し見つめ、いつものヴォルフの顔だと納得すると留つて前を向く。

訪れた沈黙は、決して居心地の悪い物ではなかつた。不安はまだある。リイナ自身のこと、ヴォルフのこと、そして逃げてきた諸々に対しても。けれど、今は背中の後ろにある、大きな安心感に包まれて、何とかなるような気がした。

「今度こそ……守るから」

突然、風の音に紛れるようにそう聞こえた気がして、リイナは一度振り返つたが、ヴォルフは静かに前を向いたままだつた。

気のせい……？

リイナは、「今度こそ」の意味が分からず首をかしげる。気のせ

いかもしれない。

「じゃあ、まずはカルコシュカに向かうぞ。今夜まではちびすけは神殿にもいるわけだからな。それまでは確實に大丈夫だ。様子を見てカルコシュカから船で国外に出る」

「はい」

「心配するな、俺が守る」

そう言つて、ヴォルフが笑つた。

血のつながりもない、今までの人生を振り返れば、いわばすれ違つただけのような存在だった。

ヴォルフは腕の中のリイナを見つめながら、今自分が成そうとしていることと、今までを振り返る。

冷静に考えれば考えるほどに、この選択は愚かなのだろうとヴォルフには思えた。出会つたのはたつた半年ほど前。関わつたのはほんの一ヶ月の、舞いの練習の時のみ。ただの知り合いに過ぎない少女のために、己の人生を全て捨てるのだから。家族も、生活も、そして決められ、望んできた未来も。

分からなかつた。この衝動は何なのだろう。何が自分をこんな行動に駆り立てているのか。

ただ、これだけは分かつていた。リイナを守りたかった。それを諦めたのなら、必ず自分は後悔する。だからこそ決意するのに躊躇いはなかつた。あの日、リイナを守れなかつたが為に襲われた、胸を引き裂くような後悔は二度としない。

そして、いかに自分の選択が愚かだとしても、今この道を選んだことを後悔していない。

この先の未来、どんなに悔やむ日が来ようとも、もし、今この瞬間に戻つたのなら、俺は、何度も同じ選択をする。

一つの道を選ぶと言つひとは、残り全ての道を捨てることつことである。

後悔のない人生などない。

道を選ぶと言つことは、捨てた道への後悔を選ぶこと。決して選びたくない後悔があるとするのならば、それは、リイナを見捨てたという後悔だ。

この先、どんな後悔をしようとも、一度と、リイナを見捨てる後悔だけはしない。他の可能性全てを捨てる価値が、そこにはある。捨てたが故の可能性への後悔全てを引き受けても尚、有り余る価値がある。

ならば。

視界の端で、さうさうと、リイナの金糸の髪が揺れる。ヴォルフは腕の中のその温もりを見つめ、そしてまっすぐと前を向く。それだけで十分だった。

町が見えてきた。

「今日はここで宿を取らうか」

ヴォルフの言葉に、少し安堵してリイナは肯いた。日が沈んでそんなに経つておらず、まだ空はそれほど暗くはない。カルコシュカまであと半日足らず、という位置にある町、ヤンセンに入っていた。

ヴォルフからすると強行にはほど遠いゆっくりとした道のりだったが、リイナにとっては慣れない一日がかりの馬上の移動であり、少なからず、その小さな体に負担をかけていた。

それでなくとも、前日の夜は寝てないのだ。馬上で多少はうとうとしていたとはいえ、とても休めてはいない。リイナの疲れ切った様子に、このままカルコシュカまでいけるにはないとヴォルフは判断する。

あまりゆっくり出来る旅ではない。リイナが脱出するまでに、出来るだけ遠くに逃れていた方が安全だ。それゆえヴォルフとしては、もう少し先に進みたいと思つていた。けれどヤンセンからカルコシュカまでの間に、宿を取れるような集落はない。出来れば、翌朝にはカルコシュカに到着していたかったのだが、リイナの様子に、そこまで無理をさせるのは気が引けた。その上、今はまだこの時間にいるべきリイナは神殿にいるのだからという安心感もあつた。

そう、現時点において、神殿はまだリイナが時渡りが出来ることを把握していない。確實な猶予はこの日の夜まで。リイナの時渡りが今夜知られるとしても、一日早くグレンタルを出ているのだから早馬でかけても明日の昼までにカルコシュカを出ることが出来れば、ほぼ問題なくコルネアを離れることが出来るだろう。明日の朝早く出立すれば問題がない。

おそらく、神殿側は、少女が一人で逃げていると悔っているはずだ。明日中にリイナがカルコシュカまでたどり着けるという予測は出来ないだろう。

だが、実際はヴォルフがついている。まあ大丈夫だろうと、ヴォルフがこの後の計画について練り直している最中も、腕の中でリイナは物珍しそうにきょろきょろと辺りを見回している。

「ヴォルフ様、ここは、どこですか？」

村を出たことのないリイナはどの道がどこに続いているのかを知らない。人の往来があるグレンタールで生活していれば、自然と近隣の町や村の名前は聞いたことがあるが、位置関係を把握できるほどでもなかつた。

初めてのグレンタール以外の町並みに、リイナは少しじきじきしながら辺りを見渡す。好奇心は、ほんの少し、リイナの不安を押さえていた。

「ここはヤンセンだ。宿場町だから、結構いろいろとそろつているぞ。……が、残念だが、今日は必要最低限をそろえて、メシ食つたら寝るぞ。観光をするのは、国を出てからだ。明日は早朝にたたき起こすから、覚悟しておけよ」

にやにや笑つて脅すように叫づヴォルフに、リイナはむつとふくれる。

「わ、わかっていますもん！」

と、言いながら、ふとリイナは店先の商品に目を奪われる。そう言えば、この辺りは翡翠がとれるんだつたつけ。

リイナは自分が働いていたアヴエルタの店で、ヤンセンから仕入れてくる材料に翡翠の装飾品が多くあつたことを思い出す。

田の色と同じだからとアヴエルタが勧めてくれていたことを、まるで遠い昔のことのように思い出しながら、その翡翠があしらわれた髪飾りを見つめていた。

「寄り道している暇はないと言つているだろう？」

ヴォルフが後ろからリイナに囁いた。

リイナは思い出を振り切るように笑うと、それから田をそらした。

「はい」

と、リイナが答えるより早く、ヴォルフはリイナの返事も聞かず、唐突に馬を下りた。

「……え？」

リイナが見つめる先で、ふむ、と頷きながら、ヴォルフが翡翠の髪飾りを見つめている。

よく分からぬまま呆然とその様子を見つめていたリイナに、ヴォルフはその中の一つを取って、リイナに見せる。

「この色が、おちびちゃんの田の色と合っているな」

花を形取った銀細工に、そこから鎖で垂れ下がった翡翠の珠。リイナの髪にそれをかざすと、ゆらゆらと小さな玉が一粒揺れるのが田の端に映る。派手ではないが、かわいらしい意匠の髪飾りだった。

「え、あつ……」

リイナが訳が分からず動搖しているうちに、ヴォルフは「お嬢さんによくお似合いですよ」と笑う店の主人に代金を渡し、さっさとそれを購入すると、リイナを馬から下ろす。

そして、その髪に、先ほど買った髪飾りを付けると「似合ひじゃないか」と、いたずらに成功したようにヴォルフが笑った。

「え、あのつ、ダメです、こんな……」

慌てふためくリイナに、ヴォルフは軽く笑い飛ばすと

「ほら、遊んでいる時間はないんだ、宿に行くぞ」と、馬を引きながらリイナを歩くように促す。

寄り道なんて出来ないって言つたくせに。

宿までの道のりを、リイナが少しでも楽しめるようにしてくれたのが分かる。

これまでの道のりでひたすら移動し続けた疲れはあったが、こうして別のことに対することを向けてくれることが、リイナに精神的なゆとりを与えてくれる。

「あの、ヴォルフ様……？」

「うん？」

隣を歩く、ヴォルフを見上げると、リイナを安心させるように見下ろしてくる、優しい顔に出会つ。

「これ、ありがとうございました。その、うれしいです」  
リイナの好みにあつたかわいらしさの飾りの重みが、とてつもつれしかつた。

「そうか」

ヴォルフが笑つてその髪をいつものよつこべでじゅべと無地無骨で骨張つた手が似合わぬ優しさで、そつと髪を掬ひよつて撫

で、リイナはその感触につれしいような恥ずかしいような感覚を覚え、わずかに肩をすくめる。けれど、その大きな手の感触が、胸に温かい安心感を運んできた。

「でも……あの、これから先のこともありますし……お金……」

「ダメなら買わないわ」

そう言って、ヴォルフは何でもないよつて笑つた。  
急ぐ旅、そしてあてどない旅。いくらお金があつても足りないかもしぬないといつのに、ヴォルフは、リイナの笑顔を優先する。  
「ヤンセンの翡翠は質が良い。ここで買うよりも外で買う方がずっと高い。これから旅先で売れば、買った以上の値が付くこともあります。それは、銀細工もそれほど悪い品でもないからな。もし、この旅で金がつきたら、それは売つてもうつだ」

意地の悪い顔をして売ると言つたヴォルフに、リイナはぱつと表情を明るくして肯く。

「……はい！」

「後で売れと言つて喜ばれたのは、初めてだな

ヴォルフがそう言つて笑う。

「いえ、売らざりますむようにがんばります！　ずっと、ずっと大切にします！！」

リイナは力を込めて言つと、「ヴォルフを見た。

「ありがとうございます！」

リイナが気に病まなくて良いようにと言つてくれた言葉だと分かっている。それでも、そう思うだけで安心して喜べた。

そして宿を決めるまでの間に、旅に備えて主にリイナの荷物をそろえてゆく。何が必要かさえ分からぬリイナだったが、ヴォルフの説明を聞きながらの買い物は、これから先の旅の過酷さを想像させるよりも、冒険じみたワクワクする興奮のような楽しみがあつた。どういう形であれ、買い物とは女性にとって楽しい物であった。

「必要最低限は、このカバンに入れて置くからな。旅先では何が起ころるかも分からぬ。万が一にでもはぐれたら、ちびちゃんが何の装備もしていなかつたら、大変なことになる。これからは必ず、これだけは常に持つていて」

まだ中身は入つてないが、買つたばかりのカバンを受け取つてリイナは力強く頷く。丈夫そうだが、割に軽い。まだ空っぽのカバンを肩にかけてみると、今更ながらに、これから二人で旅に出るという実感がわいてきた。

「ははっ、おちびちゃんがそんな格好をすると、なんだか勇ましく見えるな」

リイナのいかにも町娘らしい風貌に、いかにも旅用といった丈夫な革のカバンがおもしろいほどにそぐわない。

「……褒めてないです！」

何となくヴォルフの言わんとするところを読み取つたリイナが囁みつくと、ヴォルフがなおも楽しそうに笑つた。

35話 逃避5 の後、

ヴォルフとリイナを見送ったラウラとコンラート。

「エリノア」とは、リイナの生みの母である先読みの姫巫女の名前です。

\* \* \* \* \*

「さて、行つてしまつたね」

コンラートは腕の中のラウラにほほえみかける。

「はい」

すんと鼻をすすつたラウラの鼻の頭に、コンラートはキスをする。

「あの……」

「ん？」

「その……」

ラウラは躊躇いがちにコンラートを見つめる。コンラートはそれを愛おしく思いながら見つめていた。

「何度も言つたよね、私が愛しているのは、君だと」

「……だって、エリノア様は……」

ラウラが悲しげにつぶやくのを見て、コンラートは溜息をついた。  
「やっぱり、まだ彼女のことを見にしていたんだね。あれは、昔のことだ。さすがに、もう引きずつていないよ。私も後ろを向いて生きていく気はない。私が共に前を向いて歩んでいきたいのは、君だけだ」

「……それでも、エリノア様を、愛しているでしょ？　あなたが私の事を大切してくれているのは、分かっているの。仮の夫婦役として生きて行くには、十分すぎるぐらい、大切にしてもらつたわ。

でも、リイナも行つてしまつた今、私が、あなたの人生を……」「

「ラウラ。君は聞いていなかつたのか？ 私は、今まで、君に守られて生きてきた。君に、どれだけ私とリイナが守られてきたと思っているんだ。今更、君なしの人生など、どうして私が生きていける？ ようやく、私は君を守るために生きることが出来るんだ。今まで、君に何をしても、私がやる事はリイナのためだと君は思い込んできた。違うと言つても、君は笑つて、うなずいて、心の中で勝手にそう解釈する。どれだけ愛していると言つても、君は信じてくれない。リイナは旅立つた。きっとヴォルフ殿がいればあの子を幸せにしてくれる。私が守るべき者ではなくなつた。いいかげんに、私の気持ちを信用してはくれないか？」

「……だつて、一生の恋だと……」

「勘弁してくれ。若いときの熱病だ。確かに、一生の恋をしたよ。エリノアを恋うたことは、きっと一生忘れないだろう。しかし、今、私が愛しているのは君だ。仮にエリノアが私の妻になると言つても、私は彼女を選ぶことはない。私の妻は君だけだ。共に歩んでいきたいのも、誰よりも守りたいのも、君だ。あんな熱病に浮かされたような恋ではないかもしない。しかし、私が男として一生をかけるほどに愛しているのは、ラウラしかいない。……それとも、君は、私に同情しただけだつた？ エリノアに捨てられた男を仕方なく慰めただけで、こんな事を言われるのは、迷惑なのか？」

苦しそうにつぶやくコンラートに、ラウラは必死で首を横に振る。

「そんなわけっ」「

「じゃあ、君も、私を愛している？」「

「ええ、あなたを、愛しているわ」

「君の同情心と、エリノアへの忠誠心につけ込んだのかと思つと、ずっと恐かつた

「あなた？」「

「……これでも、恐かつたのだよ。リイナが行つた今、君が私の元にどどまらなければならぬ理由もなくなつた。君が出ていくので

はないかと

「……ちょっと、考えたけど」

「冗談じゃないよ。君に出て行かれたら、私は地の底まで追いかけ  
るよ」

「……ホントに? 溜息をついて、その場に座つていそつです」

「……まあ、エリノアの時は、そうだったけどね。私は、君に関し  
ては、諦める気はないよ」

ちらりとラウラを見つめるゴンワートの目が笑うように弧を描く。  
しかし、笑っているようには到底見えないほどに、物騒な笑みだつ  
た。

「君も、そろそろ、私の本気を理解した方が良い。私は、気は長い  
方だけれど、そろそろ、待ち疲れたしね。ついでに執念深いんだよ、  
これでも」

ここにことゴンワートが人の良さそうな笑みで言つ。しかし、む  
しろ目は獲物を狙う肉食獣並みの物騒さがやどり、えも言えぬ迫力  
に、ラウラが一步下がろうとした。

けれど、あつさりと遮られ、ラウラはゴンワートの腕の中にとら  
えられた。

「じつくりと、話し合おうじゃないか

ここにこと笑うゴンワートに、ラウラは身を小さくして、「はい」  
と、小さな声で肯いた。

\* \* \* \* \*

らぶらぶでした。

この夫婦を、ものすゞく氣に入っています。

いつかこの一人が夫婦になることになつた話を書きたいです。

「じゃあ、今日はこの辺りで宿を取るか

ヴォルフは何軒めかの宿を見上げてリイナに声をかける。  
宿場町だけあって、何軒も宿屋があつたが、ヴォルフがどういう  
基準で選んだのか分からぬままリイナは頷く。

ヴォルフが宿屋で主人に前金を払いながら話をしているのを横目  
に、リイナは周りを見渡した。

一階が宿屋で、一階部分は食事処になつてゐるようだ。結構な賑  
わいである。

「ちびちゃん、念のため、建物の構造は覚えておけ」

「こそつとヴォルフが耳打ちをしてくる。

リイナは頷いて、今見える範囲の間取りに気をつけて見渡す。

二人で部屋に入ると、ベッドが一つだけある小さな部屋に案内さ  
れた。

振り返ると、ヴォルフが笑つた。

「ベッドはおちびちゃんが使うんだ。俺は椅子で寝る」

「ダメです！」

リイナが首を横に振ると、ヴォルフもまた、真剣な顔をして首を  
横に振つた。

「ダメだ、ちびちゃんはしつかり休むんだ。これから先何が起こる  
か分からぬ。旅に慣れてないちびちゃんは、出来るだけしつかり  
と休まないと体が持たない。それに、今夜にはちびちゃんがいなく  
なつたことを神殿が知るんだ。俺まで横になつて眠つて、何かあつ  
ても気付かなかつたのでは困るからな。とにかく、俺に負担をかけ  
たくないと思うのなら、一番助かるのがちびちゃんがしつかり休む  
ことだ。良いな」

「……はい」

リイナが唇を噛み締めて頷くと、ヴォルフが困つたように笑つて

頭をぽんぽんと叩く。

「俺は慣れているし、まだ体も疲れていないわけでもない。宿で眠れるだけ楽な物だ。よくあることだからちびひちゃんが気に病む事じゃない」

リイナはヴォルフを見上げる。

「……ヴォルフ様？」

「なんだ？」

見つめ返していくその視線は以前と変わらず優しい物で。「ありがとうございます」

心の中で、「めんなさい」と言つてしまいたい気持ちを堪えてつぶやく。出来ることをしなければ。今、リイナにできる事、きっとそれは明日に備えて休むことで。

「しっかり休んで、明日は万全になつておきます」

「……それでいい」

ヴォルフがふんわりと笑つた。リイナもこいつと笑つて罪悪感から目をそらせた。

食事が終わる頃には、リイナの慣れない一日の緊張がどつと襲つてきていた。疲れも限界で、動くのも億劫だった。

一人ベッドで寝ることに申し訳なさはあつたが、襲つてきた疲れと眠気を前にすると、リイナはそれを気にかける余裕もなく、あつとこつ間に眠りに落ちたのだった。

「……リイナ、……リイナ、起きられるか？」

眠りの意識の向こうで声がする。

リイナは眠りを貪るつとするが、揺すつてくる手と共に、疑問を感じ、意識を覚醒させてゆく。

「リイナ？ 起きるんだ」

「ヴォルフ様……？」

「……ヴォルフ様！」

リイナは一気に覚醒し、状況を把握し切れていないままにがばつ

と体を起こす。

そうだ、昨日はヴォルフ様とグレンタールを出で。

リイナは厳しい顔をしたヴォルフを見つめる。

「外が騒がしい。見つかるには早いが、念のために、早く出立しよう」

わずかに開いている窓の向こうは、まだ闇に包まれている。夜明けまでにはまだしばらくあるかもしれない。しかし、確かに窓の向こうから響く足音があり、それは旅人や住民の生活の足音にしてはおかしかった。リイナにも分かる、何か目的を持って集団が動いているような足音。

リイナは頷くと、すぐさまベッドから降りて何をしたらいいのか周りを見渡す。

「中は全てそろえてある」

そう言って差し出されたのは、昨日ヴォルフが準備してくれたカバンだ。中にはもう旅の準備ができているらしく、昨日肩にかけた感触と違い、なじむような重量感がある。

「すぐに出る。宿の正面から出ると田に付くからな。一番人目に付きにくい出口が調理場の裏口だ。覚えているか？」

リイナはとっさに、昨夜部屋までの通路を歩きながらヴォルフが示した場所を思い出し、しっかりと頷く。

「出来るだけ音を立てないように。行くぞ」

ヴォルフの後をついて行きながら、今はまだ静まっている宿を出る。裏口から出ると、宿の中から人の足音が複数しあじめた。この宿に入つているらしい。リイナはヴォルフの顔を見上げる。

厳しい顔をしていた彼はふつとリイナに目を移し、人差し指を立てて「シイ」と唇に当てると、「だいじょうぶ」と声を出さずに唇を動かす。

リイナの手を引き、少し離れた馬小屋にたどり着く。この辺りにはまだ誰も来ておらず、宿を改めることが優先されているのがうかがえた。

ヴォルフは手早く荷物を載せ、リイナと共に馬にまたがった。今出たばかりの宿の方で声がした。

「まさか、本当に追っ手か？」

ヴォルフのつぶやきにリイナはドキリとする。

「すぐに町を出るぞ」

ヴォルフは巧みに馬を操り、裏道を駆け抜けてゆく。走つて行く道を見ながら、リイナは、アレ？ と、思つ。

「こつちは……」

来た道を戻つてゐることに氣付いたリイナに、ヴォルフが「山の方に戻る」と耳打ちをする。

今いるヤンセンから港町のカルコシュカまでは、ほぼ一本道であることと、ヴォルフ自身の地の利がなかつた。しかし、ヤンセンからグレンタールまでの山間の道は、鉱山もあることから道が複雑に入り組んでおり、獣道も含め、退路をいくつか取ることが出来る。多少は、ヴォルフの知る土地である事を考えると、ひとまず安全を確保することをヴォルフは優先した。

山道に入ると、辺りが静けさを取り戻したことには氣付く。

「見つからずに出られたたようだな」

ヴォルフはつぶやくと、離れた先の町の様子を眺める。

「……あれは、私を探しに来たのでしょうか……」

不安げにつぶやくリイナに、ヴォルフが「分からない」と、首を横に振る。

「違うと言うにしても、そうと言うにしても確証に欠ける。時間的にあり得ないが、相手は神殿だ。先読みの巫女の宣託という事も考えられる」

「それはあり得ません。過去見は詳しいことを見ることが出来るそういうですが、先読みは大抵曖昧な事柄を示すだけらしいですし、そんなに詳しいことを占えるような巫女は……」

言いかけて口ごもつたリイナに、ヴォルフが静かに告げる。

「一人いるだろ？ エドヴァルドに最高の先読みの巫女が」

「……姫巫女様が、関わっていると……。でも、姫巫女様が先読みをされるのは国と神殿の有事のみです」

「可能性の話だ。だが、姫巫女がおちびちゃんを望んだところで、何ら不思議なことはない」

「……関わり合いのない人です」

「おちびちゃんがそう思つていたとしても、向こうからするとそう言つわけにはいくまいよ。何より、時渡りが出来る姫巫女の『駆け落ち』ともなると、神殿の有事だ。そつはおもわなかいか？」

「駆け落ち」を強調してからかう口調の、ヴォルフに、リイナが耳まで赤く染めて「思いませんよ！」と、軽口を返す。

ヴォルフが笑い、リイナの緊張がわずかにほぐれる。  
「しかし、あのが神殿の追つ手だとしたら、カルコシュカにこのまま向かうと危険かもしれないな」

ヴォルフは今ある可能性を考える。かといって、違うのならば、ここで留まつてはいると出国時期を逃しかねない。

ヴォルフ一人であつたなら強行でカルコシュカまで行き、出国する船に乗る方を選ぶのだが、リイナを連れていては、万が一のことを考えると決断できない。

「……山を越えるか」

リイナの体力的に厳しいところはあるが、女性ならまず選ばないであろう経路となるため、見つかる可能性は低い。  
しかし……。

ヴォルフは前に座るリイナを見下ろす。小さくて華奢な体の少女である。山を越えるとなると体力的に厳しい旅となることは間違いない。耐えられるかという不安がよぎる。

もし、動きが読まれているのなら、どのくらい読まれているのか。姫巫女の力といつても、そう容易く操れる物ではないとは聞いている。

しかし、考えたところで、その答えは出ない。今できる最善を考えなければならない。リイナをより確実に、コルネアから出国させ

るのが最優先だ。

「鉱山の方から国を出る。辛いと思つが、できるな?」

リイナは力強く頷いた。山の中を遊び場に育つていて、ヴォルフの言葉が、辛くて時には危険だと言つことを、リイナは身をもつて知つている。けれど、ヴォルフが一緒なら、迷いはない。

「よし、じゃあちびすけ。愛の逃避行としゃれ込もうか

「な、なに言つてるんですか?」

「確かに、愛の逃避行をする相手としては、もう少し成長して欲しいところが、いろいろあるんだがな……」

と言つた見下ろしていく視線を見上げ、リイナは胸元を押さえながら叫ぶ。

「ど!」見てるんですか!」

「……がんばれよ?」

「何をですか? 何でそんな哀れんだ目で見るんですか?」

わざとらしく切なげに笑いながら胸元を見たヴォルフに、リイナがくつってかかる。

子供扱いして!

そんなふうに憤つている姿が、ヴォルフの目には更に幼さの抜けない愛らしさを感じさせているとは知らず、リイナはむくれていた。

ヤンセンとグレンタールをつなぐ道を引き返すように進んでいたが、時折すれ違うのは商人や旅人ばかりだった。夜も明けて、日も高くなりつつある。そろそろ山越えの為に入る道が見えてきた。しばらくは鉱山へ向かう道と同じくする為に、まだ道はそれなりにされた物だ。

その時、グレンタールの方面に、遠く、馬を駆ける兵士の集団が見えた。

リイナに外套を目深にかぶせると、ヴォルフは、心持ち馬の足を速め、脇道に入る。

この辺りは鉱山とヤンセンを繋ぐ道の為、治安がしつかりしている土地だ。突発的に兵士を出さなければ行けないような事情が何かあつたはずだ。その目的は、

これが姫巫女の探索だとするのならあまりにもタイミングがよすぎる。やはり、巫女の先読みがあつたという事か。

幸いにも木々が、脇道に入つたヴォルフ達の姿を隠す。と、同時に、ヴォルフは馬を駆けた。

「しっかり捕まっている」

あまり平坦とは言えない道を急に駆け出したその不安定さに、リイナの体がこわばるが、振り落とされないように鞍にしがみつく。

山道を進みながら、じばらくすると、遠くで何かを叫ぶ声と、遠くに馬の足音が響いた。いくつか分かれ道があつたが、やはり一人を追つているようであつた。

「追っ手か。……気付かれたようだな」

リイナはその言葉に覚悟を決めるように唇を噛み締める。

ヴォルフは巧みに馬を操るが、一人乗りをしている馬の足では限界があつた。

このまま鉱山へ続く道を進むだけでは逃げ切ることが出来ないが、この辺りは獣道のような脇道が多くある。ここはもつ、馬を捨てて獣道の方に入つた方が良いかもしない。ヴォルフは一つの小さな横道に当たりをつけ、最低限の荷物を持つと馬を放ち、走らせた。

横から覆い被さるように茂つている草を分けながら一人は山を登つてゆく。

「しばらく無理をしてでも進むぞ。この先に吊り橋がある筈だ。それを渡ればいくらでも休ませてやる」

「はい」

リイナが言葉少なく、けれどしつかりとうなずく。

道なき道を上つていいくのは、久しぶりの感覚だつた。神殿から逃れたときの走つていけるようななだらかな下りとはわけが違う。一応道がついているのだが、普段あまり使われていないことがわかる。足場も悪く、これが続くのであれば、かなりの厳しい道のりとなる。けれど、柔な足腰はしてない。子供の頃に培つた感覚もさほど衰えていない。あの頃より大きくなつた体は、以前よりも簡単に進んで行くことができる。

だから、大丈夫。

完全に息が上がつていたが、ヴォルフに後れを取らないように、リイナは必死で足を進める。吊り橋があると言うことは、もうしばらく進まなければ行けない。周りが木々に囲まれているこの場には、わたれるような谷間や川は見えない。

ヴォルフは時折リイナに手を貸しながら進む。馬を先に走らせたとはいえ、おそらくたいした時間稼ぎにはなつていらないだろう。この道に上がる前にも、いくつか獣道に上がつたと見せかける偽の足跡を付けてあるが、ヤンセンでの宿屋の検めといい、このタイミングでの追跡といい、先読みの姫巫女は、かなり正確に自分たちの行動を把握していると考えた方が良さそうだった。

だが、この先の吊り橋を渡つて、橋を落としてしまえば、いくら

先を読んだところで簡単には追いつけないだろう。

必死に足を進めるリイナを励ましながら、ヴォルフは後方に迫りついてきたらしい追っ手の気配を感じる。

あと少しだ。何とか間に合ははずだ。

「辛いだろ？ が、もう少し急げ！」

リイナの手を引くと、現時点でも辛いだろ？ に、彼女はそんな様子すら見せずに、しつかりした顔で肯く。

あと少しだつた。

こつから先は吊り橋に向けて、わずかに足場が慣らされている。ヴォルフはリイナの手をつかむと、引っ張るように橋に向かって駆け出した。

覆われている木々が、橋に向けて岩肌を増やし、視界が開けてくる。

すぐ先に吊り橋があるはずだった。

後方の追っ手の気配も更に近づきリイナの荒い息づかいが限界を伝えてくる。

視界が開けた。

これを抜けねばと安堵したのは、つかの間だつた。

断崖絶壁の山と山をつなぐ小さな吊り橋は、無情にも落ちていた。ヴォルフは駆け寄るとキレイにいた繩の端をつかむ。

「……くつ」

声にならない怒りを漏らし、人為的に切られた繩を投げ捨てた。荒い呼吸を繰り返し、膝に両手をつきながら、リイナがヴォルフを心配そうに見上げた。

この先に道はない。来た道か、断崖絶壁か、どこに続くかも分からぬ道なき岩肌か。

完全に、袋小路に追い詰められた結果となる。戻る道以外、逃げ道などない。

用意周到に作られたこの結末に、ヴォルフはいいのない怒りを覚える。守るどころか、ただリイナを苦痛に追い込んだだけでは

ないか、と。

「……すまない」

ヴォルフは覚悟を決めたように見つめてくるリイナを抱きしめる  
と、少しでも安心させようとぽんぽんとその小さな背中を叩く。腕  
の中で、リイナが首を横に振るのをヴォルフは苦しくなりながら感  
じ取る。

ヴォルフはコシンと、リイナの額に、自分の額を合わせた。

「必ず、守るから、俺の姫巫女の加護でももらつておくか」

そういうて額に口付けると、リイナが泣き笑いのような顔をして  
笑つた。そして、リイナの細い指がヴォルフの両頬をとらえ、そつ  
と、ヴォルフの左の頬にリイナがキスをする。

「役得だな」

ヴォルフが笑うと、リイナが手の甲で目元をぬぐいながら笑つた。  
リイナは何も言わなかつた。ありがとうも、「ごめんなさいも、いつ  
ものリイナなら言つただろう言葉を何も言わず、ただ、全ての信頼  
を預けるように、ヴォルフの背中に手を回し、ぎゅっと力を入れた。  
追つ手の気配はすぐそこまで来ていた。

ヴォルフはリイナを背後にかくまうようにして吊り橋のあつたと  
ころを背に、腰に付けてあつた剣を構えた。

身を隠すことさえできないその小さな足場では、それが精一杯で  
あつた。

リイナの目の前で、追つ手とヴォルフの攻防が繰り広げられてい  
た。

リイナにできることは何もなく、ただ、祈りながら見つめている  
ことしかできない。

せめて逃げ道でもあればと思うが、逃げ場はどこにもない。吊り  
橋の下は、岩肌がむき出しになつていて深い断崖絶壁。伝つて降り  
ることさえできない。落ちたら間違いなく死ぬだろう。

結局はヴォルフに頼るしかないのだ。もしかしたら、ヴォルフ一

人なら、ここから逃げられるだろうか。リイナは、ひたすらに自分が足手まといでしかないことに恐怖を覚える。自分がいるから、ヴォルフは決して逃げないだろう。

ヴォルフの剣を前に倒れていく兵士達から目を背け、どうか、と、リイナはヴォルフの無事を祈る。どれだけの犠牲の上に、自分は逃げようとしているのだろう。けれど、もはや引き返せないところまで来ているのだと、倒れゆく兵士を見ながら漠然と理解していた。争い事さえもまともに見たこともなかつたが、リイナの目にも明らかに分かるほど、ヴォルフは強かつた。数十人いると思われる兵士だったが、細い道を上がってくるという地形上、一対一で戦えるのは、ヴォルフにとつて有利であつたようだ。

それでもヴォルフ一人で戦うのに限界があるのだと、リイナは思つた。

先ほどまで軽くあしらうように兵士を倒していたヴォルフが、次の兵士を前に、風向きが少し変わったのだ。その兵士は、先ほどまでの兵士とは違い、騎士団の制服を纏っていた。それでもリイナの目には互角にやつているように見えたのだが、わずかにヴォルフが押されたことで、後方に控える兵士が隙を突くように前に出てきた。

「……やつ」

剣を持つてリイナに向かつてくる兵士を前に、リイナの足がすくむ。

騎士との攻防を繰り広げていたヴォルフがとつさにリイナを守る形でその兵士の行く手を遮り、切り捨てた。

しかし、そこでリイナを守る為に後方に下がつたことで、わずかな足場に騎士と数人の兵士がなだれ込むように、ヴォルフとリイナを取り囲んだ。

リイナは自分を守るように背後に囲いながら、剣を構えるヴォルフを見つめる。彼の視線は、先ほどまで戦っていた騎士に向けられていた。仮にも姫巫女を連れ帰るための兵士である。追い詰めた余裕もあるのだろうが、足場の悪い崖の際でむやみに襲つてくる様子はない。

他の兵士を押さえるようにして前に立つ騎士はヴォルフより少し年上だろうか。

「騎士が姫巫女を攫うとは……ダリウスが嘆くぞ？」

挑発するように騎士がヴォルフを見た。

「何のことか、分かりかねる」

ヴォルフが白々しく抑揚のない声で返すのに、騎士は余裕を見て笑つた。

「お前の所属する騎士団の団長だろうが」「知らんな」

「腕も、その図太さも嫌いではないが」

騎士は言葉を切ると、ヴォルフに守られながら背後に立つリイナへと目を向けてきた。

「あなたの返答次第では、あなたの剣士は死んでもらうことになる」  
騎士はリイナの視線をとらえて、静かに脅迫をしてくる。リイナは息が止まりそうな衝撃から逃れるように、「クリと息を飲み込んだ。

「聞かなくていい」

ヴォルフは騎士を睨み付けたまま、ぼそりとリイナにつぶやく。

「君は心配しなくていい」

「この期に及んで、そんな口がたたけるとは、ずいぶんと阿呆なんか。それとも、そこな姫巫女様に、少しでも良いところを見せたいか」

嘲るように騎士が笑つた。

「姫巫女。将来有望な、そこな騎士を助けたいのなら、どうぞお帰りを」

「黙れ。そうやってこの子の心を殺す場所になど、やるつもりはない。あなたの言ったとおり、俺は、姫巫女の剣士だからな」

笑つて軽口を叩いているように見えるが、ヴォルフが樂觀視していないことを、リイナは感じ取る。

「帰りません」

リイナは、ヴォルフの背に守られながら、きっぱりと言い切つた。ヴォルフを守りたい。帰ればヴォルフは助かるのかとも考えた。しかし、答えは、否だ。

姫巫女を攫つたとその騎士は言つたのだ。リイナが素直に帰つたところで、ヴォルフがおどがめなし、というわけにはいかないだろう。そして、リイナは、自分には何の力も発言権もないことを、数ヶ月の神殿での生活で理解していた。リイナがいくらヴォルフの身の安全を訴えたところで、聞き入れてもらえるとは思つていない。神殿側のすることをリイナは何一つ信用する気はなかつた。

「あんな場所に戻るぐらいなら、死んだ方がマシです。私を殺したくないのなら、引いて下さい。そうでなければ、私はここから飛び降ります」

震える声で、リイナはきっぱりと言ひ放つた。

死にたくない。死ぬ気などない。ヴォルフがせっかく未来を見せてくれたのだ。死んでたまる物かと思う。けれど、これは取引なのだ。この場を逃げるための駆け引き材料と言えば、もう自分の命ぐらいしかない。そして、価値を認められた命は、確かに交渉の材料となりうるのだと、リイナは身をもつて知つている。

「リイナ、バカなことを言つな」

とがめるヴォルフの声が耳に響く。

ヴォルフの視線は騎士に向けられたままだが、ひどく心配をさせているのだろうとリイナは感じる。ヴォルフが全ての危険を引き受

けて守つてくれて。だからこそ、リイナは力を得た。ヴォルフの背中に隠れて強がつても滑稽かもしれない。けれど、言いたいことぐらい、言ってみせる。

「あんな場所に、戻るつもりはありません。だって、私の大切な人は、誰一人として、私が人身御供になつてまで助けようとする人を望む人はいないもの。私が不幸になつて喜ぶ人はいないもの」

しかし、その言葉を、騎士が子供の戯言というように嘲笑う。

「けれど、あなたが帰つてこなければ、確実にその方々に迷惑がかかりますよ？」

リイナは唇を噛み締め、騎士をにらむ。そして、すぐ側にいるヴォルフの服をぎゅつとつかんだ。

「私の大切な人を一人でも不幸にした時点で、神殿は時渡りの姫巫女を失うでしょう」

震える声で、しかしきつぱりと言ひきつたリイナに、騎士がわずかに眉をひそめ沈黙する。

「……国外に出してしまうよりは、今ここでなくなつていただいた方が、マシ、でしょうかね？」

静かに、騎士がつぶやいた。

リイナを射貫くようなその瞳に、リイナは恐怖に震えた。本当に殺されるかもしれない。

脅しているだけだと、と、理性では思う。けれど、もしかしたらと、いう不安と、本能的な恐怖が、リイナを恐慌状態に陥れようとしていた。

恐怖に耐えるように、リイナはヴォルフの服を強く握りしめる。厳しい顔で騎士を睨み付けているヴォルフが、囁くようにつぶやく。

「大丈夫だ」

ヴォルフが騎士から守るように、リイナを騎士から隠す。

「それは姫巫女に仇なす言葉と受け取るが……？」

「もちろん、最悪の事態に至るのなら、といつ仮定ですよ、姫巫女様？」

リイナの視界はぼぼヴォルフの背中で隠れている。しかし、騎士のいる方向から、リイナ達に向かう足音が聞こえた。

ざくり、ざくり。

大きな音ではないが、その足音はリイナの耳に、この逃走の終わりを告げるかのように響いた。

「……来ないで下さい……！」

リイナは叫んだ。

すぐ後ろは崖。あと二歩、後ろに下がれば、足場はない。死にたくなかった。死ぬ気などなかった。

命を取引の手段にしたのは、ただ、恐かっただけだつた。神殿に戻ることが。そして両親が殺されてしまうかもしないことが。そして、こんな所までヴォルフに付き合わせ、彼に罪を背負わせることが。

けれどあくまでも、取引の手段でしかなかつた。

死にたいなど、欠片ほども思っていない。

ただ、今の間際、ほんの少しだけ。自分が死んだ方が良いのではないかと、ほんの少しだけ思った。一人ならば、ヴォルフは逃げられるのではないかと。

その思いがリイナを一步後ろに下がらせた。

しかし、目をそちらにやり、眼下の断崖絶壁にリイナは身震いをする。

死んでしまおうかと思った気持ちが急速に恐怖で萎えた。死にたくない。その崖は恐ろしくて、この崖を飛び降りるのは無理だと思った。

けれど、リイナの持つ選択肢には、望む物は一つもない。目の前には、じりじりと距離を詰めよつとしている騎士がいる。

死にたくはなかつたのだ。飛び降りる気など、本当になかつた。だから、その瞬間は、ただ、恐怖と躊躇いと、選ぶことの出来ない決断を突きつけられて、少しだけ、無意識に後ずさつただけだった。

た。

なぜこの崖の際で足が動かしたのか。

「きやあ！」

がらりと音を立てて、リイナの足場が崩れた。

リイナの体はバランスを崩し、崖に向けて体が倒れて行く。  
うそ……。

リイナの頭の中が真っ白になつた。自分を支える物のない浮遊感だけは理解できた。片足は確かに地に着いていたのに、落ちる先に地面はなかつた。

無情にも、とつさに握りしめていたヴォルフの服からも滑るよう手が離れ、体は宙へと投げ出される。

不思議なほど何が起こっているのかはつきり分かるのに、体がそれについて行かない。体が、崖の下へと吸い込まれているかのように感じた。

瞬くほどの時間なのに、不思議なほど田の前の景色はゆっくり、ゆっくり動いていて。

リイナの、ゆっくりと動いていく視界の端に、ものすごい形相のヴォルフがうつる。

「リイナ！」

そう叫んでいるように見えたが、声は聞こえたような気もしたし、聞こえなかつたような気もある。

その直後、ヴォルフがリイナに向かつて手を伸ばし、そのまま崖から身を投げるようになるとその体が宙に舞う。

ヒツと、胸の奥が萎縮した。

ヴォルフ様！！

リイナはゆっくりと過ぎる瞬くほどの瞬間に、何が起こっているのかを明確に知る。

ヴォルフが死んでしまう。

その事実はリイナの体を打ち抜くよつた衝撃となつて認識される。それは途方もない恐怖となつてリイナの体を突き抜けた。

言葉にならない感情がリイナの中を駆け巡った。

「いやああああああああ！」

田の前が真っ白になつた。

そしてそのまま絶望と共に、リイナの意識は途切れた。

その部屋では、紫泉染を纏つた神官と、男女の守人が、テーブルを挟んで向き合っていた。紫泉染を纏う神官が、守人たちと対等に向き合っている時点で、不自然とも言える状況であった。しかし、当の守人二人は、堂々と神官に向き合っている。

「で、あなた方は何も知らない、と？」

溜息を漏らすエンカルトに、コンラートは白々しく肯く。

「さつきから、そう言つているだろ？」「

リイナが家を出て丸一日以上が経っていた。コンラートとラウラは明け方の姫巫女脱走騒動でも、確かに捜索に加わっていた。

エンカルトは、呆れたように溜息をついた。それは先日までとの様子と違い、いくぶん気安さのような何かががこもっている。

この場に、三人しかいないという、旧知の仲であるが故の氣のゆるみもあれば、問題となっている本人がいない氣楽さがコンラートにあつたからかもしれない。

「私がそんな事を信じるとでも。リイナ様が、あなた方を頼らないわけがないでしょ？」

「リイナが神殿を抜け出した時刻、私もラウラも、他の守人と共にいた。娘が親を頼ったとて何の不思議もないが、現実的に私達は何の関与もしてないのは、明白だろ？」

何でもないよう言い放つたコンラートに、神官が鼻で笑つた。

「そう、あなた方は、その時刻、確實な関与否定が出来る状態にあつた。意図的とも思えるほどに、確実な証言がされている。けれど、それは時渡りをしたリイナ様と会つていなかつた証明には、ならぬいのですよ」

神官の言葉に、コンラートは大げさなほどに困つたような声を上

げた。

「それこそ、言いがかりだ。そんな事を言つのならば、誰もが、リイナを助ける関与が出来る。もつとも、仮に関与していたとして、だ。私達をどうする？ 牢にでもぶち込むかい？ それとも処刑を？ そんな事をすれば、リイナは絶対に、神殿に『する』ことはなくなるよ。分かつていいだろう？」

「ここにこと笑つたコンラートに、神官は、深く息を吐いた。

「……それが、狙いですか」

「私達は、身の安全が保証されれば、それでいい。出来るだろう？」コンラートの口調は、神官がその言葉を飲むと信じて疑つていなし。神官もまた、それを感じ取り、そして結局は溜息と共に肯いた。

「……多少の拘束は免れません」

「なに。ラウラに乱暴なことさえしなければ、私は妥協しよう」

エンカルトは腹立たしそうに溜息をつき、コンラートの隣に座るラウラを見た。彼女は動じた様子もなく、微笑むと、「ようしくお願いします」と軽く頭を下げた。

「……全く、あなたといい、姫巫女様といい、何故その女に……」

思わず、といつよに言葉を漏らした神官に、コンラートが楽しげに笑つた。

「ほう。彼女も、ラウラの安全を君に約束させたのか。それは良い。心強い限りだ。なら、後は、好きにするがいいぞ」

「……全く、あなたは……」

この期に及んで、私をあごで使うのかと、溜息混じりに、それでも受け入れようと頷きかけた時であった。

いくぶん乱暴に扉がノックされた。

入室を許可したとたん、兵士が慌てた様子でエンカルトの側まで駆け寄つた。

「エンカルト様！！」

慌ただしい様子に、エンカルトが眉をひそめる。

「騒がしい」

「申し訳ありません。早急にお耳に入れたいことが  
兵士はちらりとコンラートに目をやる。

「なんだ」

耳打ちされた内容に、エンカルトが固まる。そして、その視線がコンラートをとらえたことで、彼は察した。

「……リイナのことか」

コンラートの視線を受けて、エンカルトは、わずかに躊躇い、そして覚悟を決めたように肯いた。

「……リイナ様が、崖から落ちて、行方不明だと……」

コンラートが立ち上がった。

「どういう事だ」

神官と兵士に向けて問いかけるその顔は、表情が抜け落ちたように感情がうかがえず、声も限りなく静かで冷静にも見える。

「何があつたんだ」

返つてこない返事に、コンラートがもう一度静かに、けれど念を押すようにゆづくりと言葉を向ける。

詳しい話を聞くに従つて、コンラートの眉間の皺が深くなつてゆく。拳が白くなるほど強く握りしめられていた。

ヤンセンの鉱山を抜けた先の崖際に一人を追い詰めた後、説得中、姫巫女が誤つて崖を落ち、直後一緒にいた男も後を追つよつに崖を飛び降りたというのだ。断崖絶壁のそこは、落ちたらまず命はない。ただ、上から見た限りでは、落ちた二人の姿は確認できなかつたという。詳しく捜索されるとこうことだが、現時点ではまだ何も分かつていないので兵士は言った。

話を聞き終えた直後、静かに話を聞いていたラウラがゆづくりと立ち上がった。

ひどくこわばった顔で、堪えきれない怒りがその表情から見て取れた。

浅い息を繰り返し、今にも泣き出しそうなほどに目を赤くして、体を震わせていた。

そして、エンカルトの側まで来ると、紫泉染の衣を無造作につかんだ。

兵士がそれを止めに入ろうとしたが、エンカルトが、無言でそれを遮る。

ラウラは、その顔を見上げて、顔をゆがませた。

その神官の顔は無表情だった。そこに、何の感情も読み取れなかつた。

リイナが死んだかもしれないというのに。この男は、何も。そう思うと、ラウラは、荒れ狂う感情があふれ出すのを押さえられなかつた。

「……あなたが！！」

ラウラが叫んだ。

「あなたがリイナを死へ追いやつた！」

彼女のやりきれない苦しそが、怒りと悲しみとなつて悲鳴になつた。

「リイナを返して！！ リイナを返しなさい…………！」

あふれる涙をぬぐいもせずにラウラはエンカルトにつかみかかる。それでも無表情にラウラを見下ろすその顔に、ラウラの苦しみは更にあふれ出した。

「どうして、あの子を追い詰めるようなことをしたの！ 姫巫女というのなら、無理矢理連れていくのなら、相応のやり方があるでしょう！！ あなたはそれを怠つた！ 何が神殿のため！ あなたはただ私情をあの子に背負わせただけじゃない！ あなたのおごりが、あの子を殺したのよ！ 殺すぐらいなら、なぜあの子を連れて行つたの！ 殺すぐらいなら、なぜそつとして置いてくれなかつたの！ 何が神殿のため！ 自分の欲望を、コンラーに見捨てられた悔しさをあの子にぶつけるような愚か者が！ 逃げ出すほどに追い詰めておいて、なにが恥知らずにも神殿のためなどと！ あの子が駒だといらのなら、あなたは駒すらもまともに扱えない無能の癖して！ あの子が姫巫女なら、あなたが死んであの子を守るべきでしょ

う！ なぜあなたが生きているの！ 姫巫女を一人殺しておいて！  
死んで償いなさい！！ 死んであの子にわびなさい！！ あなた  
が死になさい！！」

「……ラウラ」

狂ったように罵声を浴びせかけるラウラを、コンラートが抱きしめると、彼女はそのまま娘の名前を叫びながら泣き崩れた。

もう一度止めに入ろうとした兵士をエンカルトが下がらせると、それと入れ替わるように、一人室内に入ってきた者がいた。

娘の名を呼びながら室内に響くラウラの嗚咽に、歩み寄るその人物の足音はかき消された。けれど、静かにその人は彼女に向かつていた。

それに気付いたエンカルトはすぐに礼を取り、コンラートはまつすぐにその人物を見据えた。

「ラウラ」

その人物は静かな声で、泣き崩れた彼女に呼びかけた。さほど大きな声ではなかつたが、人の氣を引きつける、深みのある穏やかな声だつた。

ラウラがびくりと震え、のろのろと顔を上げ、初めて他に人がいることに気付いたように、その人物を見た。涙に濡れたその顔が驚きに固まる。

「……エリノア様……！」

ラウラは、その人の名を呼んだ。何年も会つ事のなかつた、最も敬愛する人の姿だつた。

彼女の姿をとらえたラウラの目から涙がぽろぽろとこぼれ落ちた。エドヴァルドに戻つたはずの、先読みの姫巫女であつた。

「も、申し、申しわ、け……ありま、せん……！」

駆け寄ると、その足下に彼女は頭をこすりつけた。こぼれた涙が床に染みを作る。

「あなたからお預かりした、御子を……！ 命をかけてお守りする」と誓つた御子を……！」

姫巫女は、ラウラが床に頭をこすりつけてわびるのを切なげに見つめ、そして、膝をつき、その体を抱きしめた。

「……ラウラ」

優しく切なく響くその声が、そして抱きしめる腕が、ラウラをゆっくりと落ち着かせる。

「エリノア、様、姫巫女様が、膝などをついては……！」  
我に返ったラウラが、慌てて、自分を抱きしめる女性を気遣う。  
「私達以外、誰もいない間くらい、友達を抱きしめて、良いでしょう……？」

微笑んだその顔は、慈愛にあふれていた。

けれど、ラウラは、首を横に振る。

「あなたの信を受けてお預かりしたのに、私がのうと生きて……」

「……子供は、親の元から、いつかは飛び立つてゆく物。大丈夫。あの子は、あなたの庇護から飛び立つただけ。……今まで、本当にありがとうございました。私では決して与えることができなかつた物を、あなたが全てあの子に与えてくれた。あなただつたからできた。……感謝しています」

ただの慰めには聞こえなかつた。窺つよう姫巫女を見つめると、彼女はラウラを見つめて、切なげに微笑んだ。

「あの子は、定められた子。私達の……いえ、あなた達の元を飛び立つよう、定められた子だったのです……」

姫巫女は、静かにつぶやく。

「私は、全てが回り始めるその時まで、何者にも秘して語らず、己の裁量さだめでの子を導くのが宿命。全ては、時の流れにさだめられたままに」

アルファポリスのファンタジー大賞は9月いつぱいで終了しました。開催期間中、頑張って更新してみたのですが、読みに来て下さった方、その上ありがとうございました投票をして下さった方、ありがとうございました！

とても、とてもうれしかったです！

ランキングとしては、とても1ページ目に届きませんが、私には、もつたないぐらい良い結果でした。（私が最後に見た時は60位ぐらいでした。ぱちぱちぱちーちょうど、最終日に体調崩したのが、痛かったです。くすん）

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7359s/>

---

時渡りの姫巫女

2011年10月3日14時08分発行